
恥ずかしいセリフの何が悪い！

黒猫紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恥ずかしいセリフの何が悪い！

【Nコード】

N4167K

【作者名】

黒猫紅葉

【あらすじ】

二人は大学一年生。一人は大和撫子と噂される美少女。

一人は一人っ子に見られがちな男の子。二人は辞書をきっかけに一緒にいるようになる。

奇妙な二人の関係とまどろっこしい二人が送る日常

登場人物（前書き）

さほどネタバレはしなないと思いますが。うっかりネタバレする危険性有りです。

登場人物

家族紹介で一気に人数が増えたので書いておこうと思います。

山城 梢やましろう
しずえ

18歳 大学一年生

女の子

誕生日 11/28

黒髪、三つ編み、辞書を常備。

天然

口癖「正しい」

臭いセリフ、恥ずかしいセリフをたまに言ってしまう。

――家族構成――

母親：検事

父親：医者（内科医）

お手伝いさん：宮下 翔子みやした
しゅうこ

本当にお嬢様（箱入り娘）

鼓 秀平つづみ
しゅうへい

18歳 大学一年生

男の子

誕生日 7/16

お節介、世話焼き。

4人兄弟の長男。

外見 イメージ一人っ子、クール

内面 (性格ではなく行動が) 優しいお兄ちゃん。爽やか青年。

――家族構成――

長女 奈々緒ななお 高校生1年生

二男 修介しゅうすけ 中学2年生

二女 南夏ななつ 小学6年生

母親：ベビーシッター

父親：サラリーマン

木野村きのむら 博樹ひろき

21歳 大学2年生

誕生日 5/9

見た目、穏和で好青年。笑顔を絶やさない。

イタズラ好きで腹黒。しかも嘘つき

サークルボランティア部に所属(一人)

留年している。理由は不明。

脇キャラ(そんなに登場しないかもしれない人達)

三善教授みやoshi

大学教授 セクハラ親父。

川端明日也かはばたあすや

秀平の中学時代の同級生。同じ大学の同じ学部に通う友達。

4 / 2 新キャラ追加。

6 / 2 5 新キャラ追加。

8 / 1 7 新キャラ？追加。

1話 全ての始まりは広辞苑。

現実には小説より奇なりと誰かが言っていたような気がする。

高嶺の花と呼ばれる女の子、口を開けば正論ばかり、頑固で全く融通が利かない。

正直近寄りがたかったし、深く関わる必要はどこにもなかった。

けれど時々

「一緒なら何も怖くないでしょ」

なんて言うから。

ほっとけなくなるんだ。

「そのセリフ恥ずかしくない？」

俺が山城やましる 梢こずえと一緒にいるようになったきつかけは奇妙な偶然からだった。

それは、大学へ無事入学し、授業に慣れた5月頃だった。

山城と俺は特に接点は無かった。数個同じ講義を取っていたくらい。けれどそんな人は俺の周りに山のように居て、最初はその存在も知らなかった。

けれどその頃、山城は噂の的だった。

黒いジャケットに白いワイシャツ、くるぶしまであるじゃないかと思うくらいのロングスカートに、長く緩く二つに三つ編みされた黒髪。

加えて綺麗な顔立ちをしていた山城は、大正ロマンとまでは言わないが。モダンな雰囲気を漂わせる大和撫子として噂されていた。

当然、男共が声をかけないはずが無く、講義が終わった直後の山城を囲んだ。切り出しは「サークルとか入った？」とかそんな感じだろう。しゃべり続ける男共をよそに、山城は黙々と後片付けをし、話しかけていることなど全く気にせず席を立ち「もつと時間を有意義に使ってはどうぞです」と言って去って行った。というだけの話だが。

その後コケにされた男共の腹いせで、尾ひれが付きまくった噂は広がっていった。

「山城ってさあ、男とは口聞かないらしいぜ」

「名家のお嬢様ってのは本当なのか」

「社長の愛人やってて、俺たちなんて相手にしないって聞いたぜ」

「大人しそうに見えて実は…」

こういう話は積極的に聞こうとしなくても勝手に入ってくるもので、当然その噂は俺の耳にも入っていた。

バカげた噂だと思っただけでも気にならないと言ったら嘘になる。

授業中俺はこっそり山城を盗み見た。

俺が見たのは後ろ姿だったけど、ピシッと背筋が伸びているのが印象的だった。普通は清楚とかしっかりしているとか思うのだろうけど。その時、俺はなんとなく近寄りたいたいと思った。

それが山城の第一印象。

第二印象は「なんだコイツ」だが、それはその日からさほど日を

おかずにやってきた。

発端は目の前に置かれた広辞苑。

場所はどこかというと大学の図書館の自習室で、あまりの日当たりの良さにつたた寝をし、目覚めたら俺の目の前に広辞苑があったのだ。

置いてある場所から察するに、俺の向かい側に座っていた人がしまい忘れたのだろう。親切心から本棚に戻してやろうと広辞苑を手に取ると裏表紙に油性マジックで名前が書いてあった。

山城 梢

あの子の私物かよ！

手に持っている広辞苑が山城の私物だという事に驚きはしたものの、俺が取るべき行動は一つだった。

数個同じ講義を受けているだけの間柄、高校生じゃあるまいし、クラスメイトとは呼べない、それに俺は山城の存在を知っているが向こうは当然俺を知らない。

そう俺達には何にも関係性が無い。

例えるなら、見ず知らずの人の財布を拾ったのと同じ。

それが広辞苑だっただけで、俺が一方的に相手の名前を知っているだけ。

これがもし財布なら、交番に届ける所だが。広辞苑でしかも大学の図書館内だから俺は自習室から出て、カウンターへ向かった。

カウンターは主に本の貸し借りをする場所だが、インフォメーションのような役割を持っている。

俺はカウンターにいた中年の男に声をかけた。

「すみません、自習室に忘れ物があったんですけど」

男は差し出された広辞苑を見て微笑んだ。

「変わった落とし物だね」

忘れ物だと言ったのに、落とし物に勝手に変換されている。だが、そんな些細な事を気にする理由は無く。

「まあ、俺が落とした訳じゃないんで」

と俺は男に広辞苑を託して図書館を出て行った。

そこで俺としてはこの出来事が終わるはずだった。

事件は翌日の昼頃に起きた。ソコソコ話す男達と共に、学食へ向かっていった時だ。

俺の前に立ちほだかるようにして山城が現れた。

「鼓つづみ 秀平しゅうへい少し時間はありますか」

山城が俺の名前を知っていたことにも驚きだが、あの高嶺の花の城山が俺に用事がある事に衝撃を受けた。

周りの反応も俺と同じだったようで、信じられないものを見るように山城を見ていた。

「…ああ。悪い先に行つててくれ」

俺は片手を軽く上げ男達から離れると、山城と並んで歩いた。

その後「大和撫子が話しかける伝説の男」と事実とは思えない噂が駆けめぐり、俺はシャーペン1本折る羽目になるのだが、それはまだ先の話。

「あの、広辞苑を届けて下さり。ありがとうございます」

「いえ、そんなこと…。なんで俺が届けたって」

あの場に山城は居なかつたはず。居たら直接渡すし…。

「預かっていた図書館員さんにどんな人が届けてくれたのか聞いたら。あなたの名前を教えてくださいました」

あのおじさんが俺の名前を知っていることに不思議はない。広辞苑を届けるついでに本を借りたから名前なんていくらだって確認できる。

「それでわざわざ」

「今まで辞書を忘れるた事が数回ありましたが、どの辞書も下心ア

リアリな男の人がわざわざ私の所まで直接届けに来ました。
あの人はどうやって私の居場所を知るんでしょう。少々気になる所です」

綺麗な花には棘があるって誰かが言っていたけどその通りだなと俺は共感した。

山城が言っている事は事実だろうが、そんな言い方しなくても…。あしらわれ続けた男共に同情する。

「けれど、あなたは違った。辞書が無いと気づいたのは図書館を出て間もなかったので、すぐに戻りました。」

まだそこにあるかもしれないと思ったからです。そしてら図書館員さんが私を呼び止めて「あなたの忘れ物じゃないかい？」と辞書を渡してくれました。

私は感動しました。今まで辞書を置き忘れて5分とたたない内に元の場所に戻ったのに、辞書は無く。

戻ってくるのに最低3日はかかっていたものがその日の内に戻ってきたのです。

あなたの行動は実に正しい」
「でも、直接届けてくれた人の方が親切じゃない？」

直接届けるなんて思いつきもなかった俺は忘れ物ですらチャンスと捉える男共のエネルギーに感服する。

しかし、そんな男心は山城にはわかってもらえないらしい。

「私の知り合いであったり、顔見知りの人であればその行動は正しいですが。」

初対面の人の忘れ物を直接本人に渡すのはおかしいです。

あなただったら、道で拾った財布を入っていた免許証をたよりに落とし主を捜しますか。

それはおかしいです。正しくは交番に届けるべきです。もし、落とし主を捜せたとして「先日、落としましたよね」と笑顔で言われて表面上では感謝しますが、内心気持ち悪いと思います。

私何か間違っていますか」

「いや、間違っていないと思う」

俺には間違いだろうが、正解だろうが正直どっちでもいい。

けれど、山城は嬉しそうに広辞苑を抱えなおした。

たかが辞書、されど辞書。

山城が俺に向かって、微笑んだ。

「あなたは見た目よりも暖かい人です。お日様の匂いがします」

なんだコイツ。それが山城の第二印象。

今思えば、この時からだと思う。山城をほっとけない、と思ったのは。

1話 全ての始まりは広辞苑。(後書き)

梢ちゃんは結構、喋ります。

冒頭部分を修正。梢ちゃんはツンデレじゃなかったの。
ンデレを書けないだけ…。(私がツ)

2話 辞書を携帯する人

あの日以来、俺は山城と顔を合わせる事が多くなった。

「鼓、ちょうどいい所へ来ましたね」

山城は段ボールを抱えて廊下を歩いていった。

講義の後にお互いに声をかけたりはしないが、こうして廊下で会って話したり、図書館の自習室で会ったり、この前は学食を注文する時にたまたま山城が前にいて、流石に驚いた。

今日は午後から講義で俺は大学に来たばかりだった。

「なんだ？」

「この段ボールを持って下さい」

山城は大きな段ボールを俺に押し付けた。

大きさの割に段ボールは軽かった。何も入って無いんじゃないかと思うほど。

「助かりました。もうすぐで辞書が落ちる所でした」

山城は脇に辞書を挟み直し、段ボールを受け取るうと両手を伸ばした。

「これ、中身入ってるの？」

「やっぱり、軽すぎますよね。私、これから三善教授の部屋に届けに行くんです」

三善教授と聞いて俺は嫌な予感がした。あまり良い噂を聞かない人物。噂は当てにならない事はわかっているが、用心しておくに越したことはない。

「暇だし、持ってやるよ。三善教授の部屋だろ」

「いけません。私が頼まれた事です」
数回話せばわかる事だが山城は頑固だ。全く融通がきかない。
「助けを求めたのは山城じゃないか」
「だから、そこまでお世話になるつもりはありません」
「また、辞書が落ちそうになったらどうするの？」
「……」
「じゃあな」

山城は「でも…」と何か言いたげだったが無視して歩いた。しかし何を思ったのか山城は俺と並んで歩きだした。

「鼓一人に任せるほど無責任ではありません」
「たかが段ボール一つで責任感を持つ事はないと思うのだが。無下にする理由はなく、一緒に廊下を歩いた。」

初めて会った時は広辞苑。今日は英和辞書。
話を聞く限り、山城はいつも辞書を持ち歩いているらしい。

「山城はなんでいつも辞書を持ち歩いているんだ？」
「だって、これくらいの重みがないと身を守れませんから。頭部への打撃には効果がありますし、投げれば大きな音が出るので隙も生まれます」

「ごっ護身用？辞書が…。」
「それに読むと意外と面白いです」
本来の辞書目的とは違う所で思いつき活用されてる。活用されてるからまだいいのか？

「でもそれって、最低でも片手が空いてないと駄目だな」
そうさっきの山城みたいに段ボールで両手で塞がっていたら頭部への打撃も何もできないだろう。

…まさか三善教授は全てを予測した上でこの段ボールを山城に持たせたのか。確かに両手は塞がるし、軽い段ボールを投げた所で威

力も音も出ない。

「それもそうですね。…やはりスタンガンを携帯するのが正しいでしょうか」

「いや、防犯ベルにしてくれないか」

そうこうする内に三善教授の部屋の前まで来た。

コンコンと山城がドアをノックする。俺は両手が塞がっているので当然そうなる。

「どござ」

三善教授はわざわざ自分からドアを開け、俺の存在を見るとあからさまに不機嫌になった。やっぱりセクハラ目当てだったのかよ。

「この段ボールはどこに置けばいいですか」

「そこに置いといてくれ」

俺はさっさと段ボールを置き、部屋を出た。山城は律義に「失礼します」と頭を下げ、部屋を後にする。

歩いている廊下は研究室などの部屋が多いためかあまり人がいない。

そんな場所で突然、山城が言った。

「私の側に居て欲しいです」

「はあ!？」

「そうすれば、辞書を持ち歩かなくても済みます」

ケロリと山城は言った。

辞書と一緒に俺が??

「教授ともあるう人が学生をあんな邪な目で見るとは正しくありません」

男の下心がわかる山城に三善教授の下心に気づかないはずが無い。いや、あの段ボールを頼まれた時に気づいてもいいと思うけど。

「鼓が居れば大抵の問題が回避できると思います。今、実際に回避されました」

山城の言いたい事はわかった。つまり俺は辞書の代わりで、山城は自分の身を守れると言っているだけ。わかった、わかったけど…。

「山城、もっと普通の言い方があるだろ…」

誤解されてもおかしくないセリフをサラッと言わないでくれ。無駄に心臓がドキドキするし、誤解した俺が恥ずかしい。

「普通？普通に言っただつもりですけど。…けれど、全く同じ講義を取っている訳ではありませんし、物理的に常に一緒にいることとはできませんね」

こうして山城はこれからも辞書を携帯する事となる。

3話 無自覚と下心。

段ボールの一件以来、三善教授は俺に突っかかってくるようになった。

と言っても小さい事で、雑用を押し付けたり、集中的に当てたり、面倒な事に変わりないが成績を下げるなどの理不尽な事はされてないので抗議する程でも無いと思っていた。

唯一の救いは、三善教授の講義を一つしか取ってないという所。

「鼓、ちよつと来なさい」

講義が終わり俺は三善教授に呼ばれる。この数回の呼び出しで教室内では俺が雑用係だと認知されるようになった。

「これを私の部屋まで運んでくれ」

渡されたのは講義で使った数冊のファイル。

これくらい自分で持ってけよ。と言いたい所だが、教授にそんな事を言ったら後が面倒なので黙ってファイルを受けとる。

「では、このファイルを2時に届けて下さい」

三善教授の小さな嫌がらせ。三善教授は決まって時間指定をし余計な手間をかけさせる。

けれど講義の時間に被せて指定しない。面倒だが、さほど迷惑を被っていない。

後で聞いてみたが、山城も時間指定されていた。

それは時間がたつぷりある時に何かをしようと考えていたからで、俺の場合と意味が違う。

やる事が小さいのか、計算されてるのかわからない。
が、面倒な事に変わりない。

その後、俺は余計な荷物を持って昼飯を食べ、講義を受けた。そして2時。三善教授の部屋を訪れた。

「失礼します」

ファイルを空いている机に置いてさっさと部屋を出て行くつもりだ。

「鼓、少し待ちたまえ」

俺は初めて三善教授に呼び止められ、正直戸惑った。

「君は山城君と付き合っているのか」

何を言ってるんだこのオッサン。と口に出さなかったのは奇跡だった。

「：付き合ってますんけど」

言った後で、付き合ってると言った方が俺への面倒行為が無くなるんじゃないかと思った。

しまったな。山城の正直さでも移ったか？

俺の言葉を聞いて、三善教授はあからさまにホッとしていた。俺の前だと思いだしたのか咳払いをして何とか格好を繕う。

「なら、君だつて私と同じじゃないか」

俺は三善教授の言葉を無視して形式だけ「失礼します」と言っ
て俺は部屋を出た。

「鼓」

「山城、奇遇だな」

三善教授の部屋を出てしばらく歩いた廊下の壁に山城がもたれかかっていた。

「奇遇ではありません。待ち伏せしてたのです」

「山城、少しは嘘をついた方がいいんじゃないか」

待ち伏せと偶然では受け取り方が全然違うのだけど。

「私、理由の無い嘘は付けられないんです」

「どういうこと？」

「つまりですね。相手を傷つけない為とか、気遣いとかそういう理由があれば嘘をつきますよ」

裏を返せば、自分の為には嘘がつけないという事だが自覚あるのだろうか。…無さそうだな。

「いえ、そんな事を言い待ち伏せしていたのではありません。三善教授にイビられているというのは本当ですか」

そんな事どこで聞いたんだが。まずイビられてないが周りからそう見られてたんだらうか。

「イビられてはいないけど、雑用押しつけられたりはしてる」

「段ボールですかっ！」

いや、それは山城だけだから。

「そうじゃなくて…まあ八当たりみたいな感じだ」

「けれど、原因はあの段ボールでしょう」

このまま話していたら山城は教授の部屋に乗り込むと容易く想像がつく。

そんな事になったら後にも先にも面倒で迷惑だ。

「そうだ、山城はあれから三善教授に何もされてないか」

「はい。言いられる事ありませんし、あれからは実に平和です」

「それなら良かった。じゃあ…」

「そうじゃなくて。…私、三善教授に抗議します。あの人の態度は正しくありません」

折角話を反らしたのに、山城は反らされる事なく真直ぐに戻ってきてしまった。

山城はツカツカと廊下を歩き出す。

「山城、待てっ！」

俺は山城の肩をとっさに掴んだ。けれどあまりに細い肩に驚き俺はすぐに手を離した。

山城は振り返って止まる。その目は驚いていた。

その澄んだ瞳が俺を見る。

山城と一緒に話せて嬉しくないと言えば嘘になる。

「俺は教授と同じか？」

すぐに我に返った。

うわあ、待て俺なんでこんな事言ってるんだ。

「やっぱ、今の無し。忘れて」

けれど、山城は無かった事にしてくれなかった。

「三善教授にそう言われたんですね」

「……」

「鼓と三善教授は違います。三善教授は正しくありませんが、鼓は正しいです」

「鼓がただ一人の人です」

「えっ」

「下心無しで私と話す男の人は鼓が初めてです」

あっ、うん。そういうこと……。ドキッとして損した。

「それってわざと言ってるの？」

「何をわざと言っんですか」

言った山城より俺の方が顔が赤くなっていた。

山城の恥ずかしいセリフは無自覚だった。

「そっか、わかった。気にしないでくれ」

3話 無自覚と下心。 (後書き)

鼓君が意外とウブでした。恋愛に発展できるのか？

4話 外見と内面

突然だが俺の朝は面倒だ。

「修平しゅうへいっ、起きろ！！」

二段ベッドの下で寝る中学二年生の弟を起こす事から始まる。

「あと5分…」

問答無用で布団を剥がす。

「奈々緒を呼ばれたくなかったら早く起きるんだな」

そう言つと修介の目がパチリと開いた。

「…起きればいいんだろ」

奈々緒ななおというのは高校一年生の俺の妹で前に修介を起こす為ために修介の頭に鍋を被せその上からお玉で叩いた事がある。

それ以来、修介を起こすのが俺の役目。

「そろそろ、一人で起きられるようになれよ」

「明日からガンバル」

部屋を後にし、俺は一階に降りた。

食卓には親父と小学六年生の南夏みなつが白飯とみそ汁をすすっていた。

我が家の朝食は白飯とみそ汁が基本で後は個々で漬物や味のり、納豆を加えて食べる。母さんの機嫌がいいと卵焼きが出てきたりする。

「はい、お待ちせ」

母さんが台所から卵焼きを持ってきた。今日は機嫌がいいらしい。

「秀平、母さん今日夜いないから晩御飯よろしくね」

母さんは時々夜勤のベビーシッターをしている。親父は普通のサラリーマン。

「親父は？今日遅いの」

「今日は早いから、おかずになる物買ってこようか」

「私、伊藤屋のコロッケが食べたい」

と言つて南夏は卵焼きを一口で食べた。南夏は修介に負けず劣らず食べざかりだ。そんな南夏を見て奈々緒は「子供はいくら食べても太らないからいいよね」と自分も子供のくせにそんな事を言う。

「秀平、私の体操服知らないっ！」

制服姿の奈々緒が階段から駆け降りてくるなり言ってきた。

「なんで俺に聞くんだよ」

「だって一昨日の洗濯当番、秀平だったでしょ」

「憶えてない。修介の所に混じったかも」

「はぁ！秀平最低！」

どたばたと奈々緒は階段を駆け上がる。二階では「おい、奈々緒勝手に入って来るな。ちょっと何やってんだよ！」と修介の抗議の声が聞こえてきた。

のんびりと椅子に座った母さんがみそ汁をすすする。

「今日も平和だね」

全くだ。

朝飯を食べ終え、奈々緒の体操服も無事見つかり。

「いつてきます」

俺は大学に向かった。

あれから一度、三善教授の講義を受けたが当てられる事も呼び出される事も無く、嫌がらせはなくなつた。

彼氏じゃないと安心したからなのか仲間意識をもつたからなのかはわからない。できれば知りたくない。

でも面倒事が無くなつたので、それはそれでいいだろう。

あれからも山城とはよく会う。けれどこの間のように待ち伏せる事は無い。

相変わらず会えば話しをする程度。積極的に話しかける訳でも一緒に行動することも無い。

講義後、教室の後ろで男女数人が集まって話していた。

「おい、鼓」

俺はそのグループに声をかけられた。

「なに？」

「今ね、兄妹いるか、一人っ子が当ててるんだけど、鼓君は絶対一人っ子でしょ」

「どうして？」

「だって兄妹いるようにみえないもん」

「兄妹いるよ。俺、長男だし」

「『えー!!』」

その場にいた全員が驚いた。そんなに驚く事か？

ふと思った。山城ならなんて言うんだろう。「見た目だけで人を判断するなんて正しくありません」とか。

「わかった。よくできた妹なんだろ」

「弟も妹も世話焼けるけど」

「えっ、兄妹の面倒みてるの」

「当たり前だ」

俺が助けてやらなきゃ修介は遅刻魔だし、南夏は腹を空かせる。

奈々緒は：まあ大丈夫か。

「えー！全然想像できない」

「俺にどんなイメージ持ってたの？」

「クールで、なんでも一人で出来ちゃうかんじ」

「俺、スゲー奴じゃん」

「まあ、実際凄いだよ」

「ん？何が」

「その話はまた今度ゆっくり聞かせてもらってからさ」
次の講義もあつたので俺達は教室を出た。

「山城……」

山城は無防備に教室で寝ていた。俺は筆箱をこの教室に忘れたと講義が始まってから気づき（その講義は隣の奴にペンを借りた）講義が終わって取りに来たのだが。

誰もいない教室に山城がいた。よく見ると辞書を枕代わりにしている。

そついう使い方もあるのか。

俺は今日使った机から筆箱を取り出し鞆にしまった。

これは起こした方がいいのか。山城の事だから講義をサボった訳じゃないだろう。

でも、来たのが俺だったからいいもの。もしあのセクハラ教授だったら……。

それを想像しかけた俺は山城を起こす事に決めた。

「おい、山城。起きろ」

声をかけると山城はすぐに起きた。眠りが浅かったんだろう。

修介もこれくらい寝起きがよければなあ。

「…鼓、どうしてここに？」

「筆箱忘れて取りに来たんだよ。山城ここで寝るのは無防備すぎじゃないか」

目をこすりながら山城は笑った。

「それは鼓だから気がつかなかっただけです。邪な考えを持つ人が入ってきたら私は無意識でも辞書を構えます」

それは凄い。それともまだ寝ぼけてんのか。

「なあ、山城は一人っ子？」

「そうですね。どうしました？」

「いや、山城にそっくりな妹がいたら面白いなって思って」

「弟ではいけないんですか」

「うん。やっぱり妹だろ」

「鼓は兄妹いますよね」

ハッキリと言われ俺は戸惑った。一人っ子だと言われたばかりだったから余計に。

「えっ、ああ。いるよ、どうしてわかった」

「わかりますよ。鼓からはお日様の匂いがしますから」

そういえば、広辞苑のお礼を言いに来た時も同じ事を言ってた気がする。

「それ、どういう意味？」

「雰囲気と言った方が分かりやすいですか？包む込むような、見守るような、そんな優しさと温かさがあります。それは常に見守るような存在が傍にいるからでしょう」

「どうしたんですか、鼓」

「いやちよっとシヨックだったんだなーて今更思って。俺さ、絶対一人っ子だって決めつけられたんだ」

「なんです、それはっ！見た目だけで人を判断するなんて正しくありません」

「やっぱり、言った」

予想通りの言葉すぎて俺はクスクスと笑った。

「やっぱりってなんですか。それになんて笑うんですか」

笑い続け、ロクに説明しない俺に山城は怒り、俺は危うく漢字辞書で殴られる所だった。

4話 外見と内面（後書き）

今回は鼓君の家族構成をご紹介します。梢ちゃんも臭いセリフ言ってますし、ご勘弁を。

5話 伝説的な噂

それは6月初旬。

この頃、特に視線を感じるようになった。決して自信過剰ではない。

そうだ、女の子からの視線ならまだしも。男共にも見られてるのは…どうにも気分が悪い。

なんだろう。俺の顔になんか付いてんのか？

その時、俺は男共の視線が尊敬の眼差しであったという事実を知らなかった。

講義が始まる前、俺は思いきって隣に座る川端かわばた明日也あすやに聞いてみた。

明日也は中学の時の同級生で、偶然同じ学部で、再会した時は驚いた。

「俺の顔になんか付いてるか？」

「ご飯粒はついてないけど。つーか、昼飯前だし。何つけるの？」

「いや、なんか見られてる気がして」

「あー、それは…。心当たり無いの？」

「だから、顔に…」

「そうじゃなくてさ。…噂になるような事した自覚ないのか聞いているんだけど」

その時、俺は無意識にシャーペンでペン回しをしていた。

ペンがあつたら回す。小学生の時から習慣を直さなかった自分に後悔する事となる。

…噂？俺の？

「俺なんかしたか？」

最近変わった事と言えば三善教授の嫌がらせが無くなった事だが、噂になるような事じゃないし。

「本当に自覚無いんだな。お前、山城との事でかなり噂されてるぞ。ピタリとペンの動きが止まった。しかし、本人は全く気づいていない。」

「なんで？」

「はあ！お前山城の噂知らねーの」

「知ってる、あれだろ。男とは口きかないとかそういう」

「それだよ。男とは口きかない大和撫子がお前とだけ話すんだぞ」

「いや、山城は条件をクリアすれば誰とでも話すよ」

「条件ってなんだよ」

山城の言葉を振り返る。

「あなたの行動は実に正しい」

「下心無しで私と話す男の人は鼓が初めてです」

「鼓からはお日様の匂いがします」

…つまり。

「下心がなくて…兄弟がいる人？」

「あの美女を前に下心の無い男なんているはずないだろ」

スッパリサッパリ、下心が無いと断言された俺は一体何者だ。

「そうじゃなくて、噂だよ。噂。高嶺の花が話しかける男ってもっ

ばらの噂だったんだけど」

過去形。なぜ？

「お前、山城の事で三善教授となんかあったらしいな」

ダンボール事件を誰かに話したりはしてないが、あの直後に俺への嫌がらせが始まったからカンづく人がいてもおかしくない。

三善教授が山城を狙ってるなんて噂もあったしな。

「それは偶然というか…巻き添えをくつたというか」

「で、最近三善教授の嫌がらせが無くなった」

それと噂に何の関係が？

「それで、大和撫子に求愛される伝説の男って噂されてる」

バキッ

「はあ？俺が？」

「伝説の勇者なんてのもあるよ」

「なんでそんな噂になるんだ！」

「少しは自分で考えろよ。自分でまいた種だろ」

「そんな面倒な種まいてねーよ」

「つまりだ、三善教授は山城を狙っていた。まあ、美人だし他の男もそうだけど、教授と俺らじゃ態度を選ばなきゃいけないから。山城も口をきかないなんて事できなかった。

そんな所に勇者のように現れたお前が、山城を魔の手から救い。

三善教授からも一目置かれる存在になった。これが雪だるま式に膨らんで、伝説の勇者になった訳」

「待て、なんで俺が一目置かれてんだ」

「無くなっただんだろ。嫌がらせ」
「……」

「にしても、お前ら奇妙だよ」
「なにが」

「付き合っただねーんだろ」

「ああ」

「友達にもみえないし」

「そうだな」

「お前らの関係ってなに？」

会えば、話をする。けれど、積極的に話しかけたりはしない。
俺と山城は一緒に行動するほど、親しくもない。
偶然すれ違ったら挨拶をするような感覚。

「…知り合い？」

言葉にしてみても気づく。山城との距離はそんなに遠いのか？

「うお！シャーペンが折れてる！」

俺のシャーペンがなぜか折れている。

「今頃かよ。何、無意識で折った訳？」

「これから講義なのに……」

「ホラ」

明日也がシャーペンを差し出した。

「500円」

「友達から金取るなよ！」

「じゃあ、山城さん紹介して」

「……」

俺は明日せから500円でシャープンを買った。

5話 伝説的な噂（後書き）

うっかり、新キャラ登場。この後の話に出てくるか未定。

6話 一言で言ひと。

「俺らってどんな関係？」

俺の前に山城がいる。

講義後。

偶然にも図書館で山城を見つけ、俺から声をかけた。

「山城」

「鼓、良いところへ来ました」

山城は脇に辞書を抱え、両手で本の山を運んでいた。

見覚えのある光景。

「まさかそれ…」

「三善教授ではありませんよ。今日、司書さんが一人お休みなので、手伝っていたんです」

「そうか。また辞書が落ちそうなのか？」

「その通りです。なので、少し持って下さい」

俺は本の山を受け取り、山城は広辞林を抱え直す。

広辞林って…。また分厚い辞書だな。

「ありがとうございます。では」

山城は当然のように両手を差し出す。

…山城は「手伝って下さい」とは言わないんだよな。

山城が一言「手伝って」と言えば、どれだけの男が群がってくるだろう。こんな雑務、簡単に誰かが代わってくれる。

多分、山城もその事に気づいてる。わかっけていて利用しない。なんで？

…正しくないから？

「鼓？」

「…手伝ってやるよ」

「えっ」

「どうせ、まだあるんだろ」

「そうですね、鼓に手伝ってもらう理由がありません」

「また辞書が落ちたらどうする」

「……」

山城は脇に挟んだ広辞林を両腕に乗せた。

「これで、問題ありません」

どうやらそこに本を乗せるという事らしい。

誇らしげに笑う山城には悪いが俺はため息をついた。

「そういう事じゃなくて、俺が手伝いたいの」

「なぜですか？意味がわかりません」

俺としてはそこまで融通が利かない山城の方が意味わかんないけど。

「鼓が手伝っても、メリットは何もありませんよ」

「メリット？」

「はい、人は必ず理由があって行動します。私に近づきたい、一言

話したい…三善教授が良い例でしょう。その人達にはそういうメリツトがあつて行動するのです。けれど鼓が私を手伝つても、何もありませんよ?」

山城が言いたいこともわかるけど…。

「あのさ、山城はどうして司書さんの仕事を手伝つてるの?」

「それは一人で大変そうだったので」

「俺もそうなんだけど」

「え?」

なんでそこで驚く。

「そうだ、ちょっと聞きたいんだけど。俺らってどんな関係?」

ここで友達と言つてくれれば、まだ言いようがある。

けど…ただの知り合いと言われたら…。

「えっと…友人?じゃないでしょうか」

「友人」

「違います。友人?です」

「はあ?」

「ですから、友達と言うほど親しくありませんし、知り合いという程離れてはいません。なので友達より少し堅い言い方で疑問系のよ
うな関係だと思えます。ですから友人?…です」

俺にはわからないようでわかった。

「友人?ね」

「友人?です」

「じゃあ、友人?として山城が大変そうなので手伝いたいんですが」

「私は大変ではありません」

「そこは素直にお願いしますだろ」

「そんなこと?」

「いいんだよ。俺が手伝いたいただけなんだから」

「しかし！」

「それに二人の方が効率的だろ」

「なんで手伝うだけでこんなに手間がかかるんだ。普通説得いらないし。」

「…後悔しても知りませんからね」

山城は俺を図書館のカウンターまで連れて行った。

「これ全部か？」

「全部です」

そこにはダンボール二つ分くらいの本の山があった。

「後悔したでしょ。今ならまださっきの言葉取り消せます」

「これが断る理由か。俺に迷惑がかかるとかそんな事考えてたのか？」

「山城ってアホ？」

「なんですか！いきなり」

「これのどこが大変じゃないんだ。結構あるじゃねーか」

俺は持っていた本の上に更に本を乗せる。

「鼓、手伝ってくれるんですか？」

「さっきからそう言ってるだろ」

「なぜです」

「…友人？だから」

「わかりました、訂正します。私たちは友達です」

「なんだよ急に」

「友達は持ちつ持たれつです。違和感があるなら今から友達になりましょう」

そう言って山城は微笑んだ。

「山城」

「なんです」

「それ結構恥ずかしい」

「え？」

「友達宣言」

6話 一言で言ひと…。(後書き)

やっと「友達宣言」まできた。梢ちゃんの手伝ってもらった事に慣れてないので抵抗があるんです。

7話 お嬢様とロングスカート

友達宣言後、俺は山城に呼び出された。

場所は人気の無い校舎裏。普通の男なら告白か！なんてテンションを上げるだろうが、俺は上がらない。

だって相手は山城だぞ。

頑固で、正しいが口癖で、男の下心に嫌悪を抱く山城だ。

そんな山城が告白なんてする訳がない。

「あの、鼓。お願いがあるのですが」

ほら、やっぱり違った。

「なに？」

「今週の日曜日、私の家に来てくれませんか」

「えっ！」

告白をすっ飛ばして、いきなり家！

「迷惑ですか？」

「いやっ」

落ち着け、相手は山城だ。そうだよ、きっと家の電球が切れて困

ってるんだ。ああいう時男手があるといいつて母さんが言った。

「鼓？」

「んっ、電球を変えるんだっとな」

「なぜです？」

…違うのか。よし、わからないなら素直に聞いよう。

「山城、なんで俺は山城の家に行くんだ？」

「父と母に友達ができたと話したら是非連れてきなさいと」

小学生じゃあるまいし…。っーか親の言葉通り誘う山城もどうかと思うけど。

「それと、私に釣り合う人かどうか見極めると言っていました」

本音はそっちか！そうだよな友達とはいえ、親からしてみれば悪い虫だ。

「あの、それは絶対に行かないとダメか」

山城は困ったように首を傾げる。

「邪魔者ですか？」

誰が！

結局、俺は日曜日山城の家に行くことになった。

日曜日、俺達は駅で待ち合わせた。

「鼓っ」

山城は待ち合わせの五分前に来た。

流石「正しい」が口癖なだけある。五分前行動が身体に染みついている感じだ。

ちなみに俺は電車の都合上、十分前に着いていたけど。

「もしかして待ちました？」

「いや、今来たところ」

おっ、なんかデートっぽい。

山城の服もいつものYシャツに無地のロングスカートスタイルではなく、白いパーカーにロングワンピースで比較的カジュアルだ。

「そうですか。では行きましょう」

俺達は並んで歩き出した。

山城が歩くたびにヒラヒラとスカートが動く。

「山城っていつも長いスカート履いてるよな」

今着てるワンピースも余裕で膝が隠れている。

「鼓は足フェチですか」

俺を勝手に足フェチにするな。

「いや、単純に暑くないのか？」

今日は晴れているが、梅雨のジメジメとした暑さは健在だ。

「いえ、見た目より暑くありませんよ。それにロングスカートでな
いといけないんです」

「なんで？」

「今日は鼓がいるので、持ってきていませんが。辞書が無い時や外
に出かける時に足に警棒を隠しています。ロングスカートでなければ
隠せません」

「いや、なんで警棒を隠すの」

「えっ、正当防衛は罪にならないと母が言っていました」

どんなけ危険にさらされてるんだ山城。

ナンパも命がけだな。

「やはり、ここは警棒ではなくスタンガンが正しいでしょうか」

「まず、防犯ベルを持って」

そんな会話をしている内に山城の家に着いた。

家というか、そこはマンションで…。しかも高級感漂う立派なマンションに俺は正直ビビった。
そんな俺をよそに山城はポチポチとオートロックを解除し、なんか指を押し当てている。

あれが、指紋認証って奴か。スゲー、ハイテク。

ピーという音と共にエントランスのドアが開き、エレベーターに乗る山城の後に付いていった。
着いた先はマンションの最上階。

「ただいまー」

「お邪魔します」

「おかえりなさい、梢さん」

出迎えてくれたのは、エプロン姿のお姉さん。

山城の母親にしては…若すぎる。

「鼓、お手伝いさんの宮下さんです」

「あの、友達の鼓秀平です」

「鼓さん、合格です」

何が…。

「背も梢さんより高く、顔も上の中くらいで中々なイケメン。加えて、この家に来る根性。いいです。梢さんに相応しいですわ」

お手伝いさんの宮下さんとそんなやりとりを終え、俺達はリビングのソファでくつろぐ。

「鼓、宮下さんの事は気にしないで下さい。悪気はないですから」

「そっか」

「宮下さん、父と母は？帰ってきてませんが」

「先ほど連絡がありまして、帰って来られないようです」

「そうですか」

「今、お茶を淹れてきますね」

宮下さんがキッチンへ行き、リビングに二人取り残される。

「なんか意外だな」

俺は向かい側に座っている山城を見た。

「宮下さんですか」

「まあ、それもそうだけど。山城なら約束を破るなんて正しくありませんとか言うのかと思って。俺は気が楽になったからいいけど」
「確かに約束を破るのはいけません、世の中には約束よりも優先しなければいけない事が山のようにありますから」

ふと下がる山城の目線。いつもピシッと伸びた背筋が少しだけ丸くなっている気がする。

「なんだか、山城らしくない。」

「そんなに忙しいのか」

「ええ、人命と正義を放りだしてまで約束を守れなんて私には言えません」

下がっていた目線が俺を捉える。

「ああ、私の父は医師で母は検事です。だから多忙なんです」
そう言っつて、山城は笑った。

「…なんだろう。」

きっと山城が強がりだから……

無意識の内に手が伸び、ポンと山城の頭に置く。

「鼓？」

ほっとけなくなる。

7話 お嬢様とロングスカート（後書き）

意味なくお宅訪問。地味に宮下さんが好き。

8話 初めての友達。

人の頭撫でるの久しぶりだな。

いや、そんな事ないか。南夏はまだ撫でるし、修介は撫でるとい
うか小突く。

奈々緒は…まあ、いつか。

つーか、頭小せえ。髪もサラサラ…。

「あの、鼓…」

「なに？」

「なぜ私は頭を撫でられているのでしょうか」

「あつ、嫌だった」

「嫌ではありませんが…その…」

なでなでなでなで

山城は困ったように俯いて、でも俺の手を振り払おうとはしない。
…全く。

「無理して笑うなよ。心配になるだろ」

ポンと一押しして山城の頭から手を離す。

「…やっぱり、鼓はお兄さんですね」

山城はクスリと笑った。ごく自然に。

「あれ、俺言っただけ？」

兄弟いるとは言っただけど。

「わかりますよ、それくらい」

山城の背筋はいつの間にかピンと伸び、顔は真っ直ぐ前を向いていた。

…ああ、いつもの山城だ。

「鼓君は甘い物大丈夫？」

宮下さんはお盆に紅茶とケーキを載せて戻ってきた。

「大丈夫ですよ」

「宮下さん、そういうのは最初に聞くべきですよ」

「そうだけど、顔的に甘党かなって」

甘党の顔ってどんなんだろう。…あつ、俺か。

「このケーキうまい」

出されたショートケーキは甘過ぎず、品のある甘さで。そこら辺のスーパで売ってるのとは全然違った。

土産に買ってこようかな。

「良かったですね、梢ちゃん」

「え？」

「そのケーキ、梢ちゃんの手作りなんですよ」

「…あの、今日久しぶりに…その、両親と会えるから…もちろん、鼓の事も忘れてませんよ！」

久しぶりに親に会えるって…俺の家は毎日いるからな…。よくわかんねえけど。

「そんなに多忙なのに、家に来いなんて…むしろ俺、迷惑だった？」

「そんな事は無いです。全く！」

「だって、梢ちゃんの初めてのお友達ですから」

お手伝いさんと紹介された宮下さんは山城の隣に座って一緒にケーキを食べている。

山城も特に何も言わないし、俺が言うことでもない。

「？あつ、初めての男友達だから珍しがつて…て事？」

山城の代わりに宮下さんが答えた。

「いいえ、初めてのお友達です」

「えっ？」

「言葉の通りですよ」

「いや、そんな訳ないでしょ」

いくらなんでも、小学生からこの性格じゃなかっただろうし。

「梢ちゃんは凡人が近づくと事ができないくらいの特上クラスの子です。その美しさ故に妬まれ、グループから爪弾きにされたり、虐められたり…」

「鼓、宮下さんの話を鵜呑みにしないで下さい」

「えっ、嘘なの」

「妬まれてたのは事実ですが、虐められてませんし、私の不注意が招いた事です」

うっん。なんで山城はこんなに頑ななんだろう。

最初からそうだったけど。

「梢ちゃんに友達ができたって聞いておじさんとおばさん喜んでたよ。仕事休んでまで会いたがつてたし」

「俺を見極めるとかは…」

「あつ、それは私」

宮下^{あんた}さんか！

「結局、帰ってきませんでした」

「また来るよ」

「えっ」

「友達なんだから、家くらい行くだる普通」

「鼓にそこまでお世話になる理由はありません。今回約束を破った

のは私の両親ですし」

激しいデジャブだ。前もこんなやりとりしたぞ。

「梢ちゃん、そこは可愛くありがとうでしょ」

「宮下さん、意外と話わかりますね」

「どれだけ、梢ちゃんと一緒にいると思ってるのよ」

それは知らない。

「あの…」

一人置いてきぼりな山城。訳がわからないと顔に書いてある。

頑なで甘える事を知らない。

甘えるなんて小学生の南夏でも知ってる事なのに。

「つまり、気にするな。友達だろ俺ら」

山城から友達宣言したくせに。

「梢ちゃんは、はっきり言葉にしないとわかりませんからね。私、紅茶のおかわり淹れてきますね」

「鼓」

「ん？」

「…あっありがとうございます」

「うん」

少しは伝わった…かな。

宮下さんの見極め（？）も終わり、俺は山城宅を後にしようとしてた。

「はい、鼓君」

「なんですか」

玄関先で宮下さんから白い箱を渡された。

「お土産だよ。梢ちゃんの手作りケーキ。6個で良かったよね」

「なんで…」

「四人兄弟じゃなかった？」

「そうですね、なんで知ってるんですか」

「えっ、顔的に」

エスパーか、この人。

「ふふっ、全く梢ちゃんは」

「どうしたんですか」

「私に最初に確認しろって言ったのに、自分は確認せずにケーキ作ってるんだもの。もし、鼓君が甘い物ダメだったらどうするつもりだったのかしら」

「でも、ケーキは両親の為じゃ」

「お土産の分まで焼いて？」

俺に問われても困るんだけど。

「鼓君も梢ちゃんと一緒ね」

「はっ？」

「ハッキリ言わないとわからない」

「いや、山城ほどじゃないと思います」

山城が玄関へやって来た。

「鼓、お待たせしました」

「山城に送ってもらったのも何か間違ってる気がするんだが」

なぜか山城は俺を送っていく気満々だ。普通は逆だろ。

「大丈夫です。ちゃんと警棒を持っていますから」

山城、そんな活き活きと言う台詞じゃない。

「だから、普通に防犯ベルを…」

8話 初めての友達。(後書き)

いつか、宮下さんから見た梢ちゃんを書いてやる！

9話 初めての友達2（前書き）

今回は「初めてのお友達」の山城視点です。
飛ばしても支障ありません。

9話 初めての友達2

なぜか私は鼓に頭を撫でられてる。

どうしてこの状況に陥ってしまったのかサッパリわかりません。

「あの、鼓…」

「なに？」

「なぜ私は頭を撫でられているのでしょうか」

「あっ、嫌だった」

「嫌ではありませんが…その…」

なでなでなでなで

本当は「恥かしいです」と言おうとした。だって大学生にもなって頭を撫でられるなんて子供みたいで恥かしい。でも、言えなかった。その手を拒めなかった。

頭を撫でられるなんていつ以来だろ。

「ごめんね、梢」

「うっん」

「梢、済まない」

「いいよ」

遊園地、動物園、海、山、ピクニック、キャンプ…。
どれも行けなかった。

「次は絶対に行こうね」

そう言って私の頭を撫でる両親の手。

もしかして、それ以来？

でも、今と昔じゃ全然違う。

鼓の手は誰よりも温かい。

「無理して笑うなよ。心配になるだろ」

ポンと一押しされ頭から手が離れる。

「……やっぱり、鼓はお兄さんですね」

優しい手をしてる。温かい手をしている。

「あれ、俺言っただけ？」

「それくらいわかりますよ、それくらい」

本当にお日様の匂いがする。なんて不思議な人なんでしょう。

しばらくして宮下さんがお盆に紅茶とケーキを載せて戻ってきた。

「このケーキうまい」

ケーキを一口食べた鼓の顔がほころぶ。

あつ今、絶対家族の事考えてる。

こんなに分かりやすい人なのに、どうして一人っ子だなんて誤解されるんでしょう。

まったく不思議です。

「良かったですね、梢ちゃん」

宮下さんニマニマし過ぎです。

「え？」

「そのケーキ、梢ちゃんの手作りなんですよ」

ああ、余計な事を！

浮かれて調子に乗った自分が恥かしいです！

「あの、今日久しぶりに…その、両親と会えるから…もちろん、鼓の事も忘れてませんよ！」

張り切って作ってしまったショートケーキ。

両親と鼓と一緒に食べられたらいいなって思って作ったケーキ。

「そんなに多忙なのに、家に来いなんて…むしろ俺、迷惑だった？」

「そんな事は無いです。全く！」

はあ、折角来てくれたのに気を使わせてしまいました。

そんな落ち込む私の隣にニマニマしてる宮下さんが座った。

「だって、梢ちゃんの初めてのお友達ですから」

ああ、宮下さんが勘違いか誤解か何かしら間違えています。

その顔は絶対に間違えています。

しかも、ちゃっかりケーキも食べてます！

まあ、どうせ余ってしまうのでいいですけど。

「？あつ、初めての男友達だから珍しがって…て事？」

「いいえ、初めてのお友達です」

「え？」

「言葉の通りですよ」

「いや、そんな訳ないでしょ」

ホラ、鼓が困惑してるじゃないですか。

鼓にはわかりません。いいえ、わかっていて欲しくありません。
チラリと宮下さんを睨む。

その視線に気づいた宮下さんは肩をくすめた。

「梢ちゃんは凡人が近づくと事ができないくらいの特上クラスの子です。その美しさ故に妬まれ、グループから爪弾きにされたり、虐められたり…」

「鼓、宮下さんの話を鵜呑みにしないで下さい」

嘘のような本物もどきの話。そもそも特上クラスってなんですか。半分本当で半分嘘。

私の睨みは半分しか効きませんでした。

「えっ、嘘なの」

「妬まれてたのは事実ですが、虐められてませんし、私の不注意が招いた事です」

無知だった自分が招いた過去。

今となつては良い教訓です。

「梢ちゃんに友達ができたって聞いておじさんとおばさん喜んでたよ。仕事休んでまで会いたがってたし」

…そんな事…今伝えるなんて卑怯です。

私は許さなかつてもりでいたんです。

自分達から連れて来いと言っておいて帰ってこないなんて、鼓に無駄足を踏ませてしまつて…。

でもそんな事言われたら…。

許さないといけないじゃないですか。

「結局、帰ってこれなかつたけど」

私だつて、それくらいわかっています。もう小さな子供ではありません。

「また来るよ」

「えっ」

「友達なんだから、家くらい行くだる普通」

「鼓にそこまでお世話になる理由はありません。今回約束を破ったのは私の両親ですし」

また迷惑がかかってしまいます。

「梢ちゃん、そこは可愛くありがとうでしょ」

一体何を言ってるんですか、宮下さん！

「宮下さん、意外と話わかりますね」

「どれだけ、梢ちゃんと一緒にいると思ってるのよ」

なぜっ、鼓と意気投合しています！

「あの…」

「つまり、気にするな。友達だる俺ら」

「梢ちゃんは、はっきり言葉にしないとわかりませんからね。私、紅茶のおかわり淹れてきますね」

やはり、鼓は優しい人です。

優しくて、正しい。

あなたはいつだって私の期待以上の事をする。

初めて辞書がその日の内に戻ってきた事。

私と普通に接してくれる事。

見返りを求めずに行動する所。

「鼓」

「ん？」

「…あっありがとうっございます」

「うん」

あなたはいつだって信じられないくらい温かい。

鼓を駅まで送って行って帰ってきた私を迎えたのはニマニマした宮下さんだった。

「最初に言っておくけど、鼓は宮下さんが思ってるような人じゃないですよ」

「わかってますよ。梢ちゃんのお友達でしょ、今は」

「だからっ、純粹にお友達です！」

「そういう事にしておきます」

ああ……宮下さんを調子にのらせてしまった。

9話 初めての友達2（後書き）

梢ちゃんの過去はちょっと暗い。ああ、宮下さんで一話書きたい。

10話 三日前。

いつの間にか六月も中ごろまで過ぎ去っていた。

山城と知りあってから時間が経つのが恐ろしく早い。

ずっと一緒に居る訳じゃないんだけどな…不思議だ。

梅雨入りして一週間経つが、雨は今日もシトシトと降っている。

「秀平君」

「……」

俺の運は尽きたのか、朝っぱらから明日也に捕まった。

「この前、山城さんと校舎裏で何の話してたの？」

いや、運はとっくの昔に尽きている。明日也と知り合った時、既に。

「……普通に、世間話だよ」

「ふーん、告白されたんだ」

「……」

「なんて、噂が流れるかもね」

クソ、明日也。

適当に話をかわす事も出来ず。

結局、山城と友達になった事から山城の自宅に訪問したことまで根掘り葉掘り話す羽目となってしまった。

「そっか、お友達ね。ふーん」

「なんか言いたげだな」

「口止め料として昼飯おごって」

「なんで」

「また噂の的になりたいの？」

バカっぽく見えてずる賢い明日也は実に嫌な奴だ。

「500円以内なら」

「鼓、お隣の人は誰ですか？」

場所は食堂。たった今、俺が明日也に昼飯を奢っている所に山城が現れた。

全く、なんてタイミングだ！

「俺は秀平の友達。ねえ、山城さんも一緒に食べようよ」

今更ながら明日也の猫かぶり具合には少しだけ感心する。

よくも、そんな爽やかさを振りまけるな。

「いいんですか」

ああ、そこは明日也の下心を感じ取って断って欲しかった。

雨の為いつもより混雑している食堂で視線に晒されながら俺は空いている席に座った。

山城はごく自然に俺の隣に座った。

「……山城？」

「はい」

それが当たり前だと言うように。

はあ。これって明日也に飯奢らなくても噂になるじゃん。

そして明日也は面白そうに笑って俺の向かい側の席に座る。

「自己紹介がまだだったね。俺は川端明日也。秀平とは中学からの友

達なんだ」

明日也が差し出した手を山城は見つめるだけで、取るうとはしなかった。

その代わり、俺と明日也を交互に見て言った。

「鼓、友達は選ぶべきですよ」

「驚いたのは明日也だけだ。」

「そうだ、山城が気づかない訳ない。」

「そのような薄っぺらい笑みでは下心は隠せませんよ」

「カッコイイっっ！」

「流石、踏んできた場数が違う。」

「面白いね、山城さん。そういうキャラなんだ。なんか納得」

「明日也は平然と俺が奢った、オムライスを口に運ぶ。」

「お前、まだ居るつもりか」

「えっ、うん。まだ食べてねーじゃん」

「そこは気まづくくなるから、移動するだろ普通」

「えー、なんで。滅多に話さない山城さんと話してるんだ。これを逃す手は無いだろ」

「明日也は俺から山城へ視線を移し、にっこりと含みのある笑顔を浮かべた。」

「それに山城さんだって秀平の事知りたいでしょ」

全く嫌な笑顔だ。明日也は狙った獲物は絶対に逃さない。

山城の場合、意味合いが少し違うが例外にはなれなかった。

「川端は本当に鼓の友達ですか？」

「川端じゃなくて明日也つて呼んで。もちろん友達だよ。同じ中学だったんだけど、偶然大学も一緒だなんて、世間は結構狭いよね」

「鼓は中学の時どんな風でした？」

「うーんとね。優しいお兄ちゃんって感じ、もっと素直でスレてなくて純粹で、お人よしで…」

「明日也、やめろ」

これは何だ、なんで目の前で俺の昔話を聞かなきゃならない。拷問か？

「いいの？山城さんはもっと聞きたいって顔してるけど」

「山城、目を覚ませ。コイツは俺をだしにしてるだけだ。山城には見えるだろ、明日也の下心が！」

「大丈夫です、隣に鼓もいますし」

また、そんな誤解されるような言い方をっ！

「なんだ、友達なんて言っつて本当は…」

「違う、明日也！山城が言ってるのはそういう意味じゃない。俺はスタンガンと一緒にだ」

「秀平、頭大丈夫？」

あ〜。

「話変えるけど」

おい、目を反らして言うな。

「16日だったよな」

「何が」

「誕生日」

「そうだけど、なんかくれるのか」

「誕生日プレゼントって事で合コンセッティングしていい？」

「そんな暇ない」

「クールで硬派路線もいいけど、ちよつとは遊ぼうぜ」

「…明日也、どさくさに紛れて俺の印象悪くさせようとしてんのか」

「あつ、バレた。だってそれだけ信用されるとちよつとは邪魔し
たくなるじゃん」

「悪趣味」

「普通はそんな事気にせず飛びつくもんだぜ」

「16日って3日前じゃないですか」

「えっ」

「誕生日です。あれだけお世話になってる鼓に何もあげてないなん
て…。なぜ、教えてくれなかったんですか!」

「…本当に友達なんだ」

なぜ、今納得する。最初からそう言ってるのに。

「あのな、山城」

「鼓の為なら何でもします!」

「ゴホッ…」

俺は慣れてるからさほどダメージはないが、明日也はまともに咳
き込んだ。

「落ち着け山城。俺の誕生日は7月16日だ」

「7月…ですか。じゃあまだですね」

俺達の会話がどれくらいの間人に聞かれていたか分からないが、
明日には間違いなく煩わしい噂が飛び交うだろうと予測できる。

はあ、全くなんで日だ。

10話 三日前。(後書き)

梢ちゃんと明日也の対面。
いつでも真直ぐな梢ちゃん。

11話 ランチタイム後。(前書き)

言い訳くさい、明日也君の視点。

11話 ランチタイム後。

山城さんとは食堂で別れ、俺と秀平は一緒に講義室へ向かった。

「山城さんって結構天然だね。もっと恐い人だと思ってたよ」

まさか、あんなに天然だとは予想外だった。

男を寄せ付けないって聞いてたからもっとお高くとまってる人かと思つたら、すっげえ面白いし。

良い意味で裏切られた。

「お前、山城を狙ってたんじゃないのか」

「狙ってないみたいない方だ」

笑顔を浮かべるが、どうせ胡散臭いとか思ってるんだろうな。

俺としては、あんな美人の素顔を見てる秀平がなぜ、山城さんに落ちないのか。

そっちの方が不思議なんだけど。

「だったらなんで、わざわざ俺の誕生日を引きあいに出した。合コンの誘いなら別にいつでも良いだろ」

全く、気づかなくていい所に気がつく。

「秀平は自分の事は疎いくせに、他人に鋭い所が嫌いだ」

しかもその場で突っ込まなかった優しさが余計にムカつく。

秀平はいつだって余裕だ。抜けてる癖に余裕って矛盾してんだよ、全く。

「答えになつてないぞ」

「秀平の事だから、誕生日も教えてないんだろうと思って気を使つてあげたのに」

俺だって最初は狙ってさ、校内で噂の山城さんをものに出たら面白いだろうって思ってたさ。

けど、あんなに信頼しきった山城さん見たらそんな気失せた。

最初は誕生日に合コンで揺らぐ秀平を見せて、幻滅させるつもりだったのに。

秀平はきっぱり断っちゃうし、山城さんはそもそも誕生日知らなかったし。

嫉妬も何も見せない。二人にあるのは信頼だけ。

本当に友達だった。

小学生並みに純粋な友達だった。

あんなにラブラブなのに恋人じゃないなんて…。

鈍感コンビかよ。

手に負えねえ。

しかも、二人とも本気で友達だと思ってる所が救いようがない。

だが、俺達はもう小学生じゃない。

どっちが先に想い始めるだろう。

このままでいられたらなんて夢の話。

夢はいつか覚める。

どちらが先に夢を壊すだろう。

「そうやってはぐらかすな」

「逆に聞くけど、俺が本気で山城さん狙って良いわけ？」

どうせ、ダメだとか言うんだろ。会わせるの嫌がってたし、そんなに大切なら自覚しろよ。

しかし、秀平から意外な答えが返ってきた。

「明日也が本気なら俺は何も言わない」

…何言ってるんだ、コイツ。

「でも、遊びならやめろ。山城は……」

「なんで黙るの？」

もしかして、なんかあったのか。いや、そんな雰囲気は全く感じなかったし…。

「…山城はそういうのが苦手なんだ」

頑固なくせに、純粹で。鋭いくせに、鈍感で。

一人でなんでもできると思われるくせに、面倒見がよくて。そのくせ不器用で。

全く、どんな顔して言ってるかまず自覚しろよ。

鏡で見せてやりたいぜ。

「俺も苦手だ」

「えっ？」

「山城さんは良い人間過ぎる」

秀平にソックリで嫌になる。

友達としては面白いけど、恋人にしたいタイプじゃない。

「昔かつら思ってたけど、何考えてるかわかんねえよ」

いや、秀平がわかりやす過ぎるだけだから。

「ミステリアスな方が女の子にモテるだろ」

「それしか考えてないのか」

「当たり前だろ」

俺はお前みたいな良い人間にはなれないよ。

まあ、なりたくもないけど。

「それでさ、誕生日なにしてもらうの」

「はあ？」

「山城さんは秀平の為なら何でもしてくるって言うってたじゃん。ここは男として…」

「俺と山城は友達だ！」

顔を真っ赤にして言われても説得力無いぜ、秀平。

「俺はまだ何も言っていない。イヤらしい事考えたのは秀平だろ」

「俺はっ、…何も…」

俺は堪えきれずに笑った。

あー、やっぱり秀平は面白い。

今時、こんな手に引つかからねえよ普通。

11話 ランチタイム後。(後書き)

秀平にコンプレックスを感じてる明日也君でした。

12話 小春日和

それは梅雨の合間の晴れた日だった。

俺と山城が並んで廊下を歩いていると（偶然、会った）一人の男が俺達に声をかけてきた。

「ねえ、君達。サークルに入らない？」

振り返ると、俺より背の高い好青年が笑顔でそこにいた。

今は6月。サークル勧誘の時期はとっくに過ぎている。
今更と思わずにはいられなかった。

「今更とか言わないでくれよ」

おっと、無意識に言ってしまったみたいだ。

「行きましょう。鼓」

不機嫌そうに男を見る山城。

もしかして、下心を感じ取ったのか。

まあ、ナンパの常套句みたいなセリフだったしな。
好青年だからって惑わされない山城。やっぱスゲーよ。

「そんな冷たくあしらわないですよ。梢ちゃん」

「気安く呼ばないで下さい」

晴れた青空が似合う、好青年。

大和撫子と称される山城。

二人で並んで歩いていたらさぞお似合いなカップルだろう。だが、それはない。

山城の嫌悪感からしてそんな関係じゃない事は流石にわかる。

もしかして…。

「知り合い？」

友達じゃないだろ。

「違います」

「ハトコなんだ」

えっ、マジ。

でもなんか納得。美形ってやっぱり血筋なんだな。

「頼むよ。うちのサークル今、僕一人だから潰れる寸前なんだよ。僕に恩を着せると思って助けてくれ」

なんか使い方違う。と突っ込む訳にはいかず、頭を下げた好青年に冷たい視線を浴びせる山城を見た。

「お断りします」

「そこなんとか」

好青年はまだ頭を下げ続けている。

美形って得だと、つくづく思う。

俺関係ないけど、可哀想になってきし。

なんだかいたたまれない。

そんな事思った俺がバカだったと知るのは後のこと。
奴の本性を知っていたら絶対あんな事言わなかったのに。
無知は罪らしい。

「名前貸すくらいならいいんじゃない」

俺はポロツと軽々しくそう言った。

「鼓っ！」

「取り敢えず、名前だけでも人数がいれば、潰れなくて済むと思います」

「君、いい人だね。ホラ、梢ちゃん。彼もこう言ってる事だし」

「鼓にはわからないのですか！この人は小春日和なんです！」

小春日和って…なんで？

「山城、どういう意味だ」

山城の独自の理論には時々ついて行けなくなる。

「ですから、一見温かそうに見えて、実は寒いんです。この人の外見に騙されてはいけません」

「そっか、小春日和って確か冬の季語だったね」

結構、酷い事言われてるのになんだこの人。

好青年はニコニコと山城の言葉を交わした。

「つまり、腹黒だつて言いたいんだよね」

「お腹は黒くありません！」

「梢ちゃん知らないの。実はお腹は黒くなるんだよ」

「もう騙されません！！」

ちよつと二人の関係が見えた。

純粋さが仇になることはよくあるが、こつこつ山城を見るのは新鮮だ。

山城はいつだつて面白いけど。

「ところでなんのサークルなんですか」

「その話はこつこつでゆっくり」

好青年は、くるりと向きを変え廊下を歩き出した。

好青年について行くこうとする俺の腕を山城が引き留めた。

「鼓っ！」

「なに？」

「鼓にはわからないのですか！あの人の性格の悪さが」

前から思ってたけど、山城は俺を買い被りすぎだ。

ひと目見ただけで性格なんてわからない。

まあ、癖のありそうな人だとは思っけど。

「鼓は優しすぎます！」

ホラまた。

確かに可哀想だと思っただけど、それだけで面倒な事に付き合っ訳ない。

俺なりに目的がある。

山城が下心以外で初め嫌悪を示す人間。

「からかわれるから嫌い？」

「子供扱いされるから嫌い？」

そんな事で嫌悪する山城じゃないって知ってるから、すごく気になる。

「根っから悪い人じゃないでしょ」

興味本意だと告げたら、山城は激怒するだろうな。言うつもりはないけど。

「……」

山城は俺の腕を放し、黙って俺の隣を歩いた。

「もとはと言えば、私の責任ですから」

「一体どんな責任なんだろう。」

俺は前を歩く好青年に声をかけた。

「今さらなんですけど、聞いてもいいですか？」

「なに？」

「名前を教えてくださいませんか」

「本当、今更だ」

好青年はニコリと笑った。

その笑みが冷たいと感じたのは俺の気のせいか。
山城が隣で好青年を睨みつけている。

気のせいじゃないらしい。

12話 小春日和（後書き）

新キャラ登場。次回名前が明かされます。

13話 部室

名無しの好青年の後に付いてやって来た場所は別館のとある一室。

「どこですかここ」

「部室だよ」

「はあ！本気で！」

そこは部室というよりは書庫のようだった。天井まである本棚が四つ並んでいた。

部屋は狭くないのに、かなりの迫力と圧迫感がある。

「元々、文芸部の部室だったからね。こっち、こっち」

好青年は本棚の間を通り、奥へと進む。

本棚の奥にはそれなりのスペースがあり、窓の下に丸いテーブルと椅子が4つ並んでいる。

俺と山城はその椅子に座った。

そこだけ見るとカフェのようにも見えた。これは学校の備品か？奥に置いてある事務机が異常に浮いている。

好青年はその事務机から書類を取り出して俺達の前に出した。

「取りあえず、これに名前書いてくれるかな」

それはサークルの名簿のような物だった。

名前を書き終えた俺は山城にペンを渡す。山城も渋々自分の名前を書いた。

「ふん。鼓 秀平君ね。鼓君、お人好しなのは良い事だけど、せ

めて何のサークルなのか確認してから協力した方がいいよ」

「えっ、でも名前を貸すだけです」

「そんな訳ないだろ」

好青年の笑顔に黒い物を感じる。

あれ？人相が一気に変わった気が…。

「ねっ、梢ちゃんも責任取ってくれるんでしょ」

「くっ…」

「そうじゃなきゃ正しくないでしょ」

山城の性格を見切っている。

流石、ハトコ。

「言っておくけど俺は一言も名前貸してくれって言ってないから」

「あなたは嘘つきです」

「今回はついてないって」

あの、真っ直ぐな山城の眼差しに好青年は怯まなかった。

「あなたは卑怯な人間です」

「まあ、否定はしないけど」

「鼓は渡しません！」

なぜっ！！

壊れてる。まさかの山城が壊れたっ！

「どっちかって言うと二人セットで働いて欲しいんだよね」

「働くって…」

「まだ言っただけじゃなかったね。君達がたつた今入ったサークルはサークルボランティア部。つまり助っ人部だよ。いや、二人とも人気高いからまともに活動できるよ」

いや待って、どっからツッコめばいいんだろう。

「では改めて。俺はこのサークルの部長、木野村博樹、二年生だ。よろしく鼓君」

反射的に俺は差し出された手を取ってしまった。

「どうも」

ああ、これじゃあ騙された。とか言って辞めるのは無理そうだな。そんな事言ったら追いかけて回されそうだし。

また、変な噂が立つのは勘弁だ…。

「あなたはどうして意味のない嘘をつくのです」

「嘘は何もついていないよ」

「嘘です。あなたは3年生でしょう」

「嘘じゃないよ。実は重い病気にかかってね。一年休学していたんだ。戻ったら部員は俺一人しかいなくて焦ったよ」

「鼓、簡単に信じてはいけません」

「えっ、そうなの」

「鼓君は騙されやすいね。一年留学してた、引き籠もってた、誘拐されていた、単位が取れずに留年。信じやすい物を信じたらいよいよ段々この人の笑顔が意地悪く見えてきた。」

まあ、招いたのは自分だから仕方がないのだけれど。

「二年生なのは本当なんですか」

「そっだよ。学生書でも見る」

「是非」

そう言って手を出したのは山城だった。

「本当に信用されてないね」

「あなたは嘘つきだと私は知っています」

木野村さんはズボンのポケットから財布を取り出して山城に学生書を渡した。

山城は学生書を見てやっと信じたようだった。

「じゃあなんで、ここに来る前に鼓君に教えてあげなかったの？ 教えてあげたらこんな形でサークルに入らずに済んだのに」
入れた本人が何言ってるんだ。

山城は散々警告してくれたのになあ。やっぱり興味本位がいけなかったんだろうか。

「鼓が私を嘘つき扱いするのが耐えられなかったもので」

「へー、友達の信頼はその程度か」

俺にはわかる。その軽い一言が…。

山城を傷つける。

「木野村さん。山城を虐めないで下さい」

木野村さんはカンの良い人だった。視線を山城から俺に移し、にっこりと爽やかに笑った。

「博樹でいいよ。でもちゃんと”さん”は付けてね」

この人と仲良くなれる気がしない。
見た目は好青年なくせに。

その日の、鼓家の食卓での会話。

「なんか、成り行きでサークルに入った」

「いつ？」

「今日」

「この時期に珍しいわね」

「なんのサークル？」

「えーと、助っ人部」

「なんだそれ」

「さあ、俺もよくわからないから」

「あら、じゃあこれから夕飯の支度、誰に頼もつかしら」

「奈々緒だろ」

「修介っ、なに寝ぼけた事言ってるの！私だって部活で忙しいんだからね！！」

「俺だって忙しいよっ！」

「…じゃあ私やる」

「南夏はダメだ。まだ小学生だぞ」

「そうね。揚げ物とか怖いわ」

「揚げ物から入るなよ！」

「えー、コロッケ」

「……母さんが忙しい時はなるべく帰ってくるよ」

13話 部室（後書き）

結構、死活問題な鼓家。なんだか腹黒キャラが増えてきた。

14話 小春日和 VS 大和撫子

周囲の視線が痛い。というより目の前の視線も非常に居心地を悪くさせてる。

「山城、博樹さん」

「なんですか」

「なに？」

「非常に食べづらいんですけど」

「気にしないで(下さい)」「」

今、俺は食堂で飯を食べてるのだが、俺の隣には山城(まあ、それはいい)と目の前には見た目は好青年だけど実は腹黒青年でサークルの部長の博樹さんがいる。

あゝあ、また変な噂がたつな…。

事の発端は多分、サークルボランティア部、通称「助っ人部」に半ば強制的に入れられた事。

なぜか山城は俺を守る使命感に燃えていて、できるだけ俺と一緒に行動しようとする。

博樹さんはそんな山城をからかう目的で、狙ったように俺達の前に現れる。

「山城、自分のことくらい自分で守れるぞ」

「木野村を甘く見てはいけません。人の弱みを握る天才ですから」

「そこは否定できないけど。いくらなんでも警戒しすぎじゃない梢

ちゃん」

そんな状況を楽しんでるのはアンタだろ！と口に出したい所だが公衆の面前で大声を出す気はない。

折角のカレーが全然おいしく感じない。

「二人に一つ提案があるんだけど」

「木野村の提案なんて絶対に聞きません」

爽やか笑顔を山城はスツパリと跳ね返す。

「俺はそれでもいいけど、鼓君が不登校になっても知らないよ」

「鼓に何をするつもりですか！」

現在進行形で追いつめられてるんだよ、山城。周囲の視線とか視線とか…。

下心には敏感なのに、どうして山城は気がつかないんだろう。まったく不思議だ。

「そんなに警戒しないでよ。コレに参加して勝った方が相手の言う事何でも聞くつてのはどう？」

博樹さんは一枚のチラシをテーブルの上に置いた。

「百人一首大会？」

そのチラシには今週の日曜日に大学の体育館で伝統芸能サークル主催で百人一首大会が開かれると書かれていた。

「これで、俺と梢ちゃんの一騎打ち。どう、わかりやすいでしょ」

「確かに、人の目もありますし、不正もしにくいですね」

山城の中でこの人はどういう人なんだ。

「そう、正々堂々真剣勝負。いい条件でしょ」

「わかりました。受けて立ちましょう」

まあ、百人一首なら平和的だしいいか。

そしてやってきた日曜日。俺は山城達の戦いを見ようと体育館へとやってきた。

「やあ、来たね鼓君」

待ち構えていたように体育館の入り口に立っていた博樹さんの爽やかな笑顔に捕まった。

「…こんにちは」

「はい、これ」

さも当たり前のように渡されたのは食堂で出したあのチラシの束だった。

「学校に来てる生徒適当に呼び込んできて。なんなら教授でもいいし」

「なんで俺が？」

「サークルボランティア部の部員だろ」

「……」

「梢ちゃんはあと一時間くらいしたら来るはずだからその前に配りきってね。よろしく」

休日に学校に来てる人間はそうそうおらず、チラシを半分も減らないまま一時間が過ぎた所で体育館に戻ってみると中には人が溢れていた。

なんで！

わざわざ百人一首やりにきたのか。みんな物好きだな。

人々の間から博樹さんがヒョッコリ現れた。

「鼓君。チラシは？」

「あの、全然配れなくて」

減ってないチラシの束を博樹さんに見せた。

博樹さんは減ってないチラシを気にする様子もなく、チラシの束を持って俺を体育館の中に引き入れた。

「まあ、これだけいれば十分でしょ。こつちを手伝って」

「なんでこんなに人が」

ただの百人一首大会にこんなに人が集まるとは思えない。

「俺と梢ちゃんの勝負見たさに集まったんだよ。まったく暇人が多いんだね」

「なんで、みんな知ってるんですか」

「食堂は不特定多数の人が集まってる。話なんてあつと間に広まるよ」

「ちなみに、鼓君目当ての女の子もいるから」

「はあ!？」

「はい、座布団並べて。それ終わったら見物客に百人一首勧める。奥にカルタもやってるからそこでもいい」

問答無用で言い渡される。笑顔つてのが逆に怖いんだよ。

「…はい」

俺は見事にいいように使われていた。

俺も他の人達と同じように山城と博樹さんの勝負を見に来た人間だ。けれど肝心の勝負が始まらなければ手持ち無沙汰でしょうがない。

そこへ降り注いでくる博樹さんの指示、暇だからいいかと思っただらしっかり使われてるぜ、俺。

周囲も俺と同じだったらしく、暇を潰すように今やっている試合の様子を見たりカルタのコーナーは結構人が集まっていた。

「あつ、鼓」

「おう、山城。遅かったな」

「えっ？遅いですか。変ですね、10分前には着いたと思ったんですが」

山城はあの時食堂で貰ったチラシを取り出した。

そこには開場時間午前10時と書かれている。しかし、山城は隅に書かれた小さな文字を指差した。

そこには、個人戦は正午より開催と手描きで書かれていた。

チラシ自体が手描きだからさほど違和感を感じないが、さっきまでチラシを配ってた俺にはわかる。他のチラシにはそんな文章、一文字も書かれていない。

単純に考えると博樹さんが書き足したんだろう。

なるほど、全て計算ですか。

14話 小春日和 VS 大和撫子（後書き）

次回、百人一首勝負です。

15話 続 小春日和 VS 大和撫子

体育館に集まった人達を見て山城は驚いていた。

「すごい人ですね。文化人がこんなにもいたとは驚きです」

まあ、全員が文化人な訳ではないが。

自分が客寄せパンダとして利用されてるなんて言ったら「そんなの正しくありません！」とか言って怒るんだろうな。

「やあ、梢ちゃん。来たね」

「木野村と違って私は約束を守るんです」

今にも噛み付きそうな山城を博樹さんはいつもの爽やかな笑顔で迎える。

「そう警戒心丸出しにしないでよ。準備はもうできてるから」

そう言って博樹さんは俺達を体育館の奥へと連れて行った。

そこには四方に散りばめられた取り札と二つ対峙するように座布団が置かれていた。

「どうぞ、梢ちゃん」

博樹さんに促されて山城は座布団の上に正座する。続いて博樹さんも正座した。

もし二人が和服で、ここが体育館じゃなかったらさぞ、絵になる光景だろうとその場にいた人間は思ったんじゃないだろうか。

やっぱり美形は血筋か。何やっても様になるな。

自然と周りに人が集まってきた。当たり前だ、この勝負を見にわざわざ来たのだから。

きっと山城はそんな事気づきもしないだろう。

山城が真つ直ぐ博樹さんを見据える。一瞬で空気が張りつめた。

「鼓は私が守ります」

後ろで「キヤー」と女達の黄色い悲鳴が上がった。あつ、こんなに女子居たんだ。

それにしても、山城には言葉の意味しか無いってのはいい加減わかってるけど…。

聞かされる身にもなつて欲しい。

言い聞かせた所でわからないだろう。なんせ無自覚だからな。

「約束は守つてね、梢ちゃん」

博樹さんはいつだつて笑顔だ。知らなければ道ばたでおばあさんを助けていそうな好青年だ。余裕たつぷりにも見える。

「勝負です!」

ゴングが鳴りそうな勢いだが当然そんな物が用意してあるはずもなく、伝統芸能サークル部、部長さんの「それでは始めます」という声で静かに百人一首勝負は始まった。

「花の色は〜 移り」

「はい!」

「ながらへば〜 ま」

「はい!」

「きみがた」

「はい!」

「わたの」

「はい!」

「みか」
「はい！」
「ちは」
「はい！」
「わ」
「はい！」
「ふ」
「はい！」
「い」
「はい！」

スパーンといい音をたてて次々と取り札に手が伸びる。

「君たち、エスパー？」
読み上げていた部長さんがそう零した。

二人とも一歩も引かない勝負だが。

「最初の一音だけで、お手つき無しで取るなんて何ていう運でしょう」

百人一首は語呂合わせで俺は覚えたことがある。上の句がある程度読まれれば下の句も必然的にわかるものだが、最初の一音では被り過ぎている。

それをこの二人はいとも簡単に目の前でやっている。

…超人か？

あまりにハイスピードな二人にギャラリィはポカーンとしている。
百人一首の優美さなんて欠片も見えない。

確実に何か超えてるよ。

初っぱなからハイスピード百人一首が始まり、たったの20分で

取り札は1枚になった。

見てる側としては早過ぎて面白くない。盛り上がる場所も分かんないし、やっぱりやってこそその百人一首だな。けれど誰一人としてその場から立ち去る人間はいなかった。

勝負は本当に互角だった。

「梢ちゃん、約束はちゃんと守ってもらうからね」

一枚の差で山城が負けた。

「すみません、鼓。私は守れませんでした」

前から思ってたけど、なんで俺守られてんだろう？

もしかしてこれから酷い事されんのか！

さっきまでスツと伸びていた山城の背中が小さく丸くなっていた。

全く、なんで山城は一人で頑張ろうとするんだろう。

こんな時なんて声をかけたら良いんだろう。

気がつくと俺はそれが人前だと言う事も忘れ、山城に駆け寄り、

正面に座った。

山城の顔が上がる前に俺は山城の頭に手を置いた。

なでなでなでなで

なぜかわからないが、山城が落ち込んでいるのはなんだか嫌…と
いうより苦手だ。

「…鼓？」

「よく頑張りました」

山城はいつも頑張ってる。正しいと人に言う為には自分も正しくなければいけないと思っている。

まあ、ちよつと頑固で融通が効かないけど。

他人からどう言われようと崩さない姿勢。貫き通す努力。

ピンと伸びた背中はその象徴している。

結構凄いつて思ってるんだけどな。

山城は小さな声で呟いた。

「…ありがとう」

パチパチと手を叩く音がしたかと思うと一気に拍手の嵐がやってきた。

そこで俺はここが人前である事を思い出し、山城から手を引いた。やべあ、かなり恥ずかしい。

なんで拍手されてるかわからないまま俺は山城を体育館から逃げるように連れ出した。

体育館から離れて校内の中庭まで来た。自然と掴んだ手は自然と離れていく。

そんな時、山城はケロリとした顔で言う。

「なんだか、花嫁を連れ去って行くシーンを思い出しました」

「えっ！」

「どうしました、鼓？」

あゝもう。わかってるけどね。

「なんでもない」

「これからどうする？」

目的だった勝負も取りあえず終わった。

「はっ！負けてしまいました。どんな要求であっても微力ながら

鼓を守りますから」

本当に何をされるんだろう。

「山城は具体的に何されるか知ってるの？」

「それは聞かない方が身の為です」

え〜！そんなに！！ヤバいかな、俺甘く考えてたかな。

「み〜つけた」

振り返るとそこに博樹さんがいた。

「梢ちゃん、もちろん覚えてるよね」

「そんなつもりで逃げた訳ではありません」

「それくらいわかってるよ。鼓君も面白かったし」

面白いつて…そうか見る人によって感じ方は違うんだな。

「その面白さに免じて、今回は部員全員にジューズをおごること。

これでいいよ」

「えっ、どういう風の吹き回しですか！」

「だから鼓君の面白さに免じてだよ。それとも不満？」

「いいえ！喜んでおごりましょう」

二人はズンズンと進んで行く。

「鼓、行きますよ」

「ああ」

ちよつとだけ、気になって。少しだけ取り残された気分になった。

15話 続 小春日和 VS 大和撫子（後書き）

この先、こんな感じでサークルを手助けしながら話が進んで行くと思われませう。このサークル登場させて欲しいと言う人は是非教えてください。

16話 Xデー 前編

本日は7月16日金曜日です。今日は休日であって欲しかった。

いや、解決法はまだある。俺が学校を休めばいいのだ。そすれば平和な一日が過ごせる。

「秀平、学校行くついでにポストに出しといてね」

朝食の食卓で母さんからはがきが渡された。雑誌の懸賞ハガキだろっ。

「あゝ、うん」

「じゃあ、コレもついでに返しといて」

奈々緒がレンタルDVDの袋を俺の前に置いた。

「ああ」

「回覧板もよろしく」

「帰りにクリーニング取ってきて」

「あゝ、牛乳が無くなっちゃった」

「私のプリン食べたの誰っ！」

…学校に行こう。

結局俺はいつも通り大学へ向かった。

大丈夫だ。大学だって広いんだからそう簡単に見つかるはずが…。

「秀平、何してんだ？」

警戒して裏門から入ったのに、聞き覚えのある声が後ろからする。後ろには明日也が居た。二番目に会いたくない奴に初っぱなから会っちゃったよ。

「明日也こそどうしたんだよ」

「今日は面白そうな事が起きる気がするから秀平を探してたんだよ」

悪びれる様子も無く、明日也はにっこりと笑う。
全く、敵に回ると本当に厄介な奴だ。

「それと、一応友達だからね。誕生日おめでとう」

「：おう」

そう、今日は俺の誕生日だ。今日ほど誕生日を意識した日はない。

「山城さん、何してくれるんだろうね」

約一ヶ月前。初めて明日也と山城が会った日。山城は俺の誕生日を勘違いして「鼓の為なら何でもします！」なんて言ってしまった。いや、俺にはわかる。山城のなんでもするは、俺が溺れてたら助けてくれるとかそういう正義感の大変強いものだ。明日也が思っているような事は微塵も起きない。

し・か・し！

「山城かあ〜」

真っ直ぐで頑固な分、何をしでかすかわからない。
危険だ。予想できないから尚の事危険だ。

早めに会ってさっさと処理するか、会わないように逃げ続けるか。

「秀平今日合コン、セッティングしたから来いよ」

そう言えば前、そんな事言ってたな。

「今日はクリーニングと牛乳とプリンを買って帰るから無理」

「主婦かよ」

「主夫だよ、専業じゃないけど」

「まあ、どうせ来ないと思ってたけどね。それで、山城さんとはい
つ会つもの？」

「さあ？」

「は？約束してねーの」

「してないよ」

山城と会うのは大抵偶然だった。行く所が同じなのかよく会う。だけど、毎日会ってる訳じゃない。

でも、ずっと一緒にいるような気がするんだよな。…不思議だ。
「俺が見つけられたくらいだし、まあ会えるだろ」

明日也に付きまとわれながら午前は過ぎ、食堂に来た。当然のよう
に明日也もいる。

「あれ、鼓君」

どういう事でしょう。今日一番会いたくなかった人に食堂で会う
なんて。目の前には見た目好青年で爽やかな笑みを浮かべた博樹さ
んがいた。

山城がいなくて本当に良かった。

「お友達ですか？」

人を騙す事に長けている博樹さん。猫をかぶるなんて朝飯前だろ
うと思うくらい、目の前の博樹さんはいつも以上に好青年だった。

「中学の時の友達です」

「川端明日也です」

「俺は鼓君が入っているサークルの部長で木野村博樹です」

二人とも軽く会釈して軽い自己紹介が終わった。

「秀平、サークルなんていつ入った」

「いつの間にだよ、本当に」

「はあ？」

そこは深く掘り下げないでくれ。いろいろと面倒だから。

そのままの流れで俺達は一緒のテーブルに座った。

「そう言えば、梢ちゃんは一緒じゃないの？」

「俺達、いつも一緒にいる訳じゃないですよ」

博樹さんと会うときはいつも山城がいたな。…そうだ、山城が博樹さんから俺を守るためとか言っつて、一緒にいるように頑張ってたんだ。

百人一首大会から博樹さんが山城にちよっかい出さなくなったから、前のペースに戻ったんだ。

「今日は一緒だと思っただけだな。…鼓君、誕生日でしょ」

「なんで博樹さんが知ってるんですか！」

「それくらい、調べればわかるよ。鼓君は結構人気だからね」

人気づてそれは興味本位と悪意と好奇心が入り交じった噂のことだろうか。

「もしかして梢ちゃん、鼓君の誕生日知らない？」

「知ってるのは知ってますよ。覚えてるかどうかはわかりませんけど」

「知ってるなら絶対覚えてるよ。梢ちゃんはそういう子だから。そっかー、まだ会ってないのか」

すっかり話に置いていかれた明日也が切り出すように言った。

「あの…梢ちゃんって誰ですか？」

「山城だよ。山城梢」

「ちなみに俺は梢ちゃんとはハトコなんだ」

「あつ、それで。…なんだ良かった」

明日也はほっとしたのか、顔の力が一瞬抜けた。名前で引つかかる…もしかして、まだ。

「明日也、まだ山城の事狙ってんのか」

「いや、そうじゃないから！気にすんな」

慌てる明日也を見て博樹さんはフツと鼻で笑う。けれど表情は爽やかな好青年のままだ。

「川端君は友達想いですね」

「!?!」

「できれば、一緒に居たいんですけど。さすがに講義までは一緒じゃないからね。面白そうな報告を待ってるよ」

そういつて博樹さんは去って行った。ふぐ。あの人といると妙に緊張するんだよな。

「秀平、あの人何者？」

いつになく明日也が真面目な表情で聞いてきた。

「山城のハトコでサークルの部長」

「そうじゃなくて、何て言うの…人の心が読めたり…」

「山城が言うには小春日和らしい」

「はあ？」

「一見温かそうに見える、実は寒いらしい。あと嘘つきで卑怯者って山城は言ってる」

「ふぐん、なるほどね」

17話 Xデー 後編

それから午後は過ぎていった。

山城とは会わなかった。

いつもなら気にしない。気にならない。

でも、今日は違う。そう、誕生日だからだ。多分、俺は期待していたんだ。

静かに、密かに、そんな素振りを見せないように。

「結局会えなかったな。じゃあ、俺これから合コンだから」

「ああ、じゃあまたな」

明日也とは、廊下で別れた。俺もすぐに帰るつもりだったけど、なぜか足は図書館へと向かっていた。

全く、矛盾してる。

山城に会わなくてホッとしてる自分と。残念に感じてる自分。

このまま帰ってしまえばいい。クリーニングと牛乳とプリンを買ってさっさと帰れば今日は何事も無く終る。

けど足はまだ帰ろうとしない。図書館に行く途中で山城に会えないかと期待している。

俺は一体どうしたいんだ。

「やあ、鼓君」

「博樹さん!」

なんでこの人はこつも神出鬼没なんだろう。気配とか足音とか無いのかこの人は。

「その顔だと、まだ梢ちゃんのは会えてないみたいだね」

「顔に出てますか」

「出てるね。梢ちゃんなら真つ先に俺を疑うくらい顔に出てるよ」

ああ、それは相当だな。…やっぱり帰ろう。

「俺、もう帰るんで。面白い事起きないと思いますよ」

「一つ言っただいかな」

「はい？」

「君は周りの目を気にし過ぎじゃないかな」

平然と笑って言う博樹さん。

そついえば昼間、明日也が言っただな。人の心が読めるとか。なるほど、こつという事か。

「……誰だつて変な噂たてられたくないし、偏見で見られたくないと思うのは普通じゃありませんか」

「それは至極まつとうな答えだと思うよ。でもその頭に、梢ちゃんの事は入ってないね」

「山城は大丈夫ですよ。噂なんて気にしない。それに強い」

「俺は君を買被り過ぎていたみたいだ」

隣を歩いていて、博樹さんが足を止めた。

「なんですか」

「君はもつと梢ちゃんの事を分かっていると思っていた」

博樹さんの顔に笑顔は無い。その目には呆れと怒りがありありと見える。こんなにも気性の激しい人だったのか。

「梢ちゃんが強い？だったらもつと器用に立ち回れると思わないのか」

博樹さんの言葉は俺を非難している。それがハッキリとわかるほどの悪意を感じる。

背筋が凍るほどの視線がある事を俺は知る。けれど、博樹さんの態度で俺は気づかされた。

そう、俺は知っていたはずなのに。

山城が辞書を持ち歩く理由も。

長いスカートを履く理由も。

ショートケーキを焼いた理由も。

警戒心が強くて、でも臆病で、不器用。

山城はただの女の子だって知ってたはずなのに。

「博樹さん、山城はどこに？」

博樹さんは満足したようにニッコリと口元を緩ませた。

「三善教授の研究室」

「っ！くそっ」

足が地面を蹴る。俺は駆けた。

周りの目を考える前に身体が動いた。でも動いてみてやっとわかる。人目なんて気にならない。だってそんなもの目には見えない。

それよりも大事なものがある。

山城！！

「あっ、鼓」

えっ？

俺は一瞬身体が浮いたと思った。多分浮いたと思う。スピードを殺しきれず、身体が前に持ち上げられた。背中に強い衝撃が走る。

簡単に言っと、派手に転んだ。一回転までした。

「鼓っ！大丈夫ですか！！」

山城が辞書を抱えた格好のまま、俺に駆け寄った。今日の辞書は「アルゴリズム辞典」だ。一体何か書かれているんだろう。全く見当がつかない。

「ああ。……三善教授の研究室にいたんじゃないのか」

「？私は鼓を探していたんですよ」

そつだ、博樹さんは嘘つきだつて山城が散々言つてたじゃないか。

「三善教授がどうかしたんですか」

「いや、なんでもない」

山城に差し出された手をとつて俺は立ち上がる。

「鼓、こつちに来て下さい」

そのまま手を引かれ、俺は山城に連れて行かれる。

少しだけ、初めて山城が俺の前に現れた時の事を思い出した。あの時は俺、フルネームで呼ばれたんだよな。

あと、手は引かれてなかったな。

山城は中庭までやつて来た。

ちなみに、山城はまだ俺の手を掴んでいる。

「山城、そろそろ手を離してくれないか」

「駄目です。離したらきつと鼓はいなくなります」

「どうしてそつ思つ」

「そつという顔をしています。私は…迷惑でしたか？」

臆病で、不器用。甘える事がわからない。山城が何よりも恐れて

いるのは人に迷惑をかける事。

「迷惑じゃない」

会いたくないなんて思ってたゴメン。

「迷惑じゃないよ、山城。俺も山城の事探してた」

「本当ですかっ」

「…うん」

「はっ！本来の目的を忘れる所でした」

山城は鞆の中から水色のリボンでラッピングされた袋を取り出した。

「誕生日おめでとございます」

山城にしては普通でちょっと拍子抜けだ。

「ありがとう」

早速開けようとする俺の手を山城が止めた。

「待って下さいっ、あの家に帰ってから…せめて私の前では開けないで下さい」

「…わかった」

そんなに恥ずかしい物でも入っているんだろうか。疑問を残しつつ俺はプレゼントを鞆に入れる。

「帰りましょうか」

「そうだな」

すっかり暗くなった頃、俺は家に着いた。

「ただいま」

手のはクリーニングに出されていた父さんの背広と近所のスーパーの袋を持っていた。袋の中身はもちろん牛乳とプリンだ。

「おかえりー、ありがとう」

頼まれていた物を母さんが座っているダイニングテーブルに置く。

「今、修介がお風呂入ってるから上がったら入ってね」

「ん〜、わかった」

部屋に戻って鞆を机の上に置く。開けて取り出したのは水色のリボンでラッピングされた袋。リボンを解いて袋を開けると、甘く香ばしい匂いが漂ってきた。

中にはクッキーと一枚のカードが入っていた。多分、クッキーは山城の手作りだろう。

カードを取り出すと、そこにはこう書かれていた。

「誕生日おめでとございます。

鼓にはいつも感謝しています。感謝しつくせない程感謝しています。

鼓が本当に困った時、私を頼って下さい。

鼓の為なら何でもしますから。

私の友達になって下さってありがとうございます。

山城 梢

—

自然と顔がほころんだ。全く、山城は…。

「秀平ー、上がったよー」

「ああ、わかった」

18話 いろいろあって忘れてたけど

いろいろあって忘れてたけど…。
試験です。

はい、そうです。大学生ですから単位の為に試験というものがあ
り、日頃から勉強するのが学生の本分です。ええ、そうです。わか
っていましたがとも。

でも理想と現実って必ずしも一緒じゃない。
むしろ一緒じゃない方が多いはずだ。きつとそうに違いない。

はい、正直に言いましよう。

俺はそんな事すっかり忘れていました。
いや、しょうがないじゃん。いろいろ（本当にいろいろ）あった
し、それどころじゃないかったというか、正直面倒だったというか。
考えるのを放棄したいっていうか…。

まあ、でも試験1週間前に何もやって無いのは流石に不味い。非
常に不味い。

誰か分かりやすく教えてくれる人とか居ないかな…。と思いな
が、足は自然と図書館へ向かっていた。静かで机と椅子があつて、
尚且つ重たい辞書がすぐ近くにある。

図書館の自習室は試験勉強をするのもってこいの場所だ。

「鼓っ」

俺を名字で呼び捨てにする人物は一人だけ。振り返ると山城が辞

書を抱えて歩いていく。

気温が上がり始めた今日この頃、当たり前だか山城の服装も夏仕様に変わっていた。

黒の固いジャケットは無くなり、白を基調とした半袖のYシャツに赤色のリボンからネクタイに変わった。スカートの丈は相変わらず長い、色や素材が明るく、軽くなった。みつあみおさは健在だ。

「鼓も自習室ですか？」

「そろそろ試験勉強しないとヤバいからな」

「私です。家で勉強していると宮下さんに邪魔されて勉強出来ないんです」

何やってるんだ、あの人。

俺達は自習室へと向かった。しかし、いつもは空っぽな自習室とは違い、今日はほとんど満席状態だった。

考える事はみんな同じなのだろう。

不思議なものだ。人が同じ空間に集まっているだけなのに、騒がしいなんて。

圧倒的にグループで勉強しに来ている人間が多い。自習室という事もあり、声をひそめているが、いつもの自習室に比べればやはり騒がしい。

山城も同じ事を思ったのか入り口の前で足を止めたまま入ろうとしなかった。

「こんな獣の群の中で、勉強なんてできません」

もちろん、自習室には男子もいる。

山城の姿を見つけて少し騒がしくなったような気もする。

幸いな事に自習室は満席状態で、山城のさっきの言葉も小さな声だった。

俺達はとりあえず自習室から離れ、図書館へと戻った。

「これからどうしようか」

普通なら家で勉強すればいいのだけれど。

家で勉強すると結局あまり勉強しない事を俺は経験で知っているし、山城は（なぜか）宮下さんに邪魔されるらしい。

「どこか開いてる教室があればいいのですか。…いつその事、食堂で勉強しますか」

「取り合えず、そうするか」

俺達が図書館から出たところにその人はいた。タイミングが良いのか、狙って現れてるのは全くわからない。

「やあ、お二人さん」

俺達の前に立っていたのは博樹さんだった。手にはぶ厚い本が三冊あり、多分これから図書館に返しに行くんだろう。

そんな事を予測してる間に、山城は俺の背へと周り、博樹さんを睨みつけている。

百人一首大会以来、少し壁が無くなったと思っていたけど、本当に少しだったみたいだ。

そんな山城の反応を気にする事無く、博樹さんは言葉を続けた。

「二人で試験勉強するつもりだったのかな。でも、その様子じゃあ、自習室は使えなかつたみたいだね」

「どうして、わかるんですか」

「俺が君達の先輩だから」

言葉が足りない所は山城と近いものがある。まあ、山城の場合は理解できない事の方が多いけど。つまり、試験前になると自習室が

満席になるのはいつもの事らしい。

「それで。これからどこに行くつもり？」

「木野村には関係ありません」

「梢ちゃん、俺にそんな事言っているの？ どうせ、場所がなくて困っているんですよ」

「それが事実であっても、やはりあなたには関係ないことでしょう。端から見たらこの光景はどう見えるのだろう。」

「こやかな好青年と平凡な俺。その後ろに好青年を睨む大和撫子。うーん、修羅場？」

「確かに関係ないけど、これでも部長だよ。ここに部室の鍵を持って持ってる」

俺の顔の前に小さな鍵がぶら下がる。

「あっ」

「…梢ちゃん。なにか言う事は？」

「…貸して下さい」

「よくできました」

博樹さんはそのまま鍵からあっさりと手を離し、鍵は俺の手に落ちた。

「それじゃあ、勉強頑張ってる」

あれ？

俺は思わず首を傾げたくなった。いつもの博樹さんだったらこんなすんなりと鍵を渡してくれるはずがない。

山城も同じ事を思ったようで、去ろうとする博樹さん呼び止めた。

「木野村、どういう風の吹き回しですか」

「それは、どういう意味かな」

「あなたはそんなに良い人ではありません」

博樹さんは耐えきれなかったように吹き出して笑った。

「ははっ、梢ちゃんのはつきり言うね。そうだね、俺は良い人間じゃない。でも俺にも罪悪感ってのが人並みにあるんだよ」

「意味がわかりません」

博樹さんの声がワントーン下がる。それだけで、雰囲気は空気がガラリと変わる。

博樹さんは笑顔を崩さない。けれどその笑顔は張り付いているように、冷たい。

「謝罪だよ。何の謝罪かは言わなくてもわかるよね、梢ちゃん」

「今更、そんなもの…」

「そうだね。許してもらおうなんて思っていないよ。けど、優しくする理由くらいには使っているでしょ」

「そんなもの、あなたの都合でしょう」

「だから、許さなくていい。ただ後悔してることを知って欲しかった」

もしかして、博樹さんは…。

「それじゃあね。梢ちゃん、鼓君」

山城の事が好き？

確かめる隙もなく、博樹さんは俺達に背を向けて去った。

18話 いろいろあって忘れてたけど(後書き)

んんっ?なんでこんな展開になってんだ??(本人が一番不思議)

19話 二人きりの部屋

俺達は部屋でノートを広げて真面目に試験勉強していた。

博樹さんと山城の話、凄く気になる。当人同士でしか分かり合えない会話。

過去に何かあったのはなんとなくわかってたけど。

でもそれは俺が思っていた物よりきつとずっと重くて暗い。

知りたい、聞きたい。

ちょっと前、多分山城に会う前の俺だったら「面倒くさそう」と言っただけでそそくさと逃げていただろう。

けれど、今は違う。凄く気になる。「昔何があったの?」と聞きたい。

でも、それは無神経だろうか?

「鼓」

「えっ、なに」

「さっきから手が止まっていますよ」

「…あ、うん。ちょっと分からない問題があった」

全然集中できないや。今日は適当に切り上げて、さっさと家に帰るか。

「鼓は今まで一度も聞いた事ありませんね」

それはまるで「昨日あの番組見た?」と聞くみたいに軽い何気な

い切り出しだった。

「えっ？何が」

「私と木野村の事です。今までのやり取りを見ていれば過去に何かあった事は明白です。わかっていながら聞かないのは優しさですか？」

今更ながらに思う。山城は俺を美化し過ぎている。

俺は今ここで「言いたくないなら言わなくていいよ」とカッコつけるべきだろうか。いやそんな薄っぺらい見栄を張った所で山城は嘘だと気づくだろう。

嘘について責められるより、正直に伝えた方が心苦しくない。こんな風に思うようになったのは山城の性格がうつったせいだろうか。

「聞いていいのか、山城？」

「ええ、鼓が知りたいなら。というより、今までずっと蚊帳の外でしたよね」

そうだよな。山城が気づかない訳ないか。

山城は静かに語った。できれば触れて欲しくなかった過去、触れなくなかった思い出を。

なるべく客観的に、平静を装い、過去の事として。

「でも、私。少し木野村に感謝しているんです。木野村に出会わなければ鼓と友達になる事はありませんでしたから。あつ、でももちろん許すつもりはありませんよ」

全くこの人はどこまでお人好しでピュアなんだ。

「もう、こんな時間です。帰りましょう」

「そうだな。…部室の鍵は俺が返しておくよ」

「あのっ、それは…」

露骨な気遣いに見えてしまうか。あの話を聞いた直後だしな。

「山城、辞書は持つてるな」

「はいっ」

「じゃあ、気をつけて帰れよ」

「気にするな」とはあえて言わなかった。

「鼓っ、あの…」

「どうした？」

「メアドを教えてください！」

なんだこの背中のみず痒さは。なんだ、これはどっという展開なんだ？つーか、今このタイミングで！

「夏休みにリベンジを計画していますので、日にちのやり取りで必要かと思ひまして」

「山城、何の話だ？」

「鼓を家に招くりベンジです！」

はあ…そういうことですか。

俺は携帯を出し、その場でサクッと赤外線アドレスを交換する。そうだよ、携帯って便利な物があるのになんで今まで気がつか

かったんだらう。

携帯を必要としないくらい俺達は偶然的に会っていたのだ。

山城を見送り、博樹さんを探そうと校舎へ戻る。もしかしたらもう帰ったかもしれない。いや、普通なら帰ったと思うだろ。けれど俺はまだ博樹さんが大学内にいるような気がした。

「やあ、鼓君」

そして俺のカンは当たった。相変わらず博樹さんは気配を消して俺の後ろに立っていた。

「博樹さん、これ部室の鍵です。今日はありがとございました」

「君は梢ちゃんに似ているね」

「え？」

「とても律儀だ」

博樹さんが受け取った鍵を無造作にズボンのポケットに突っ込む。

俺と山城が似てる？笑わせるな。

「山城を誰だと思ってるんですか」

「ん？」

「山城は気づいてますよ。博樹さんの嘘に」

博樹さんの顔から笑みが消えた。余裕の無い博樹さんの表情を初めて見るかもしれない。

直接山城の口から聞いた訳じゃない。でも言動でわかる。

嫌っているというのに、拒みはしない。博樹さんから本気で逃げた事もない。

口では「冷たい人」とは言っても、「根っから悪い人じゃないでしょ」と聞けば否定しなかった。

そして、今日昔の話を聞いた。

言動と矛盾しているように見えた。嫌う理由がハッキリあるのに拒まない山城。

でも、本当の理由を知っているとするとするなら…真っ直ぐで頑なな山城らしいと思った。

「山城はもう、昔の山城じゃないんです」

「じゃあ、なんで俺を避ける」

「だから許してないんです。山城は真っ直ぐだから、多分きちんと謝らないと許してくれないと思います」

「俺に蒸し返って？」

「俺は蒸し返して聞きましたけどね」

「……」

逃げているのは山城の方じゃなかった。

近づいてきたのは博樹さんだったけど、本当に逃げていたのは博樹さんの方。

冗談のように付きまとして、軽い雰囲気でも過去に少しでも触れる。そして突然、思いついたように自分の想いの欠片を吐く。

「山城は頑なです。だから明確なきっかけが欲しいんです。今日みたいな冗談のように聞こえるものではない」

「博樹さん。前に山城は「人のためなら自分は嘘をつける」と言いました」

その時、そんな事考えていなかったら。だからこそ、それが山城の本音だと思う。

「それでは、ダメですか？」

「まさか、君にダメ押しされるとはな」

博樹さんは肩をすくめ、そして笑って俺に背を向けて歩き出した。その表情がどこか吹っ切れたように見えたのは俺の気のせいだろうか。

19話 二人きりの部屋（後書き）

おおっ、なんでこんな展開になってんの！！勝手に動きすぎだよ君
たち？（ ;)

20話 宮下翔子物語1（前書き）

突然ですが、梢ちゃん家のお手伝いの宮下さんの視点です。

やっと書けるぜ！イエ（ ） イ 夜中のテン

ションは恐ろしいですね。

20話 宮下翔子物語1

「宮下さん。夏休みにリベンジです!」

帰って来るなり梢ちゃんには私にそう告げた。

「果たし状でも書くつもり?」

「それは良いかもしれません」

楽しそうに話す梢ちゃんから、夏休みもう一度鼓君を家に呼ぶつもりだという事を聞いた。

良い人と巡り会えた梢ちゃんは実に微笑ましかった。

私、みやした しょうこ 翔子が山城家に来たのは私が20歳の時。お手伝いさんとしてこの家に来た。その時の梢ちゃんは小学4年生。季節は秋で二学期がちょうど始まった頃だった。

子供の世話をするのが私の本来の仕事だったけど、あの時の梢ちゃんは殆ど話さない子供だった。

それなりに事情があるのは知らされていた。小学4年生の夏休み中に突然転校する子。表向きは親の都合と言うことになっていきしいが、子供のために引越しまでしたのだから、原因は多分虐めじゃないだろうかと私は思っていた。

両親は夜遅くまで帰って来ないので、私は夜まで居た。その分バイト代も良かった。

梢ちゃんは聞き分けがよく。喋らなくても頷いたりして意思表示が出来たので、実に手のかからない子だった。

だから勤めて一週間後、住み込みで働いてくれないかという頼みの意味がわからなかった。だけど、私は引き受けた。梢ちゃんの両親はいい人達だったし、梢ちゃん自身も良い子だ。断る要素なんて一つもなかった。

しかし、過保護過ぎるんじゃないかと思っていた私の考えは、一

夜で吹き飛んだ。

慣れない環境での眠りは浅く、夜中に水でも飲もうとキッチンへ向かうため廊下を歩いていった。すると一つのドアから光りが漏れていた。

そこはトイレで特に気にすることなく通り過ぎようとしたその時。「ゲホゴホツコホ……」

私は躊躇いなく、トイレのドアを開けた。そこには蹲った梢ちゃんがあった。

「梢ちゃんっ、大丈夫！」

私は小さな背中をゆっくりとさすった。ちらりと便器の中を見ると、嘔吐物らしき物はなかった。

吐けない？それとも流した後か。

梢ちゃんの息が落ち着いてきたのを見計らい。私は梢ちゃんをリビングへ連れて行った。

ソファーに座らせ、私はコップに水を入れて梢ちゃんの前のローテーブルに置いた。

梢ちゃんは何も言わずにちびちびと水を飲む。

私は梢ちゃんの隣に座った。手を観察してみるけど、吐きダコのようなもの無かった。日常的に吐いてる訳じゃない？

私はもう一度、梢ちゃんの背中をゆっくりさすった。いつどこで梢ちゃんの張り詰めた糸が切れるか分からなかった。だからさっき拒まれなかった背中をさする。

梢ちゃんは私の手を払う素振りも見せなかった。

コップの水を半分飲み終わり、もういいと言うように梢ちゃんはローテーブルにコップを置いた。

もう、大分落ち着いたかな。

「梢ちゃん、少し質問していい？」

梢ちゃんは分かっていたのだろう。素直にコクリと頷いた。

「夜になるといつもああなるの？」

梢ちゃんは首を横に振った。

「どういう時になるか、わかるかな？」

小さな声で梢ちゃんは呟いた。

「……夢を見ると……」

流石にどんな夢？とまでは聞けなかった。それが悪夢である事は間違いなさそうだ。

「梢ちゃん、一緒に寝ようか。梢ちゃんが夢の中で助けを呼べるように手つないでね」

コクコクと梢ちゃんは頷いた。良かった嫌がられなくて。

人の体温はそれだけで安心する。その証明のように手をつないでベッドに入ってから梢ちゃんはすぐに寝息を立て始めた。私はこの子の事を軽く考えていた。虐めなら新しい環境と時間が忘れさせてくれると思っていた。

私の考えは甘かった。

この子は小さな身体に抱えきれないものを抱えている。

翌日、梢ちゃんが学校に行ってから梢ちゃんの両親に昨夜の事を話した。

「あの、梢ちゃんに何があつたか教えてもらえますか」

流石に事情を知らなければこれから対処の方法も考えられない。

私は当然予測された質問だと思っていた。

けれど返ってきたのは困った表情と思いがけない言葉。

「それが、私達にもわからなくて」

「…それは虐めの原因がわからないという意味ですか」

「そうではなく、梢が…ああなつた理由が分からないんです。ある

日突然、離れたいと言っばかりで、虐めも疑いましたが梢からも学校側からも虐めは無いと言われました。梢とも話しましたが…その話そうとすると吐いてしまって。私達も何が梢を追い詰めているのか分からないんです」

私の手が梢ちゃんのお母さんに握りしめられる。

「梢をお願いします」

その姿は神様に祈るように見えた。

父親は医者で母親が検事。完璧な肩書きの家庭で私はどこか冷めているんだろうと勝手に思っていた。

それは違った。親にエリートも庶民も差は無い。

「わかりました」

私は覚悟を決めた。私はこの人達から梢ちゃんを預かる身だから。

20話 宮下翔子物語1 (後書き)

やっと書けた宮下さん) p. q

21話 宮下翔子物語2

さてと、どうしようかな。私はカウンセラーじゃない、ただの子守…お手伝いさん。

でも覚悟を決めたからにはやれる事をやる。

…取りあえず、掃除でもするか。

一日の家事に追われ、全て終わった頃に学校から梢ちゃんが帰ってきた。

「おかえりなさい、梢ちゃん」

「…ただいま」

帰ってきた梢ちゃんの様子がおかしい。

梢ちゃんはチラチラと私を見ては俯いた。まるでイタズラを隠している子供みたい。

「梢ちゃん、どうしたの？」

私は屈み、梢ちゃんと視線を合わせた。けれど、すぐに梢ちゃんの視線は下に落ちた。

もしかして、今の学校でも虐められているんだろうか。これは気づいて欲しいってサインなのか。

ハッ！もしかして私の質問が悪かった！？「どうしたの？」って追い詰めてるみたいに聞こえたのかな…。

わかんないよ。だって私こういうの初めてだもの。

「…宮下さん」

「はいっ」

声が裏返った。それに「はい」って私は…。

「…宮下さんは何も聞かないの？」

梢ちゃんは俯いたまま、でもハッキリとそう言った。
私は一瞬固まったけれど、すぐに納得した。

ああ、そっか。

梢ちゃんはコレが初めてじゃない。今まで何度同じ事を繰り返してきたか。

俯く頭、ぎゅっと握りしめられた両手。

私の様子をうかがっていたのはいつ聞かれるのか気にしていたから…ううん、恐かったからだ。

「梢ちゃんは聞いて欲しい？」
首を横に振る。

「言いたくない？」
コクリと頷く。

「言えない？」
梢ちゃんはバツと顔を上げた。目の前には私の顔がある。梢ちゃんは私の目を見て、頷いた。

「うん、わかった。じゃあ、おやつにしようか。梢ちゃんランドセル置いて、あっ手洗いうがいも忘れずにね」

「宮下さん！」
梢ちゃんの顔にはハッキリ「どうして？」と書かれている。

梢ちゃんの良いところであり、悪いところ。梢ちゃんはしっかりし過ぎている。

「それはね、梢ちゃんが可愛いから」

「っ宮下さん！」

「さあ、おやつおやつ」

自分が悪いみたいなの顔をしていた。話さないこと？話せないこと？義務じゃないんだから、言わなきゃなんて思わなくていいのに。

「今日のおやつはホットケーキだよ」

「わあ」

蜂蜜がたっぷりかかったホットケーキを一口食べる梢ちゃん。おいしいと言っように笑う。

「おいしい？」

「はい！」

嫌なら思い出さなくていい。忘れられるならその方がいいと私は思う。

幸せそうに笑う、梢ちゃんを見たら余計にその想いは強くなった。

「梢ちゃん、今日学校どうだった？」

梢ちゃんは自分から「聞いて、聞いて」と話すタイプじゃなかったから、私は毎日学校の様子を聞いている。元気よく学校に通っている姿から学校自体がタブーでない事がわかった。

「今日は先生に褒められました」

「なんでなんで」

「算数の問題を予習してたから」

「えらいな、梢ちゃんは」

毎日話を聞いているけど、梢ちゃんの口から友達の話が出た事は一度も無い。

ワザと避けるように話していた。つまり「言いたくない」ことなんだろうと思う。

転校したばかりだし、速攻で虐められてとは思わないけど…気が合う子とか居ないのかな？それとも梢ちゃん人見知りしてると

か。

しかし、それを確かめる日は意外と早く転がり込んできた。

学校から電話があった。梢ちゃんの学校生活についてお話したいことがあるとの事だった。

学校側にも梢ちゃんが問題を抱えている事を伝えられているのかもしれないし、いじめ問題で敏感になっている学校側からの措置かもしれない。

これは梢ちゃんが隠している事を知る良い機会だと私は思った。

その日の深夜。梢ちゃんの両親が帰ってきて私は学校から電話があった事を伝えた。

二人とも仕事が忙しく学校に行けなさそうだった。そこで私が行くことになった。

「私でいいんでしょうか」

「君はよく梢を見てくれている。それに君なら梢を救える」

過大評価だとすぐさま思ったが口には出さなかった。

結果から見れば、梢ちゃんのお父さんの言葉はあながち外れていなかったのだけれど、その頃の私はそんな事知らない。

それと学校訪問をきっかけに私は探偵のような事を始めるのだが、それもまだ知らないし、夢にも思っていなかった。

学校訪問の事は梢ちゃんには伏せておいた。全て話すだけが得策でないことを二人は知っていたからだ。

翌日、梢ちゃんが学校へ行ってから学校に両親が多忙で変わりに私が行く旨とこの事を梢ちゃんに伏せていること伝えた。

梢ちゃんを担任している先先はとても察しの良い先生だった。

「では、梢ちゃんが帰る前に終わらせた方がいいですね。では急ですが、今日の2時頃に小学校へ来ていただけますか正門でお待ちし

「ています」

「わかりました。よろしくお願いします」

21話 宮下翔子物語2（後書き）

展開を急ぎ過ぎた！っと思っで書き直したらすっごく進みが悪くな
っていた？（´・`）ハッ！！宮下さんと言っより梢ちゃんの過去
編みたいになってきた。

22話 宮下翔子物語3

時間は午後2時。私は小学校の正門にいた。

「こんにちは、宮下さんですよね」

私を迎えてくれたのは、私よりは年上だけどまだ若い女の先生だった。

「私、梢ちゃんの担任の河野カノです。どうぞこちらへ」

私は正面玄関から堂々と校舎に入った。梢ちゃんに見つかったらどうしようと思っていた私は相当ビクビクしてたらしい。

「大丈夫ですよ。生徒は今授業中ですし、この辺りは校長室や応接間ですからあまり生徒は近づきません」

「そうなんですか」

ここまでの配慮。やはりこの人、梢ちゃんの事情を知っている。

私を通されたのは長机がコ字型に並べられた部屋だった。多分、会議室か何かだろう。

私は先生と向かい合うようにパイプ椅子に座った。

最初に口を切ったのは、やはり先生だった。

「宮下さんは梢ちゃんの事どれくらいご両親から聞いていますか」

「突然梢ちゃんが引越したいと言い出した事とその原因がわからない事、…それと、今でも悪い夢にうなされいる事くらいです」

「そうですか」

「今日、私が来たのは梢ちゃんの両親が忙しいのはもちろんですけど、ここ二週間程梢ちゃんと一緒に暮らしています」

「わかってますよ。梢ちゃんもご両親も宮下さんを信頼している事」
「にっこりと先生は笑った。」

その笑顔で私は神経質になってる事に気づいた。ゆっくりと呼吸

をして気分を落ち着かせる。

私がこの人を疑ってどうする。

「今日、お呼び立てしたのは友達の事です。梢ちゃんは素行も成績も優秀ですし、大人しいですけど、物事に取り組む積極性もあります。…ただ頑なに友達を作ろうとしません」

「梢ちゃんが？作れないのではなく？」

私を知る梢ちゃんは真直ぐで優しい子。友達なんていらぬなんて言う捻くれた子じゃない。

「はい、クラスの子が遊びに誘っても、私がクラスの輪に入れようとした時も頑なに拒みました。以前の学校ではイジメはなかったと聞いています。心当たりは無いでしょうか」

「私には分かりません。ご両親に聞いてみます。すみません、お役に立てなくて」

「いいんです。梢ちゃんの近くに宮下さんのような人がいる事がわかっただけで十分です」

それから先生としばらく他愛ない話しをして小学校を後にした。

「ただいま」

「お帰り、梢ちゃん」

先生の配慮もあり、私はいつも通り梢ちゃんを迎える事ができた。

梢ちゃんが寝た頃。私は梢ちゃんのお母さんに電話を掛けた。

二人共今日は帰れないと聞いていたから。報告は早い方がいいし、それに聞きたい事もあった。

「はい、山城です」

「今晚は、宮下です」

「宮下さん、どうしたの？何かあった？」

「いえ、今日小学校に言っただけで、その話を。時間ありますか？」

「ええ、大丈夫よ。今一区切りついた所だから」

「梢ちゃん、今の学校では評判良いみたいです。成績優秀で素行も良いと。ただ友達を頑なに作るうとしないそうです」

「自分から友達を拒否してるとて事かしら」

「そうみたいです。前の学校で仲良くしていた友達に心当たりありませんか？」

「その子の所に直接行くつもり？それは梢が一番嫌がる事じゃないかしら」

「私、いつまでも梢ちゃんに悪夢を見せるつもりはありませんよ」
時間が解決してくれないと分かったなら、行動あるのみだ。

「…本当、あなたは幸枝さちえ叔母様が寄越しただけあるわ」

幸枝さん、私にこのバイトを紹介してくれた私の実家の近くに住んでいる小柄なお婆さん。

コンビニのバイト、いわゆるフリーターをしていた私に「子供は好き？」と突然お手伝いさんのバイトを紹介してきた。

「少し訳ありな子なんだけど」と言われていたのに、安易に引き受けた私も私だ。

小柄でいかにも優しいお婆さんだった幸枝さん。

もし私の性分を見抜いて頼んだなら幸枝さんはかなりの切れ者。きっと私はこの家庭の爆弾になる。

私は割と目的の為なら手段を選ばない人間の部類に入る。

梢ちゃんを助けたいと思うなら方法はいくらでもある。

梢ちゃんを傷つけたくないなら周りから攻略すればいい。私は知っていた。黙っていれば傷つかない事がある事。

「わかったわ。きれいごとだけで解決する事なんて何も無いわ。私もよく知ってる」

流石、やり手の検事だ。腹が据わるのが早い。

「梢は小さい時、病気がちだったから友達がなかなかできなかったの。でもハトコのお兄ちゃんが近くに住んでてね。よく面倒を見てくれてたわ。だから、その子に聞けば何か分かるかもしれない」

私はその子の名前と住所を聞いて電話を切った。

それから私はひっそりと梢ちゃんの部屋に入った。

梢ちゃんは今日も、うなされていた。起きる一歩手前だ。

私は汗ばむ梢ちゃんの手を握った。

しばらくすると唸り声の代わりにスーッと静かな寝息に変わった。

私が初めて泊まった日以来、梢ちゃんは吐いていない。

それは、夜な夜な私がこうして手を握っているから。

あなたは誰の手にすがっているの？

まだ小さな手が私に甘えようとした事がない。

差し出せば拒まない。けれど、自分からは決して手を伸ばさない。

その姿が痛々しくて、胸の奥がキューと締め付けられて苦しくなる。

守ってあげたい、助けてあげたい。

そう思うのは自然な事だった。

22話 宮下翔子物語3 (後書き)

梢ちゃんの過去は結構長くなるかも。気づいたら10話くらいにな
ってたりして) ;)

23話 宮下翔子物語4

行動は梢ちゃんが学校に行っている間に全てするようにした。

梢ちゃんのハトコの住所はロックのかかる携帯に入れ、メモはビリビリに破いてから水に浸して生ゴミのゴミ袋に捨てた。

地図をめくって、携帯を見ながら探すと思っていたよりも近くにあった。

ここより、5駅離れた街だった。県外だったら行くだけでも骨が折れる。けれど、移動の面はさほど考えなくて良さそう。

それにしても、意外と近くに引越したのね。

でも、それはよくよく考えてみると凄く妥当なものだと気が付いた。

二人の仕事場の事もあったからさほど遠くへは引越し出来ない。でも、梢ちゃんは離れたがった。

5駅というのはなかなか良い距離だ。仕事場から離れるが通えない距離じゃない。でも転校はしなければならぬ。

それに小学生の行動範囲に限界がある。偶然、前の学校の子と会う可能性もぐっと減る。

全てがちょうどいい。これは偶然？いいや、気にしないでおう。今は関係無い。

さてと、場所はわかったし、次はどうやってその子に会いに行くかね。

その前に下調べした方がいいかも。

「ただいま」

「おかえり梢ちゃん」

「わゝ、良い匂いがする」

「ケーキ焼いたの。一緒に食べようか」

「手洗つてくる」

「うがいもよゝ」

「はい」

もちろん、私はその場所に行った。けれど思ったような結果は出なかった。

聞き込みが出来れば良かったけど、子供を公園で遊ばせなくなつたこのご時世。不審者になるのはごめんだ。

こういう時は使える物は何でも使う。コネでも信用でも…そう言ったのは幸枝さんだったけ？

笑つて言う幸枝さんと言葉のギャップに驚いたのは覚えていた。でもどんな場面で言われたのかまでは思い出せない。

私が見えるの物は限られてくる。けど、使えない物が無いわけじゃない。

使った結果は意外と早く、3日後にやってきた。

電話がかかってきたのは昼頃だった。出ると相手は梢ちゃんの先生だった。

「この間、頼まれたことで」

「ありがとうございます。忙しいのに、面倒な事を頼んでしまつてすみません」

「いいえ、これくらい。それに前の学校へは梢ちゃんの事で聞いた
りしてましたから。それで、梢ちゃんのハトコの子。小学6年生で、
リーダーシップがって面倒見が良いみたいです。評判は良いですよ。
梢ちゃんの時とは違っていらぬ情報まで色々出てきました。口頭
で伝えるには多いのでファックスで送りますね」

「それは、ありがとうございます。何かわかったらまた連絡します
ので」

「こちら協力できることはしますので、それでは」

先生は短く話を終えた。もしかしたら、休憩の合間だったのかも
しれない。

ファックスはすぐに届いた。届いたのは三枚の文書。それを一枚
ずつ写メしてから内容を携帯の中に打ち込んでビリビリに破いて水
に浸けた。

けれど紙はなかなか水が染み込まず、文字もあまり滲まなかつた。
シュレッダーにかけた気分だったけどそんな便利な物はなく、百
均で買ってきた灰皿の中にちぎった紙を入れて燃やした。

証拠隠滅

私は徹底的にそれをした。

そして、その子と直接会う日がやってきた。

私はその日、同窓会に行くと言って家を出た。土曜日で梢ちゃん
が1日家にいるけど、幸枝さんが梢ちゃんの相手を引き受けてくれ
た。

私は電車に揺られ、梢ちゃんが元々住んでいた街に着いた。小さ
な駅にその子は居るだけで目立った。まだ成長しきれしていない身体
にまだ幼さが残る顔。どこか儚さが漂っていて…少しだけ梢ちゃん
に似てると思った。その子はすぐに私に気がついて駆け寄ってきた。

「こんにちは、あなたが宮下さんですか」

「そうよ」

「幸枝叔母様から聞いてます。行きましようか」

幸枝さんに相談しといて本当に良かった。この子とどうやって会うか。それが最大の難関だったけどそこは幸枝さんに頼んで身内のコネを使わせてもらった。

小さな背中先に先導されて、私は歩いた。

辿り着いたのは、その子の家だった。一度下見したし、それくらいは覚えていた。梢ちゃんの家はこの家から二軒離れた向かい側にある。超ご近所さん。

「えっと…」

「大丈夫ですよ。父も母も今日はいませんから。それにこんな子供と喫茶店に入る方が目立ちますよ」

私は見くびっていたらしい。リーダーシップがって面倒見が良くって評判の良い子。人間それだけなんてありえない。この子は分かってて周りからそう評価されてる。頭の良い子だ。

「それじゃあ、遠慮なく邪魔するわ」

リビングに通されるとその子は当たり前前のように私の前に温かいお茶を出した。良くできた子。そう評価されるのが分かったような気がした。

「改めて、自己紹介するわ。私は宮下 翔子。今梢ちゃんと一緒に住んでるわ」

「僕は木野村 博樹です。…梢ちゃんのハトコです」

さて、私はどうやって博樹君を攻略しようかしら。

24話 宮下翔子物語5

どんな物や人でも攻略にはいくつかの方法がある。

まずは相手を知れ。

それは下調べだけの事じゃない。

「博樹君は幸枝さんから私の事どう聞いてる？」

「…梢ちゃんの事を知りたがってる人がいると聞いてます」

全く、幸枝さんめ。全部話してる…それだけ受け止められる子なのはわかるけど、仮にも小学六年生だっていうのに。それは、あまにも酷じゃない。

まあでも、やりやすい事なのは事実だわ。

「それじゃあ、私がんばって博樹君の所に来て、今日どんな話をするつもりなのか大体分かっているのかしら？」

「はい、大体は。宮下さんは幸枝叔母様からボクの事どう聞いていますか」

「梢ちゃんの事を聞くなら博樹君が適任だろうってね」

「そうですね。きっと幸枝叔母様はお見通しなんでしょうな。多分全部」

「どうということ？」

「ボクですよ。梢ちゃんが転校を言い出した原因。ボクが梢ちゃんを傷つけた」

博樹君はまるで世間話をするように表情を変えなかった。これは覚悟の賜かしら。

「梢ちゃんに何をしたの？」

「酷いことを言いました。ボクに近づくな、梢ちゃんの面倒見るのはもうウンザリだ。そう言いました」

博樹君は表情を変えないようにしていた。まるで後悔することを許さないみたいに。

「ケンカしたなら謝ればいいじゃない」

私は軽く言った。

思った通り、その言い方は博樹君の坎に触ったみたい。

「ケンカではありません。ボクがしたのは裏切りです。梢ちゃんがボクを信頼しているとわかっていた。なのに、ボクは梢ちゃんを裏切ったんです。だから梢ちゃんはボクから離れたくて引越したんです」

吐き出すように言った。これが博樹君の本心…。

なんだかこの子、梢ちゃんみたい。

「ねえ、博樹君。甘い物好き？」

「えっ、はい」

「じゃあ、ちよっとキッチン借りて良いかな」

「…はい」

「材料勝手に使っちゃうけど良いかな」

「いいですけど、何するつもりですか」

「ホットケーキを作るの」

博樹君は興味深そうに私がホットケーキを作る様子を見ていた。

歩けば、どこにでも着いてくるアヒルの雛みたい。

「今日はありがとう。私は失礼するわ」

私は博樹君の前にホットケーキを置いて、そう告げた。

博樹君は不思議そうに私を見ていた。それも、そうか。本題の梢ちゃんの話は早々に切り上げて、ホットケーキ作ってるんだもの。

「あなたが覚悟して私を招き入れてくれたのは嬉しかった。でもね、

私はあなたを傷つけに来たんじゃないの」

いくら頭が良くて、大人のように振る舞うことが出来ても。

あなたはまだ子供で、子供でいて良い時期だから。

これ以上、苦しまなくて良いの。

「ボクはまだ子供ですか」

「ええ、子供よ」

「そうですか。ありがとうございます」

梢ちゃんは病弱でそのせいで学校も休みがちで友達が出来なかった。そんな梢ちゃんを支えてたのが博樹君。梢ちゃんの遊び相手になってくれた。自分の友達よりも優先して。

絵に描いたような優等生。でも放課後、友達と遊んでいる博樹君を教師達は見たことがない。どこに言ってるかと思えば、病弱なハトコのお見舞い。

これもまた、絵に描いたような王子様っぷり。それに梢ちゃんも守ってあげたくなくなっちゃうくらい可愛いお姫様。

信頼してた博樹君にあんな事言われたら確かに梢ちゃんはショックを受けるだろう。

でもそれじゃあ、腑に落ちない。

だったら、なんで梢ちゃんは博樹君を庇うの？酷いことを言われたって言えばいいのに。

それに博樹君が罪悪感に押しつぶされる必要もない。実際遊びたい盛り、梢ちゃんの事を面倒だと思わないなんて無理よ。

これじゃあ、お互いを庇い合ってるみたい。
そんな理由どこにも見あたらない。

それに、友達を拒絶する理由は？

梢ちゃんはもう病弱じゃない。友達だって欲しいはずなのに。

引き金を引いたのは博樹君だ。それは間違いない。でもそこまで
追い詰められるだけの何かがある。

マンションの前まで着くとある人が待っていた。

「同窓会にしては帰るのが早いんじゃない？」

「幸枝さん…、梢ちゃんは」

「今、昼寝してるよ」

幸枝さんの鋭い目が私を捕まえる。

「翔子さん、私に話があるんでしょう」

この人は博樹君が言った通り、全てお見通しなのかもしれない。
私は思いきって口に出した。

「幸枝さんは全部知ってるんじゃないですか」

梢ちゃんに何が起きたのか。なぜ、ああなってしまったのか。

「…そうね。多分、翔子さんが考えてる全てを私は知ってるわ」

「じゃあ！」

「なんで教えなかったか。翔子さんに博樹君を救って欲しかったの
よ。翔子さんの事だからろくに話も聞かなかつたんじゃない？」

「……」

「ふふっ、凶星みたいね。博樹君、翔子さんに会って少し救われた
と思うの。本当に救われる時は梢ちゃんに許される時だけけど、今
のあの子にそれだけの強さは無いし、その時はきつと来るからいい
の。でもそれまであまりに重い荷物を持つのは辛いでしょ」

一体何で人を救えるかなんて私には分からない。

でも、例えば黙って側に居てくれるだけで救われる事がある。

あのホットケーキで博樹君を少し救えたかしら。

24話 宮下翔子物語5（後書き）

そろそろ、鼓が恋しい…。

25話 宮下翔子物語6

私たちは場所を変え、近くの公園のベンチに並んで座った。

「それで、幸枝さん。梢ちゃんを追い詰めたものはなんだったんですか」

幸枝さんはクスリと笑った。なぜ笑えるのか、不振に思った。けど、幸恵さんはとても悲しそうな目をしていた。

その目はふと博樹君を思い出させた。

「そうねえ、あなたも大分頑張ってくれたみたいだし。私の知っている事なら教えてあげるわ」

幸枝さんはふと上を見て、遠くを見るように。けれど全て見てきたかのように語り始めた。

それを私はただ静かに、一言も取りこぼさないように聞いた。

梢ちゃんは病気がちであり学校に行けなかった。

一週間学校に行つては、身体が弱り熱を出した。

一人部屋のベッドの上で一日の大半を梢ちゃんは過ごし、体調が万全になる頃にはクラスメイトの名前を覚えきれていないのは梢ちゃんだけになっていた。梢ちゃんは友達を作るタイミングを逃してしまった。

けれどそれは梢ちゃんの苦にはならなかった。

「梢ちゃん」

学校が終わると真っ直ぐに博樹君が梢ちゃんの部屋にやって来た。

「昨日より顔色良くなってるね」

「うん、昨日よりずっといいの。ねえ、昨日のお話の続きを聞かせて」

「梢ちゃんはお姫様の話が好きだね」

「だって、幸せな気持ちになるもん」

梢ちゃんの側にはいつも寄り添うように博樹君がいた。

二人の世界をそこで完璧に完結していた。

しかし、箱庭のような幸せは一生続くものではなく、そして脆かった。

梢ちゃんの身体は成長と共に段々と丈夫になっていき、小学三年生の秋頃には毎日学校に通えるようになっていた。

そこで初めて梢ちゃんに友達ができた。同じクラスの女の子。クラスの中でも可愛くて、明るくて、人気者だった女の子。

梢ちゃんは初めての友達に素直に喜び、「こずちゃん」「みんなちゃん」と仲良く呼び合うようになるまで時間はかからなかった。

友達ができて、梢ちゃんはクラスになかなか馴染めなかった。

いつも一人でいた梢ちゃんは大勢の人間と一緒に行動する事がどうも苦手だった。

「はい、みんな5人グループを作ってください」

こんな時、梢ちゃんの周りでは次々と人が固まっていく。その中でどうしたらいいのかわからず、梢ちゃんはボー然とその光景を眺めていた。

観察することで対処法を見つける。身体が弱く、あまり動けなかった梢ちゃんが生活する上で身につけた力だ。

梢ちゃんは無自覚に癖としてそれを行っていた。その癖の意味を知っているのは家族と博樹君だけだった。

「梢ちゃん、何ボーっとしてるの」

それを教師からしばしば注意されることもあった。

しかし梢ちゃんが不登校になる事はなかった。教師に怒られよう

と、集団の中で上手く動けなくても、それを大して苦に感じていなかったからだ。梢ちゃんは学校で孤独を感じる事がなかった。

「こずちゃん、こっち」

「うん！」

なぜなら隣には必ず出来たばかりの「友達」が寄り添っていたから。

それからしばらくして、放課後3人でいることが多くなった。

梢ちゃんと友達と博樹君の3人で。

一見するとそれは自然な流れのように見えた。いつも一緒に居た梢ちゃんと博樹君、そこに友達が加わる。

けれど、それは完璧な箱庭にはほど遠かった。

それから友達が本性を現すまでそう時間はかからなかった。

25話 宮下翔子物語6（後書き）

久しぶり過ぎてちょっとペース上がらない。
今回少なくてごめんなさいm(´▽｀)m !!

26話 宮下翔子物語7

「ねえ、博樹君」

「博樹君はどう思う?」

友達の口から「こずちゃん」と出る事はめつきり減り、じゃれる犬のように博樹君にまわりついた。

博樹君は梢ちゃんの王子様であったように、学校でも憧れの的だった。

博樹君も、そんな女の子に会うのは初めてでは無かった。始め博樹君は梢ちゃんの友達に話を合わせつつ、けれど決して梢ちゃんの隣を離れなかった。

友達が「こずちゃん」と呼ばない代わりに博樹君が「梢ちゃん」と呼んだ。

大抵の子は身体の弱い梢ちゃんの面倒を見る博樹君の邪魔をしないよう、離れていった。

それは、梢ちゃんが居ない所では博樹君はその子達と話していたからだ。そして、誰に対しても平等だと思いついていった。

しかし、今回はそうはいかなかった。

友達は梢ちゃんから離れない博樹君に苛立ち、自分を可愛く見せることを止め強硬手段に出た。

友達は博樹君を脅した。

「博樹君があの子から離れないんだったら、あの子の友達止めちゃうんだから!」

それはとても効果的な脅しだった。

梢ちゃんが学校に通えるようになった時、博樹君は梢ちゃんからクラスの様子を聞いてた。

「初めて友達ができたの!クラスにまだ馴染めないんだけど、友達がいるから大丈夫」

とびつきりの笑顔で話してくれた。それは博樹君にとって自分のことのように嬉しかった。

なのに、その友達が梢ちゃんの事をあの子呼ばわり。博樹君は梢ちゃんを悲しませたくない一心だった。

それから一週間も経たない頃だった。

梢ちゃんの目の前で博樹君が言い放った。

「ボクに近づくな、梢ちゃんの面倒見るのはもうウンザリだ!!」
学校からの帰り道、三人で帰っている時だった。

なんの前触れもなかった。そぶりすらも。

けれど、とても嘘と思えないほど博樹君の言葉には真実味があった。

「ごめんなさい」

梢ちゃんはそう言うと二人の前から走り去った。

友達は突然の事であっけにとられたが、すぐに堪えきれないようにやにやと笑い博樹君にすり寄った。

けれど、博樹君は友達を冷たく突き放した。

「ボクに近づくな。君は梢ちゃんの友達なんかじゃない」

「…そんな事言っているの？私が離れたらあの子クラスで独りぼっちになるよ」

「もう梢ちゃんは戻らない。だから君の事なんてもうどうでもいいんだ」

目の前に居る博樹君は友達の知っている優しい博樹君とはあまりにもかけ離れていて、それまで抱いていた淡い恋心や憧れが一気に冷めるを通り越して恐怖さえも感じた。

友達は梢ちゃんと反対方向に走り去った。

話を終えた幸恵さんはゆっくり一つ呼吸をして私を見た。にっこり微笑む幸恵さんの顔は「さあ、質問をどうぞ」と言っていた。

質問は山のようにある。

「どうして博樹君はそんな事を？」

「梢ちゃんを守るためよ。梢ちゃんが傷つかずに友達から離す方法。博樹君はね、梢ちゃんが友達に裏切られたと感じることを何よりも恐れていたの」

「だから自分が裏切ったと？」

「友達に裏切られたと気づく前に手を打ちたかった。博樹君は自分が梢ちゃんを拒めば離れることを知っていたの。それまで博樹君は梢ちゃんに怒ったり怒鳴ったりしたことがなかったらしいから…梢ちゃんには相当なショックだったと思うわ」

博樹君が自分を追い詰めていた理由はわかった。確かに友達から梢ちゃんを離すのが得策だと思う。下手に梢ちゃんを庇えばクラスの中で虐められたのは確かだったろう。

それでも、梢ちゃんが博樹君を庇う理由がわからない。

そんな私の頭の中を見透かすように幸恵さんは言った。

「梢ちゃんはね、一番近くで観察していたのよ」

それは梢ちゃんが生きる上で身につけた力。

「気づいたのよ。友達だと思っていて自分が自分のことを友達だと思つてなかった事に」

「そんな！」

「多分気がついたのは引越してきてからね。一人で居る時間が増えたし、考えずにはいられなかったと思うわ」

「じゃあ、なんで梢ちゃんは…」

「あなたなら分かるんじゃないかしら？」

じつと幸恵さんの目が私を捉える。その目は決して笑っていないかった。

「あなたはどつやって救われたの？」

幸恵さんからその言葉を耳にした時、どうして私だったのかよう

やく分かった。

26話 宮下翔子物語7（後書き）

過去編そろそろ終わりが見えてきた

27話 宮下翔子物語 8

ボタンと大きな音を立ててドアを開けた。部屋からは驚いた顔を出した梢ちゃんが顔を出す。

「宮下さん、どうしたの？」

私は迷わずその小さな身体を抱きしめた。

「宮下さんっ！」

私の腕の中にすっぽり、簡単に入ってしまった。

こんな小さな身体で… たった一人で抱えていた。そう思うだけで、心が… 胸がいつぱいになる。

「… 宮下さん。泣いてるの？」

「そうよ。梢ちゃんが何も言わないから」

「… ごめんなさい」

「辛いなら、辛いって言えばいい。苦しいなら苦しいって、泣きたいなら泣いていいの」

「宮下さんみたいに？」

私の目からはみっともないくらい涙がボロボロとこぼれている。

梢ちゃんは私がどうして泣いているのか分かってない。

そうだろう。私が梢ちゃんと同じ想いを知ってるなんて彼女は知らない。できれば知らないで居て欲しかった。

私はグッと梢ちゃんを身体から引き離し、正面から目を合わせた。

「私は梢ちゃんが好きよ。可愛くて、賢くて、何より優しい梢ちゃんの事が」

それから今度はゆっくりと優しく梢ちゃんを抱きしめた。

「だから独りぼっちだなんて思わないで」

私からは梢ちゃんの顔が見えない。けれど肩が震え、梢ちゃんが顔を私の顔に押しつけた。

はつきりと梢ちゃんの籠が外れるのがわかった。

「っ……………っっ ああああ〜」

梢ちゃんは泣きわめいた。ただ闇雲に、声を張り上げて、私にすがりついて。

誰にも梢ちゃんは救い出せない。それでも助けを求めるように、梢ちゃんは長く泣き叫んだ。

私たちは勘違いしていた。梢ちゃんをここまで追い詰めたのは博樹君でも友達でもなかった。

引き金を引いたのは確かに博樹君と友達だ。

けれど、ここまで追い詰めたのは梢ちゃん自身。

梢ちゃんを追い詰めたのは絶望的な程の「孤独」だった。

人は孤独を味わう事がある。子供の頃や思春期に唐突に訪れることもあるだろう。

しかし、絶望的な「孤独」を味わう人間は少ないそして、それを子供の頃に体験する事はもっと少ない。

私と梢ちゃんに共通していたのは「裏切り」による絶望。

梢ちゃんは絶対的に信頼していた博樹君に。

私は疑うことすらしなかった母親に。

私も梢ちゃんも本当は裏切られてはいなかった。

けれど、不安定な心に深い影を落とすきっかけには十分過ぎるものだった。

あの時、私たちは確かに「裏切られた」と感じたのだから。

絶望的な孤独を私は丁度思春期の頃に経験したことがある。

中学二年の時、私は母親と血のつながりが無いことを知った。

それまで、私を母親は姉妹のように仲が良かった。一緒に買い物をし、友達の相談、恋愛の相談までするくらい私は母親に何でも話し、母親も嬉しそうに私の話を聞いていた。

なぜ、母親と血のつながりが無いと知ったのかよく覚えていない。ただ、目の前が白くなって。本当に周りの言葉が全く耳に入らなくなかった。

気がついたら私は病院のベッドの上だった。

「翔子、大丈夫」

心配そうに私の顔を覗く母親。全てを知ってしまった私は嘘であつて欲しいと思つた。

「…お母さん。私の母子手帳つてある？」

疑つたことなんて一度もなかった。よく似てないと言われる親子だつたけど、そんなの気にしなかつたし。

赤ちゃんの頃の写真がなくても、写真が嫌いな父だったのでさほど不振にも思わなかつた。

「えっ？」

母親の目は一瞬揺らいだ。それだけでもう十分だった。

今なら分かる、母親は全く悪くない。

けれどその時、私は裏切られた。そう思った。だから私は母親から顔を背けた。

「もう、来ないで」

母はそんな私に何も言わずに病室を静かに出て行った。

27話 宮下翔子物語8（後書き）

えっと、いよいよ宮下翔子物語が始まります。

28話 宮下翔子物語9

退院した後の事もよく覚えていない。

ただ目の前の事がぼんやりと過ぎていた。今までの自分が無かったように見事なまでに私は空っぽだった。

気がつくと、季節は夏になっていた。

学校が夏休みに入ると、私は空っぽなまま街を彷徨うようになった。

母と同じ家にいる事を拒み、当てもなく歩いた。母もそんな私を止めなかった。

ある日、漂っているだけの私をある人が呼び止めた。

「そこのお嬢さん」

呼び止めた声に私は振り向いた。

その先には古く小さな趣のある駄菓子屋、中からあまりにも不釣り合いなお姉さんが出てきた。

白のワンピースに白い肌、華奢という言葉がよく似合う人だった。「ちよっとちよっと」と呼ばれるがままに、私は駄菓子屋に入っていた。

お姉さんは年季の入ったアイスボックスからアイスを取り出して、一つを私に渡した。ソーダの棒アイスだった。

戸惑う私に、お姉さんは「おごり」と言っただけでアイスを頬張った。

お姉さんの肌と同じ白いバナラの棒アイス。

袋を開けて、私もアイスを頬張った。

「お嬢さんはこの辺りの子？」

アイスが半分になりかけた頃、お姉さんが私にそう聞いた。

「…いえ、違います」

私は街の大通りを歩く。夏休みで私と同じような子はたくさん居て、誰も私の事を気にしていない。

それが私の気持ちを少し楽にさせてくれた。

その日もいつもと同じように大通りを歩いていると、大通りからのびる裏道に気づいた。その時私は初めて裏道の存在を知った気がした。でも、空っぽな私はそれほど興味がなかった。

しかし、その瞬間なぜか母の言葉を思い出した。

「遊ぶのはいいけど、気をつけるのよ。なるべく人の多いところを歩きなさいね」

その言葉は母が私の母じゃないと知るだいぶ前に言われた。

もう一度裏道を見ると、大通りと比べて人がまばらだった。私は裏道に足を踏み入れた。

ただ、母の言葉に逆らいたかった。そのままフラフラと歩いていたらお姉さんに声をかけられたのだ。

「そう、じゃあ私と同じだわ」

「えっ？」

「私もこの辺りの人間じゃないの、じゃあなんで駄菓子屋で店番してるのって話しよね」

フフフッと笑うお姉さんは子供のように見えた。けれどその笑みは意地悪なものではなく、無邪気でどこか私を安心させた。

「友達がね、私をここに連れてきてくれたの。そしたらおばあちゃんが倒れちゃって、友達はおばあちゃんと一緒に病院。お店そのままにしておけないから私は店番してるの」

お姉さんはよく喋った。私が疑問を口にする前に全てわかっていくように答えた。

「あつ、アイスは私のおごりだから気にしないでね」

私は黙ってアイスを食べた。

そこだけが時間と空間を切り取られたように別のモノが流れていた。

「どうしてって？思ってる」

「私はそんなに分かりやすいですか？」

この前の私だったらこんなトーンで人に話す事は無かった。そんな私が居ることすら知らなかった。

けれど、今は知ってしまった。知らなくていい事を知ってしまった。出来ることなら知らなかった頃に戻りたい。

「そういう訳では無いと思うわ。あなたのことが分かるのは」

「私とあなたが同じだからよ。私もあなたみたいな目で街を彷徨っていたわ」

お姉さんの目はとても優しくかった。その目はお母さんにそっくりだった。

溢れた、何もかもが溢れ出た。

涙も、呻き声も、つかえていた気持ちも、どろどろに渦巻いていた考えも。

途方もなく空っぽだと思っていた私の中は自分で思っているよりもずっと沢山のモノが詰まっていた。

何もかも出し切った頃には空が夕日に染まっていた。

お姉さんは私に白い帽子を貸してくれた。私の格好にはかなりミスマッチだったけど、泣きはらした顔を隠すには他に無かった。

しかし、お姉さんはそんな私の顔を見て「いい顔になったわ」と言ってくれた。

家に帰って、私はリビングに入った。食事をする以外入ろうとしなかった空間。

そこには夕食の仕度をしているお母さんが居た。

私の足音に気がついたお母さんは私の顔を見て驚いた。

「どうしたのっ！何かあったの！！」

私の顔は相当酷いらしい、後で鏡を見てこなくちゃ。

私の心は軽かった。何もなかった事にはできない、でももう怖がるのはやめよう。

「……お母さん」

「私はお母さんの子だよね」

「当たり前じゃない！」

私を愛してくれた母に偽りはどこにもなかった。

お母さんと私は抱き合って二人して泣いた。後で二人の顔を見て笑った。

二人して酷い顔だった。でも、いい顔だった。

それからしばらくして、私はあの駄菓子屋の前を通った。

駄菓子屋には小さなおばあさんがちょこんと座っていた。お姉さんの姿はどこにもない。

幻のように思った。でも私の部屋にある白い帽子があの日、あのお姉さんに出会った事を語ってくれる。

いつかこの帽子を返せる日が来るだろうか

29話 宮下翔子物語10

梢ちゃんは六年生に上がる頃には、初めからそこに居たように学校に馴染んでいた。

「宮下さん、今日クラスの高野さんが本を貸してくれたの」「まあ、どんな本？」

学校の事もこっちから聞かなくても話すようになった。

「すごく面白って」

「魔女が出てくるの、面白そう」

明るく笑い、目を輝かせる事も多くなった。

けれど、梢ちゃんの口から「友達」の言葉は一度たりとも出てこなかった。

いつも「クラスの さん」、例え本を貸してくれる子でも、一緒に遊んでくれる子でもその子達は梢ちゃんにとって「友達」ではなかった。

それから、時間は経ち大学生になった梢ちゃんがある日、恥ずかしそうにキッチンに立つ私の前にやって来た。

「どうしたの、梢ちゃん？」

「…宮下さん。私……友達ができました」

「…本当!!」

持っていたサラダボウルを離して、私は梢ちゃんに抱きついた。サラダボウルはまだ空だったから良かった。

「宮下さんっ!!」

「良かった、本当に良かった」

嬉しかった。自分の事のように嬉しくて、この想いが梢ちゃんに伝わらないかと”きゆう”と力を込めた。

腕にすっぽり収まっていた小さな身体はもうどこにもなく、強く芯のある心を持った女性がいた。

時間は確かに経っていた。

「宮下さん、今まで心配かけてごめんなさい」

ああ…本当に良かった。

「それで、どんな子なの？」

場所をキッチンからリビングに移し、ソファーに座って私は聞いた。

「…とても優しくて、…とても温かな人なんです」

「どう知り合ったの？席が隣だったとか？」

「いいえ、私が忘れた辞書を然るべき所に届けてくれたんです。それに凄く感動して、職員さんに名前を聞いて会いに行っただんです。

…それに今日も…私が図書館で司書さんのお手伝いをしていたら、大変そうだからと手伝ってくれました」

穏やかに話す梢ちゃん表情を見て、友達がとても良い子だとよく分かった。きっとその子も梢ちゃんの良さを分かってくれる。

「これからは友達と一緒にショッピングとかするんでしょう。私はお払い箱かあ」

「どうでしょう？男の人でもショッピングはするものなのでしょうか？」

私は梢ちゃんの友達は当然のように女の子だと思っていた。

「梢ちゃん…友達って男の子なの？」

「はい、言いませんでしたっけ？」

梢ちゃんは本当の意味で自分の容姿を理解していない。可憐で清楚、綺麗で可愛い女の子と一緒にいて友達だと言い張る男がいるだ

るうか？

「…梢ちゃん、それって友達じゃなくて彼氏って言うんじゃないの？」

「違います！鼓はそんな邪な心を持って私に近づいてきた事は一度もありません！！」

恋心を邪とか…恋愛に苦手意識を持つてるのは知ってるけど、相手が梢ちゃんと同じ気持ちだとは言い切れない。

「分かった、一度友達を家に連れてきなさい」

「なんで、宮下さんに命令されないとけないんですかっ！」

「あら、おじさんとおばさんに紹介しないの？二人とも絶対に会いたいって言うと思うけど」

「うっ…」

「それに、梢ちゃんとに釣り合う人がどうか見極めなきゃいけないでしょう」

「いいです、わかりました。鼓は宮下さんが思っているような人ではありませんから堂々と家に呼べますもの！！」

そして、本当に梢ちゃんの友達「鼓君」はやって来た。

容姿は良かった。優男な感じで雰囲気も優しそうで、背筋の伸びた好青年。

けれど、私が印象に残ったのは彼の目だった。芯のある、しっかりとした目。その目は梢ちゃんに似ていた。

彼が友達で良かったと思うと同時にとても残念に思った。

彼が梢ちゃんの彼氏だったら、どんなに良かったか。

彼なら頑なな梢ちゃんの心を本当の意味で癒すことが出来るかもしれない。

そう思わせるだけの目を彼は持っていた。

「宮下さん、果たし状はどう書き始めるのが正しいのでしょうか？」
「そうね」

夏休みを前にして梢ちゃんと鼓君の関係は全く変化していないらしい。

携帯のアドレスを今まで知らなかったのも驚きだったけど。

梢ちゃんにちよこちよこカマをかけてみても「純粹に友達」の一点張り、梢ちゃんはしょうがないけど鼓君はどうなのかしら？

まあ、いいわ。これからどう転ぶか分からないし遠くから見守っておこうかしらね。

29話 宮下翔子物語10（後書き）

なんだかんだで10話にもなってしまった、宮下翔子物語こと梢ちゃんの過去編。

梢ちゃんの過去にはもうひと山あるのですが、それはまた次の機会に！

宮下さんを沢山書けて幸せだった。初期のキャラ設定とかもう跡形もなく…。宮下さんのしゃべり方も変わってるし…。誤字脱字も増えててビックリ（・口・） 次はやつと鼓が書けるゞ（〃^ ^）ノわあい

30話 なんで俺なの？

夏休みになった。

しかし、俺の朝はあまり変わらない。

ラジオ体操に行く南夏を送り出し、部活に行く修介を叩き起こし、朝飯を食べようとしめない奈々緒を食卓に座らせる。

そんな朝の喧騒を過ぎ、リビングでまったりテレビを眺めている時だった。

今日はバイトも無く、久しぶりの休日を満喫する予定だった。まったく、予定は未定とはよく言ったもんだ。

奈々緒は高校の補習、修介は部活、南夏は友達とプールに行き、父さんは仕事、母さんは主婦友と買い物。

誰の足音も、誰の笑い声もしない家は珍しく新鮮だった。

そんなまったり、のんびりした空間に浸っていた時だ。ソファーに放り出していた俺の携帯が鳴った。

「博樹」と表示されていた。

ちなみに俺は博樹さんの携帯を登録した覚えはない。仲良くアドレス交換した覚えはもつと無い。

でもあの人の事だ、俺が気づかない間にコッソリ携帯を抜き取って、コッソリ戻すくらいするだろう。

浮かんだ疑問を自分の中で消化しつつ、携帯に出た。

「もしもし」

「鼓君、今暇かな？」

なんだこの人？またサークル絡みだろうか。博樹さんが絡むと面倒になる、面倒事しか運んでこない。

「えーと、それなりに暇ですけど」

それが分かっていてバカ正直に答えてしまった俺も俺なんだが。

「それは良かった」

言葉とは裏腹に博樹さんの声は暗い、なんていうか声に芯が無い。こんな博樹さんは初めてだ。

安易に暇なんて言っただ大丈夫だったか俺。頭をよぎる不安は間もなく的中する。

「実は今、梢ちゃんの家に来てるんだ」

「はあ」

「鼓君に言われたように、梢ちゃんとキッチンと向き合ってみようと思っ
て」

「はあ」

「そしたら、梢ちゃん自分の部屋に籠城しちゃったんだよ」

「はあ」

「それで、鼓君から梢ちゃんに出てきてもらうように言ってくれな
いかな」

「はあ!？」

「鼓君の言う事なら梢ちゃん絶対に聞くから」

「なんで俺なんですか…宮下さんがいるでしょう」

「宮下さんは梢ちゃんの子部屋のドアの前で梢ちゃんに話しかけてる
最中だよ」

「…自分で」

「逆効果だと思わない？」

「……………」

博樹さんは俺が最終手段だと言っている。山城といい博樹さんとい
いい、俺に過剰な期待を持ちすぎだと思う。

「…それで、今から山城の家に来てって事ですか」

「そこまで手間をかけるつもりは無いよ」

「じゃあどうやって…」

「鼓君、梢ちゃんの携帯番号知ってるよね」

夏休みに入る前、リベンジに燃える山城とアドレス交換したばかりだ。

「ちょっと、なんで知ってるんですか！」

「宮下さんから聞いた」

…まあ、それは。

山城の事だから宮下さんにリベンジの事を息巻いて話しただろうし話の流れでアドレス交換の事も話しただろう。

そつだ携帯。

「博樹さんが山城の携帯にかければ何も問題無いじゃないですか」
話もできるし、うまくいけば部屋から出てくるかもしれない。

「かけてみたけど、どこで番号を知ったのか着信拒否されてるんだ」
…ぐうの音も出ないとはこの事か。全く変な所で似てるなこの二人は！

「よろしく頼むよ。もし失敗したら苛烈の演劇サークルに売り飛ばすから」

「ちょっと、なんですかその捨て台詞！」

携帯は当然のように切られた。

俺の声が最後まで届いてたかは謎だ。

拒否権無しなのは…まあいい、予測できたし。それよりも苛烈の演劇サークルって何だ？

俺が博樹さんと接するようになって知ったのは博樹さんの顔の広さだ、サークルボランティアという奇怪なサークルのせいでもあると思うが上級生はみんな知ってるんじゃないかと思うくらい顔が広い。

知名度なら山城と良い勝負だろう。

そんな博樹さんだ。演劇サークルに知り合いだっているだろう。

失敗したらもの凄く面倒な事になる。確実に…。

俺は仕方なく、山城の電話番号を表示させた。

俺から電話がかかってきたら山城はどうするだろう。

…間違いなく、出る。

「はあ…」

思わず溜め息が出る。なんで俺なんだ？

30話 なんで俺なの？（後書き）

久々の鼓君登場！ちょっと久しぶり過ぎてしゃべり方分からなくな
ってしまったけど、なんとか書けました。徐々にペースを上げれた
らと思います。

31話 あっ、言うの忘れてた。

山城に電話をかけると2コールで出た。

「もしもし」

「あっ、山城」

山城にかけてるんだから山城なんだけど。

「はい。鼓ももしかしてピンチですか」

今、山城はピンチなのか。いやだから籠城までしてるのか。

「いやな、博樹さんから山城が籠城してて困ってるから説得してくれって頼まれて」

「っ！鼓は木野村の差し金ですか!？」

ん…間違いじゃないか。いや、この事を引きずると長くなるから適当に切り上げよう。

「まあ、そんな所だ。山城どうして籠城してるんだ、いつもみたいに堂々としてればいいじゃないか」

「……木野村にとつて私の家は鬼門なはずなんです。なのに訪ねてくるなんて、木野村が何を考えてるのかわかりません」

博樹さんが何を考えてるかなんて…あっ。

「あっ、言うの忘れてた」

「なにがですか」

「俺、博樹さんに山城が全部知ってるって言ったんだ」

「はい!？いつですか、なんでですか!！」

「えーと、部室の鍵を返しに行った時に…つい、ぼろっと」

「鼓がそんな口の軽い人だったなんて」

「そうだな、俺も意外だ」

「これで、博樹さんがどうして来たのかわかっただろ」

「…私にどうしろっていうんですか。あれはもう終わった事です」

「そう言うなら、どうして博樹さんを毛嫌いしたんだ」

「だって、あの時も木野村は何を考えてるか分かりませんでした。へらへら笑ったりして不気味でした」

そんな風に思ってたのか。確かに警戒心は凄かった。

「木野村は何でもできる行動力を持っています。だから怖いんです。そういえば、苛烈の演劇部ってなんだろ。」

「今でも怖いの？」

「今は怖くないです。鼓がいますから」

なんなんだ俺への信頼は。

「じゃあ、大丈夫じゃん。博樹さんに会いなよ」

「それには、覚悟がまだできてません」

「会ってみれば意外とあっけないもんかもよ。宮下さんだっているんだろ」

「宮下さんは木野村の味方です」

「えっ、そうなの」

「だから鼓…いえ、なんでもありません」

「まあ、なんかあったら話ぐらいは聞けるからさ」

「鼓…私、戦ってきます！」

山城はそう言って電話を切った。

戦うのか…そうか山城にとっては戦いなのか。

電話を切ってから数分もたたない内に俺の携帯が鳴った。相手は山城だ。

「もしもし、山城。どうした？」

「鼓、木野村と宮下さんがホットケーキを食べて和んでいます…！」
なにやってんだあの人達は。

31話 あっ、言うの忘れてた。(後書き)

ほとんどが会話文って初めてかも。そろそろ前みたいなのほのほのに戻っていききたい。

32話、突撃！お宅訪問

「…なんで？」

俺が口にした一言はまずそれだった。

あの山城の籠城騒動から数日もたたない内の事だ。

その日、たまたまバイトが休みになって誰とも遊ぶ予定も無く、まったり過ごそうと漠然と思っていた時、家のチャイムが鳴った。

ちようど一階に居たのが俺で、南夏が珍しくゲームに熱中していたので俺がインターホンを取った。

「はい」

「宅急便です」

「はい、今行きます」

俺はハンコを手にドアを開けた。

「…なんで？」

宅急便だと言われたから俺は間違いなく荷物を抱えたお兄さんが立っているもんだとばかり思っていた。

「なんでって心外だな」

家の玄関前にはアロハシャツを着た博樹さんと白の半袖シャツに赤のリボンを巻いて、お馴染みのロングスカートを履いた山城が立っていた。

俺の「なんで？」には三つの意味が含まれていた。

なんで博樹さんと山城がここにいるのか。

なんで二人が俺の家を知っているのか。二人というか絶対に博樹さんだけ。

あと、なんで二人が一緒にいるのか。

山城が博樹さんと宮下さんがホットケーキを食べてると電話をくれた後、メールで和解したと知らせてきた。

どのように和解したのか知らないが、博樹さんの呼び出しに応じるほど壁は無くなったって事なのか。

博樹さんの斜め後ろに立っていた山城が俺をジロジロと頭からつま先まで見回した。

「鼓：無事なようですね」

どうやら俺をダシに連れ出されたらしい。

「博樹さん、何をしに来たんですか？」

「冷たいなあ。サークルの仲間だろ」

嘘くさい。明日也並に嘘くさい。嘘の質でいったら博樹さんの方が上だけだ。

「鼓、顔に嘘くさいって書いてありますよ。私も同感ですけど」

山城に言われてしまった。これはいけない、博樹さん相手ならもるバレだ。

外に出て数分も経たない内に背中にじつとりと汗をかいてきた。

まだ昼前なのに、玄関は日差しがもろにあたって眩しいし暑い。

「っか暑い。」

「取りあえず、中入って下さい」

俺はドアを大きく開けてクーラーの効いた涼しい家の中に入ろうとした。

「あれ？入れてくれるの」

振り返ると博樹さんが驚いていた。一体何を驚くんだ？このまま玄関で話を済ませるつもりだったんだろうか。

いや、それは俺が無理。夏の日差しを甘く見てたら酷い目に合う。

「当たり前でしょう。こんな所ずっと立ってたら倒れますよ」

「意外と簡単に目的達成できちゃったや」

「へ？」

「突撃！お宅訪問」

博樹さんの後ろから大きなしゃもじが飛び出してきそうな勢いだっ
った。

そんな冗談はさておき、本題はクーラーの良く効いた俺の部屋に
二人を通し俺は台所で麦茶をコップに注いでいた。

「お兄ちゃんの友達？」

顔はテレビに向いたまま南夏が聞いてきた。そんなにそのゲーム
は面白いのか。

「友達とサークルの先輩」

「それはそれは」

「どうしたんだよ」

「お兄ちゃんが友達連れてくるの初めてだから、珍しいなっ」

「連れてきたっつてより、押しかけて来たんだけどな。南夏は友達連
れてきたりしないのか？」

「みんな忙しいみたいだから。塾とか大変だよ、最近の小学生は」
言ってる自分も小学生だろっ」とツツコミたくなる。

「ゲームもほどほどにしとけよ」

「はい」

麦茶の入ったコップをお盆にのせて俺は二階へ上がった。

格ゲーって何時間でもできるゲームだっけ？

33話 俺のプライバシーは皆無ですか！

二階の部屋に入るとローテーブルの前に二人が行儀良く座っていた。

山城は正座で、博樹さんはあぐら。ただ二人の間には妙に距離があるけど……そこは無視しよう。

自分の部屋にこの二人がいるっていうのは不思議で仕方ない。まさか、こんな日が来るとは。

「取りあえず、どうぞ」

二人に麦茶を勧めて、自分も飲む。

勧めた麦茶を一口飲んで、口を開いたのはやっぱり博樹さんだった。

いや、全てはこの人発信だから、説明してもらわないと困るんだけど。

「さて、どうしてわざわざ鼓家に来たのか凄く気になってる感じだね」

「突然訪問された身にもなってください」

「じゃあ、さくつと本題に入ろうか。この三人が揃ったらサークル関係しか無いでしょ」

博樹さんはどこから取り出したのか、薄っぺらい手帳をペラペラとめくり始めた。

俺と山城は博樹さんが部長をつとめる「サークルボランティア部」という、どういう部なのかよく分からないサークルに所属させられている。

「それで、今のところ鼓君の予定は水曜と金曜、あと18日と27日が空いてるから……」

「ちょっと！なんで俺の休み知ってるんですか！！」

今、博樹さんが言ったのは俺のバイトが無い日だ。そんなのバイト仲間くらいしか知らないはず。

「いやー、世間って本当に狭いよね」

博樹さんは爽やかに笑うが全く答えになってない！

そんな俺の心の声が山城に届いたのか、顔に思いっきり出ていたのか山城がぼろつと言った。

「これが木野村の行動力です。本気を出せばこれほどじゃないですよ」

今になって山城があんなにも警戒していた理由がわかる。

しかもコレでも本気じゃないって…本気出したら……ちよつと想像したくないな。

やっぱり俺って浅はかだったのか。今更いっても仕方ないけど。

ああ、俺のプライベート……。

博樹さんは山城の一言には全く触れず、話を進める。

「もちろん、梢ちゃんも予定は空いてるね」

山城は静かに頷く。

「夏にこつそリアルバイトをしようと画策していたんですが、正面から反対されてしまいました」

そりゃあ、本物の箱入り娘だから親御さんも心配だろう。

「宮下さんに」

あの人、本当に何者なんだ？

「あつ、でもサークル活動は鼓と一緒になら大賛成と宮下さんが太鼓判を押してくれましたよ！」

…あの人も俺の事をどう思っているんだか。

一度誤解を解かないといけないような気がしてきた。絶対に俺の人物像が間違えてる。

「それはちよつど良かった。梢ちゃんは鼓君とセットって元々考えてたから好都合だ。」

なんせ梢ちゃんは大人気だからね、えつと野球、サッカー、バス

ケ、剣道とか」

「わっ私、そんなに運動神経良くありませんよ！」

おっと、山城なぜガッツリ参加する方向で考えてるんだ。普通に考えて違うだろ。

「山城、参加する助っ人じゃないから」

「え？」

「そっだよ、梢ちゃんはただ観戦してればいいんだ」

「それでは何もお役立てできませんが？」

「いいんだ。梢ちゃんが試合を見てくれてるだけで野郎どものやる気の度合いが変わるから」

「…そういうものなんですか」

山城の顔にさっぱりわからないと書いてあった。まあ分かってたら下心どうこう言い出さないか。

その男の心理を巧みに突く博樹さんも博樹さんだけだ。

それで俺は山城を連れ出す為の餌か、博樹さん的には。

で、宮下さん的には山城のボディガード。

どこまでも使われるな、俺。

「一応聞くけど、試合の後の打ち上げに参加したりしないよね。二人とも」

「それは駄目ですよ、博樹さん」

俺は当たり前のように言ったのに、意外な方向からパンチが飛んできた。

「どうしてですか？」

えっ、山城がそれを聞くの？

いつもなら「獣の中になんて入れる訳がありません」とか言うくせに。

「スポーツマンの勇士を労うものですよ？」

そうか、山城は大学生男児の飲み会を知らない。

なんでも有りのドンチャン騒ぎ、体育会系の飲み会に参加した事はないがあまり想像したくない。

そこに山城放り込むなんて俺だけではとても守りきれない。

「本来そうあるべきなんだけど、山城は行かない方が身の為だ」

「そうですか、鼓が言うなら行きません」

「打ち上げに関しては鼓君だけでもいいよ。しかも飲み代は向こうのサークルが持つてくれるし」

「なんですか！そのおいしい話」

「それが梢ちゃんを連れて行く報酬だから」

ああ、なるほど。一応ボランティアって名打ってあるし、堂々と報酬をもらう訳にもいかない。

「俺が行つてもいいんですか？」

「もちろん。鼓君と一緒に君目当ての女の子が集まるからね」

それを言うなら博樹さんの方だろ。見た目完璧な好青年、今にも爽やかな風が吹きそうな笑顔持つてるくせに。

「駄目です！鼓、行つてはいけません！！」

「えっ？」

「木野村の食いものにされます！！」

山城は博樹さんの何を知ってるのか一度じっくり聞いてみたい。

山城の目は真剣そのもの。山城が冗談なんて言ったことないけど、それに博樹さんも山城の言葉を一言も否定せずニコニコと笑っている。

「えっと、じゃあ山城の忠告に従います」

「そっか、報酬は俺だけありがたく頂いとくよ」

…ああ、夕夕酒。

33話 俺のプライバシーは皆無ですか！（後書き）

これから夏休みの話を書こうとしてるけど、夏終わるし……。大学生の夏休みは長いさ！

34話 閑話、この二人が会話したら（前書き）

すみません。

完全なる興味本位で書きました。

この二人が会う事は無いだろうな～と思ったら書きたくなくなってしまう。

34話 閑話、この二人が会話したら

俺は今、鼓家にいる。勝手に押しかけてサークルの話をしに来て、部屋に上がり込んだ。

目的は果たしたのでもう帰ってもいいけど、あの二人を部屋に二人つきりにしてみたくて

「あつ、ちよつとトイレ貸して」

とごく自然に部屋から出てきた。

一応トイレには行き、トイレっていつでも時間に限界あるよなと思いつながらドアを開けた。

すると予想外な人物がドアの前に立っていた。

俺はその人を紙の上で知っている。

鼓秀平の妹、鼓南夏。現在、小学6年生。好物はコロツケ。

彼女の眼差しは鼓君によく似ていた。

「ごめん、トイレ？」

彼女は首を小さく横に振った。そしてよく似た真つ直ぐな目で俺を見上げる。

「お兄さんがサークルの先輩さん？」

「そうだよ」

「ねえ、ゲームできる人？」

その誘いはどうやって不自然じゃなく時間を潰せるか思案していた俺にとって魅力的なものだ。

「できるよ」と答えると俺はリビングに通された。

そこにはテレビにつながれたスーパーフアミコン。画面に映って

る映像は「ストリートファイター？」だった。

「また、レトロな物やってるね」

最近のゲームはあまり詳しくないが、今の小学生がコレをやっているのも珍しい。

「名作に時代の流れは関係ないって同志の八ナさんが言ってたよ。先輩さん、対決しない？」

そう言ってコントローラーを差し出されたので俺は受け取った。「いいよ。それで、何を賭けるの？」

「え？」

彼女はキョトンとした表情で俺を見上げた。

そうだった。彼女は俺が紙上で何を知ってるか知らないんだった。「ゲームで戦うなら対戦って言うと思って。でも対決なら何か俺から欲しいモノがあると思って、違う？」

俺がそう告げると彼女は顔から幼さを消した。

「違います。私、頭の良い人好きです」

口から出る言葉も幼さや遠慮が一切なくなった。

幼い容姿に使い分けられる表情。昔の俺もこんな感じだったのか…と幼かった昔を懐かしんでみる。

「俺も話の分かる人が好きだよ。それで何が欲しいの？」

「私が勝ったらお兄ちゃんの友達の事を教えて下さい」

鼓君の友達、つまり梢ちゃんの事か。こっちにもなかなか厳しい審判がいるんだな。

「俺が勝ったら？」

「お兄ちゃんの事を教えます」

「のった！」

「博樹さん、なにやってるんですか」

後ろから鼓君に声をかけられたが、振り向く余裕が全く無い。くっ、波動拳相殺し過ぎ。

俺と彼女は3本勝負でゲームを始めた。

30分くらい時間を潰せれば俺としては上々だと思っていた。

しかしだ、現状は1勝1負5引き分け。ゲームをやり始めて1時間経とうとしていた。

きた！今だ！！

渾身の必殺コンボを繰り出す。

「…勝った！」

「木野村、大人げないです」

「博樹さん、小学生相手に…」

後ろから二人の冷ややかな視線が背中に突き刺さる。

「いや…、あのこれは……」

凄く弁明したいが、小学生相手に本気を出したのも事実。

それにこの二人は隣にいる小学生が成績優秀でよく頭のまわる人だと知らない。

あと、悲しい事に俺への信頼は底辺だ。大体の事を曖昧にしてきた俺が悪いんだけどさ。

「先輩さんは悪くない！」

幼さをまとった彼女が二人に向き合う。

「勝負は真剣にやらないと駄目だってお父さん言ってたじゃん！だから先輩さんは悪くないもん」

うつすら涙を浮かべた彼女に鼓君がおろおろし始めた。

「わかった、南夏！わかったから」

鼓君は彼女の頭を撫でて落ちつかせようとしていた。

普通に見ると仲の良い兄妹。俺にそう見えない事がとても残念だ。何も知らないことが幸福だなんて、現実で見たくなかったかな。あと、何歳でも女って怖い。

それから、俺と梢ちゃんは鼓家をあとにした。

しぶしぶ梢ちゃんは俺に送られることを了承した。なぜって、今日は珍しく辞書も警棒も忘れてしまったから。

「梢ちゃん、鼓君と二人で何を話してたの？」

「あなたに報告する義務はありません」

ああ、全く。俺は顔がにやけるのを必死に押さえた。

俺は鼓君に感謝しなきゃいけない。

もしあのまま梢ちゃんから逃げていたら梢ちゃんは今、俺に送られる事を了承しなかっただろうし、

俺を完全に無視してただ帰ることに意識を向けていただろう。

鼓君の前では俺を無視しなかった。だから、二人が一緒の時を狙って話しかけていた。

それがどういう事か梢ちゃんは分かかってないんだろうな。

「義務じゃないけど、俺はおしゃべりだからついつつかり誰かに梢ちゃんが鼓君の家に行ったこと言っちゃうかも」

「なっ！それはサギです！！」

素直で可愛い反応するから、ついからかいたくなっちゃうんだよな。

それから二人が大学生の男女か！って疑いたくなるくらいほのぼ

のな会話をしていた話を聞き、梢ちゃんを無事家まで送り届けた。

俺のケータイに鼓君から電話がかかってきたのはその日の夜だった。

「もしもし、鼓君？」

「鼓ですが、兄じゃありません」

声だけ聞くと完全に大人の女の人だった。

「南夏ちゃん。どうしてお兄さんのケータイを？」

「先輩さんにゲームのコツを教えて欲しいからと、貸してもらいました」

鼓君、妹に騙されてるよ。

「兄についてなんでも話します。何が聞きたいか教えてください」

「いいの？そんな律儀に約束守らなくてもいいんだよ」

「私は初めてゲームで人に負けました。真剣勝負で勝った相手に敬意を示すのが私の流儀です」

「そう、それじゃあお言葉に甘えて…お兄ちゃんの高校時代の恋愛の話を聞かせてくれないか？」

「わかりました」

全く、鼓家の人は面白い人ばかりだな。

34話 閑話、この二人が会話したら（後書き）

えっと、博樹さんに強力な情報提供者が付きました。

急ぎよ決まった南夏のキャラ設定。ふらふらっと思っていたら「ハナさんとナツ」って別ネタも出てきたりして…。

次こそちゃんとした夏休みを書きますので。

35話 傍から見ると…。

「傍から見ると三角関係みたいだ」

開口一番博樹さんはそう言って、山城にヒールのある靴の踵でつま先を踏まれた。

俺たちは駅で待ち合わせをしていた。

一番最初に俺が来て、山城が現れて、博樹さんがやって来た。それで駅にそろったが、言われた通り傍から見れば一人の女の子を取り合う男二人にしか見えない。

「どうでも良いこと言っていないで、早く行きますよ」

どうでもいいで片付けてしまう所が山城らしい。

そう、俺たちは山城を取り合ってる訳じゃない。今日はサークル活動の為に集まったのだから。

今日は大学野球部の練習試合の応援に行く。

なんでも因縁の相手で、どうしても勝ちたいらしくコーチ直々にオファーがあったらしい。

「しつかりした大人に土下座までされたら断れなくてさ」

そんな事実を知らされて、サボるとかそんな考え吹っ飛んだ。

俺たちは駅のホームで電車を待っていた。

こんなにも人の視線にさらされるモノなのかと実感していた。もちろん俺じゃない、山城だ。

今日の山城はいつものロングスカート姿じゃない。ついでに三つ編みでもない。

白のワンピース（ひざ丈）に淡い水色のシャツを羽織り、髪はおろしてゆるく巻いている。足元は白いヒールのある靴だ。

もう完全に、避暑地に居そうな清楚系お嬢様そのもの。

しかも山城は立ってるだけならナンパされる確率100%の女の子。

その横には黙ってれば爽やか青年の博樹さん。

加えて今日は水色のポロシャツを着て清潔感があるように見える。そんな現実離れた人達が駅のホームに立ってたら誰だっで見ろさ。

山城はあからさまに大げさな溜め息を博樹さんに向かってついた。

「やはり、木野村に渡された服なんて着てくるべきではありませんでした」

「それ山城の服じゃないの」

「はい。今日の朝、木野村からだと言下さんに渡されました」

博樹さんから渡された服を素直に着るのか…。

やっぱり山城は根っこの部分では博樹さんの事を嫌ってない。

「コレを着ないと鼓が今日来られなくなると脅されたので」

また、それか。

「…あの博樹さん、今更ですけど俺をダシに山城を使うのやめてくれませんか」

博樹さんは、まるで「おもしろいでしょう」と言うように笑って言った。

「その服では非って頭下げられたら、期待に応えないといけないですよ」

…大人の土下座の意味が分からなくなってきた。

博樹さんは改めて山城の格好を上から下まで眺めた。

「しかし、梢ちゃんはいつも通り三つ編みで来ると思ってたけど。そんな期待通りの髪型で来てくれるとは」

「この髪は宮下さんがおもしろがってやったんです！ワックスまでつけられて…もう手出しできませんでした」

「さすが、宮下さん。空気読める人だね」

「なぜ、私がこんなにも人の視線にさらされないといけないんですか。何もかも木野村のせいですっ」

「ん〜そうだな。四分の一は野球部のコーチのせいで、五分の一くらいは宮下さんのせいで、残り全部は梢ちゃんのせいでしょ」

「なんで私のせいなんですか！木野村の責任が一ミリも入ってないじゃないですか！！」

「当たり前でしょ、俺に責任なんて無いんだから」
「そんな訳ないでしょ！！」

ああ、本当。なんで俺はここに来たんだろう。

この二人を傍から見ると美男美女カップル。

近くで会話を聞いていても、じゃれあっているバカップル。

…博樹さんに何を言われてもサボればよかった。

「鼓」

「えっ」

山城の聲が急に自分に向けられて驚いた。

「電車が来ましたよ」

山城の言った通り、電車はドアを開けて待っていた。

博樹さんは電車に乗ろうとしている。そう、普通はそうするのが当たり前。

でも山城は俺と同じく一歩も動いていない。

…やっぱりサボれないか。

俺が電車に乗ると後を追うように山城が電車に乗った。

35話 傍から見ると…。(後書き)

続きますん(人 >、;))

36話 挨拶ひとつ

沢山の注目（山城と博樹さん）を浴びながら、俺たちは練習試合が行われるグラウンドに無事到着した。

練習試合と軽く思っていたがグラウンドにはそれなりに人が集まっていた。

「博樹さん、今日って練習試合なんですよね」

「そうだよ。まあこの試合は恒例行事みたいなもんで、賭けも盛り上げるらしいよ」

ちらほらと「因縁の対決」とか煽り文句が書かれた垂れ幕やらチラシが貼られてる。

ちよつとしたお祭り状態。文化祭の雰囲気似てる。

夏休み中のイベントの一つってことか。

視線に慣れたのか、気にしなくなったのか、どうでもよくなったのか、

山城はあからさまにジロジロ見られても何も言わなくなった。

ここからなら野球部員から山城の姿が見えるだろうという場所を見つけ座ろつとした時、

「それじゃあ、俺は野球部に挨拶してくるから」

と博樹さんが言った。

「私も挨拶に行きます」

山城の中では礼儀として当たり前。だから何の迷いもなかった。少々面食らったのは博樹さんの方。

けれど山城の真っ直ぐさを知っている博樹さんはすぐに納得したように頷いた。

「うん、そうだね。コーチも梢ちゃんの姿見たら泣いて喜ぶだろう

し。野球部にもいいかもしれない」

コーチは知らないが、確かに野球部の人達のテンションは格段に上がるだろう。

「それじゃあ、俺はここで待ってるんで」

そう言っただけは座った。

「えっ鼓、行かないんですか？」

「…行かないけど」

普通に考えて行かないだろう。

博樹さんは部長（？）として山城を連れてきた事を報告に行くべきだし、そこに山城を連れて行くなら尚良いだろう。

でも、俺が行く理由はどこにもない。

自ら進んで野球部に睨まれる気もさらさら無い。

なのに、どうして俺と一緒に行くと思いきや、こんでいたんだ山城。俺にもそれが分かるくらい、山城は意外そうな顔をしていた。

「…どうしてですか？」

「どうしてって…」

助けてくれないかと思っただけで博樹さんを見てみたが、まるで成長を見守る親のように微笑んでいる。

なんで助けてくれないんですか博樹さん！

「…っほら、誰かが場所取っておかないとダメだよ」

大混雑って訳じゃないけど、人はそれなりに周りにいた。

「じゃあ、私も待ちます」

「場所取りなんて俺一人で十分だから」

「なら、私が待ってるので鼓が私の代わりに行ってきて下さい」

「それは根本から違うから」

「なら、木野村一人で挨拶に行ってもらいましょう」

だからなんでそうなるんだ山城！

そこでようやく博樹さんが見守るのをやめて、一步山城に近づいた。

「ねえ梢ちゃん、俺一人で行ってもいいけど。なんで一緒に挨拶に行こうと思ったの？」

「試合に招いてもらったのでそのお礼と激励をしようと思ったからです」

「じゃあ、それを俺一人に任せるのは無責任じゃない？」

「だから鼓も一緒に！」

「鼓君は場所取りするって言ってる。場所取りも必要だと思わない？」

「……っ、必要だと思います」

「それじゃあ行こうか、梢ちゃん」

山城押し黙った。何も言えなかったと言った方が正しいかもしれない。

山城は渋々な態度を隠しもせず、博樹さんと人一人分離れて歩き出した。

30分くらいだろうか。当たり前だが二人は一緒に戻ってきた。

俺はちよつと驚いた。

二人の間に開いていたはず人一人分の距離はその半分に縮まっていたから。

俺からはすぐに（目立つから）二人を見つげられたが、二人は俺を明らかに見つげられずにいた。

たった30分だったけれど周りはあつという間に席は人で埋まっていたからだ。

口から出任せとはいえ、場所取りをされていて本当に良かった。

手を振って場所を知らせると山城が小走りで駆け寄ってきた。

いつもなら真っ直ぐ走って来るのにと思ったが、今日はヒールを履いていたのを思い出した。

山城は俺の隣に座るやいなや俺に訴えた。

「鼓のせいです！」

「えっ、なにが」

「鼓と一緒に来れば私はあんな目に合わずに済んだんです！」

そう言えば、前は逆の事を言われたな。俺がいれば問題ないとかそんなこと。

いや、今はそんなことじゃなくて。

「山城、何があつたんだ？」

「なんで私が崇められるのですか！」

「はあ!？」

「大人の人に初めて土下座されました!!」

コーチ!!

のんびりとやって来た博樹さんは山城の隣に座る。

「やっぱり鼓君が来るって広めたら女子が結構来てるねえ」

どうでもいい事を言っただけに微笑んだ。

この人、俺に教えるつもりないな。

目の前には落ち着きを取り戻さない山城。

俺は山城の言葉を理解できるか？

37話 何があったか教えましょう (前書き)

鼓に代わって何があったか教えます。
ただし、梢ちゃん視点。

37話 何があったか教えましょう

私は木野村から距離をとって、けれど目的の場所は同じなので並んで歩いていました。

私は不機嫌さを顔から消し去る努力を全くせず、しかし足だけは速く動かしました。

けれど、慣れないヒールのせいで木野村と速度はあまり変わりません。

私が今、凄く不愉快なことを木野村は分かっているでしょう。なのにこの人は笑顔を絶やさずに私に話しかけてきました。

「ねえ、梢ちゃん。もう少しゆっくり歩かない？」

「嫌です」

「ヒール履き慣れてないんですよ」

「木野村には関係ありません」

「梢ちゃんが靴ズレして帰ってきたら鼓君は心配すると思うよ」

私は思わず立ち止まりました。木野村はやはりまだ微笑んだままです。

「鼓君の居る前じゃ言わなかったけど、俺と二人になるのが嫌だったんですよ」

この人は私という人間を知っている。

「それがわかっていているなら、私に場所取りを任せれば良かったんです」

「なんでそんなに嫌がるの？」

「……」

「分からないんだよ、流石の俺でも。」

鼓君の家から帰る時は送らせてくれたのに、なんで今日に限ってそこまで嫌がるの？」

今日に限って…。

鼓の家に行った時は私はただ微かに違和感を覚えただけ。

でも今日はすごく違和感がある。

そう変わったとするなら、きっと木野村が私に謝りに来た日。

「あなたは誰ですか？」

私には目の前にいる男の人が一体だれなのかも分からない。

今の木野村は私が知っている人じゃない。

「私は木野村の事が全く分からなくなりました。

過去の事は許します。ケジメはキチンとつけました。

けどそんなに簡単に人は変わるものですか？」

「何が言いたいのかな」

木野村はいつものように微笑んでいる。でも違う。

「今の木野村は昔の木野村のようです」

私が絶対的な信頼をし、狭い世界の中で生きていた頃の彼のよう。

例えば、私を連れ出すのだって以前なら鼓を人質にして無理矢理連れ出したのに。

今日は私が納得させて、自分の足で来るようにし向けた。

「そっか。そうだね。俺、梢ちゃんの観察力なめてた。梢ちゃんは

俺が怖いんだ」

「得体が知れないので恐ろしいです」

「じゃあちよつと前、梢ちゃんが警戒しまくってた頃は？」

「何を考えてるか分かりませんでした。」

へらへら笑ったりして昔の木野村からは考えられなくて不気味でした」

「あゝ、なるほどね」

木野村は苦笑しつつも、話すのをやめなかった。

「シンプルに答えると、人はそう簡単に変われないよ。」

ただこの間までの俺は色々と策を練って挑んでたからね。

それをやめたから昔の俺みたいに思えたんだと思うよ。」

言われてみれば、この洋服も木野村が用意した訳ではありません。以前は必要以上に線が張られていたように思えたのに、今日はそれも無かった。

あまりに視線に晒されてそれどころではありませんでしたけど。

「梢ちゃんも昔とは変わっただろう」

「はい、いつまでも子供でいる訳にはいきませんので」

「俺の変化もそれと一緒に。」

俺自身は梢ちゃんにケジメをつけたからって激変できるほど神経

図太くないからさ」

「そうですね。今の木野村は昔の木野村の延長なのですね」

「そうだよ。色々あったけど」

それなら分かります。色々あって人は変わりますから。

不思議と先ほどまでであった違和感と恐ろしさはどこにも無くなっていた。

「行こうか。挨拶する暇が無くなる」
「そうでした。お礼を言わなくては」

私たちは再び並んで歩き始めました。

木野村は私に合わせてゆっくり歩き出しました。
けれど、顔はいつもと同じ微笑んだまま。

今なら分かるような気がします。

それが今の木野村の姿なんだと。

37話 何があったか教えましょう (後書き)

距離の縮まった理由です。

コーチの土下座っぷりとか野球部の異常なハイテンションは皆さんのご想像におまかせします。

38話 女神の力

試合が始まる前からうちの野球部のテンションは…もう、なんかやばかった。

「お前らあ！！今日は何がなんでも勝つぞ！！」

「「おー！！！！」」

「スマートに、尚かつ紳士的に圧勝するぞ！！」

「「おー！！！！」」

「我々には女神がついている！！」

「「「おおー！！！！！！！！！！」」」

ちなみにコレは円陣を組んで気合いを入れる前、各々ベンチで準備している段階だ。

あのハイテンションを作り出したのが隣にいる山城だと思つと凄く不思議だ。

異常なやる気と熱気につつまれて練習試合は始まった。

始めは異常な熱気に相手側は吞まれていたが、元々の実力は五分五分。

お互い攻めるものの、なかなか得点にはつながらない。

俺はこんなもんなんだろうと思つてたが、どうやら違つらしい。

俺たちの後ろに座っておじさん。多分、野球部のOBだと思つ人達の話し声がそう教えてくれた。

「おい、かなり調子いいじゃねーか」

「今回相手側って期待の新人入れてきたって話じゃなかったのか」
「毎度ながら打たれるには打たれるけど、よく守ってるよな」
「だけど、こっちは全然打てねーだろ」
「いや、でも試合はこっからだ」

試合自体はなかなか面白かった。攻める、守る、守る。好プレーもあつた。

だけど得点表に0が次々と書かれていく。

普通に試合を観戦していた山城に博樹さんが声をかけた。

「梢ちゃん、打者に向かつて手を振ってみて」

「えっ、気づくでしょうか？」

「できるなら満面の笑みで」

「なぜですっ！」

「ほら、頑張れって意味で」

「私は十分頑張っただけだと思っただけです」

「それが伝わってこそその応援でしょう」

今日の博樹さんはやけに正しいなあ。なんてぼんやりと思つたら矛先が俺に向いた。

「ねえ、鼓君」

「えっ、はい。そうですね」

なぜか山城が俺を睨んでる。…そんなに悪い事を言っただろうか？

「わかりました。気づかれなくても私のせいではありませんからね
！」

気づかないはずがない。

さっきから打者はチラチラと山城を見ている。

だってわざわざ向こうから見えるだろうと思つ場所に座つたんだから。

今、山城を目が合う。

打者の顔が…山城と目が合うだけで明るくなる。

山城が微笑む、そして手を振る。

打者の顔にやる気と覚悟が浮かんだ。

カキーン！！

「「おおっ！！」

「ホームラン！！」

山城が応援し始めると魔法にかかったように今まで全く打てなかった部員達がホームランを連発していった。

ここからかなり一方的な試合展開となり、うちの野球部は圧勝。

この練習試合は何十年とホームラン伝説として語られる。

あの試合には確かに（女）神が居たと。

そんなことになるなんて俺たちが知るはずもなく

「梢ちゃん、次ぎからも崇められちゃうね」

「なぜです。私は何もしてませんよ」

「でも神様って何もしないでしょ」

「「？」

「今度から勝利の女神が来ますって触れ込んでおこうかな」

「嘘はいけません!!」

「さて、もう一仕事あるから付いてきて」
帰る気まんまんだった俺に博樹さんはそう言って立ち上がった。
仕事と言われては山城も行かない訳ない。

博樹さんに連れて来られたのはグラウンドの裏側だった。
そこには丁度、人がいた。

「コーチ！」

呼ばれて振り向いたのは小柄で恰幅のいいおじさん。

あれが、土下座をしたコーチ。

「木野村君、今日は本当にありがとう」

「これぐらいお安いご用ですよ」

「山城さんも。今日は山城さんのお陰で勝てたようなもんだから」

「いえ、私は何もしていません」

「あなたのお陰ですよ。期待されるといいう事はとても大事なことです」

思ってたよりコーチは良い人できちんとした大人だった。

「だから、ありがとう」

きつちりと腰から倒したお辞儀を俺は初めて見たかもしれぬ。

「あのっ、土下座はしないで下さい!!」

「はい、困らせるつもりは無かったですけど。もうしませんから」

「それじゃあ、片付けがあるので」

「俺も手伝います」

これが一仕事なのか。そう納得しかけた。

「じゃあ私も」

「鼓君、梢ちゃんを送って行って」

「えっ」

「その白いワンピースで片付けできないでしょ」
「確かに。」

「…わかりました」

「ちよつと待って。梢ちゃんもう一仕事」

「おい、お前ら！山城様が来てるぞ！！」

「コーチの大きな一言に野球部員がバタバタとあつという間に山城の前に現れる。」

「お前ら崇める！勝利の女神様だぞ！！」

「はは〜」

「かろうじて土下座はしてないが、部員たちは限りなく頭を低くしてる。」

「なっなぜです！鼓がいるのに」

山城、俺だって何でも対応できる訳じゃないから。

38話 女神の力(後書き)

野球の試合観戦終わりです。

39話 「ねは、もしかして…」（前書き）

まさかの宮下さん視点です。

39話 これは、もしかして…

今日、梢ちゃんは例のサークルボランティア部の活動でサッカーを三人で見に行くらしい。

夏休みなんだからもつと遊びに行けばいいのに、最近出かけるといったらこればかり。

「鼓君誘って遊ばないの？」

と聞いても

「鼓は”バイト”で忙しいんです」

やけに”バイト”を強調されて恨めしい目で見られた。

バイトに反対したのは私だけど、「バイト禁止」を言い出したのは梢ちゃんの両親（特に父親）なのに。

やっぱり「梢ちゃんが可愛すぎるからバイトはダメ！」なんて言っても納得できないか。

そんな遊びっ気の無い梢ちゃんが今日、服を選ぶのに1時間もかかってる。

これは、もしかして…

デートってやつじゃないの？

「宮下さん」

部屋から飛び出してきた梢ちゃんが私の前でくるりと一回転する。白のシフォンの半袖シャツに膝小僧が少し隠れるくらいの丈の水玉柄のスカート。

両方とも私が買ってきて今までクローゼットの奥にしまわれていた服。

確かあのスカートは「この丈じゃ、警棒が見えてしまいます！」って言って断固着ないと宣言していたスカート。

つまり、今日は警棒を持って行かないってこと！
しかも髪型は三つ編みじゃなくて、高く結ばれたポニーテール。

なんていう変化。これが恋の力ってやつね

「この格好、活発少女に見えますか？」

梢ちゃんの言う活発少女がどんなイメージかわからないけど。

首をかしげて聞く姿は、かなりというかド直球に可愛い。可愛すぎるでしょ…！

「超かわいい やっぱリポニーテールにはシユシユ？それともリボン？毛先もちよっと巻いたら…」

「宮下さん…！」

ちよつとはしゃいだだけなのに、梢ちゃんはすぐに私を睨んだ。

やっぱり、この間のゆるふわ巻きはやりすぎだったかしら。

けど、あの服と髪型がぴったり似合う梢ちゃんがいけないんだわ。
…素材の良さよね、絶対。

梢ちゃんは結局スカートと合わせて水玉柄のシユシユを付けて出かけていった。

さてと、私はせっせと出かける準備をした。

デートの相手はもちろん鼓君だとして、ことと次第によっては「

両親に報告しないといけないし…。

色々と言いつきを考えながら、身体を動かす。不思議と胸が躍る。ふふっ、こういう探偵ばいの久しぶりだけど大丈夫よね。

梢ちゃんが家を出てから5分。

私は梢ちゃんを尾行するために家を出た。

駅では鼓君が梢ちゃんを待っていた。

「待ちましたか？」「いや、今きたところ」「なんて言ってるに違いない。」

うんうん、こうして見るとお似合いだわ。

木の影から微笑ましく眺めていると二人に近づいてくる男がいた。

あの口元はこう言っている「いや、悪いね」

博樹君が合流して3人が動きだした。

…3人ってことはサークル活動ってこと。でも私はどうにも腑に落ちなかった。

どうして梢ちゃんは1時間も悩んで服を選んだの？

私はそのまま尾行を続けた。

尾行して辿り着いた先はサッカーグラウンド。

時々不安になる。梢ちゃんは正直すぎる、良くも悪くも。

このまま普通に観戦して帰るのか…と思っていたら。

鼓君を残して梢ちゃんと博樹君二人連れだつてどこかへ行ってしまった。

…これは、どういう事？

気になる、すごく気になる。だったら二人を尾行すればいいんだけど…。

ひとり残された、鼓君。

…こっちもすごく気になる。

「こんにちは」

「つ宮下さん!？」

私は鼓君の隣りに座った。

どうして梢ちゃんを尾行しなかったか。

それは鼓君なら私がここに来た事を梢ちゃんに絶対に話さないって確信できたのと

彼に直接、追求してみたい事があったから。

「なんでここにいますか!？」

「ちょっと梢ちゃんを尾行してて、だから私がここに来たこと梢ちゃんに話さないでね」

「…はあ」

鼓君はぼかんとしていた。うん、多分私の話が作り話とでも思ってるんだろう。

尾行できるお手伝いさんなんてなかなか居ないからね。

嘘ならそう思ってくれた方が都合も良い。

「二人はどこに行ったの？」

「ああ、今日招いてくれたチームに挨拶しに行っただんです」

「二人で?」

「はい、博樹さんは部長として。山城は激励の意味を込めて顔を出しに行くんです」

なんで梢ちゃんがサークルに引っ張りだこなのか。その理由は聞かなくても分かる。

しっかりというか、ちゃっかりしてるな博樹君。

「でもサークルの為とはいえ、梢ちゃんが頑張って可愛くするのはなんで？」

「1時間もかけて服を選んだのよ!!」

「それは、この間渡された服であまりにも注目を集めすぎたんで、次からは自分で服を選ぶって山城が言ったんです」

「…もしかしてリクエストとかって」

「オーダーは元気な女の子でしたけど」

それで活発少女。梢ちゃんの中では元気な女の子イコール活発少女なんだ。

間違ってるけど…なんか間違ってる気がするわ梢ちゃん。

私の中で引つかかっていたものが全部なくなった。つまり全部私の誤解。

なーんだ、期待してたのに。

ちらりと隣に座る男の子を見る。

梢ちゃんはトコトン恋に疎い子だから、今までの行動は理解できるし納得できる。

けど、彼はどうだろう。

本当に彼にとって梢ちゃんはただの友達なんだろうか。

あの、可愛い梢ちゃんをただの友達として見られるだろうか。

聞きたくなる。追求したくなる。問いただしたくなる。

「鼓君は梢ちゃんのことどう思ってるの？」

鼓君は私相手にも「友達」と言うだろうか？

39話 「ねは、もしかして…」（後書き）

ナイス、宮下さん

40話 鼓秀平の迎撃（前書き）

鼓視点です。

鼓君、迎え撃ちます。勝てるかどうかは別にして。

40話 鼓秀平の迎撃

今回はすんなりと俺は場所取り、二人は挨拶に行き少しばかりホツとしていた時だった。

不意打ち…というか、一体誰が予想できるだろう。

俺の隣に平然と座る女性。

「こんにちは」

「っ宮下さん!?!」

山城の家のお手伝いさんの宮下さんが突然、俺の前に現れた。

「なんでここにいますか!?!」

「ちょっと梢ちゃんを尾行してて、だから私がここに来たこと梢ちゃんに話さないでね」

にっこりと笑う宮下さん。

「…はあ」

宮下さんが偶然俺を見つけたのか、本当に山城を尾行してここに来たのか。

深く考えたところで何か答えが出る訳じゃない。

ただこの状況、………もしかして、俺ピンチ?

突然現れた宮下さんは色々質問をして、俺が全部に答えると妙に納得した。

宮下さんは、「このまま」「じゃあね」と言って立ち去っていくよう

な気もした。

その気は俺の期待と樂觀視だとこの後すぐにわかる。

宮下さんは何の脈絡もなく俺に言った。

「鼓君は梢ちゃんのことどう思ってるの？」

とっさに「はあ？」と言わなかった俺を誰か褒めてくれ。

「あの、どうしたんですか？宮下さん」

「言葉の通りよ。私は鼓君が梢ちゃんのことをどう思ってるか知りたいの」

引くつもりは無い。そう言われてるみたいにキツパリと言い切る宮下さん。

宮下さんは自分の為と言い切る。なんだか人の為ならと嘘を許す山城に似ている気がする。

だからだろうか、それまで平然とやってきた「誤魔化す」「逃げる」「はぐらかす」このどれもがこの時出来なかった。

「山城は友達ですよ」

嘘は言っていない。前に山城からも友達宣言されている。

そう、俺と山城は友達。宮下さんが期待してるような関係では全くない。

「本当に友達としか思っていないの？」

「宮下さんに嘘言ってるんですか」

俺がそう言っても宮下さんは引き下がらなかった。

「あなた達はもう子供じゃないのよ？」

隣に座る女性はハツとするほど大人の人だった。

” 梢ちゃんと一緒にいて、どうして恋に落ちない”

宮下さんの言葉と目が真っ直ぐにそう俺に訊いている。

「男と女が一緒にいる形がどうして”恋”じゃないといけないんですか？」

これは言い訳でもなんでも無い。俺は純粋にそう思っていた。なぜ友達ではいけないんだと。

ただ、それだけでは宮下さんは引き下がらなかったし納得もしていなかった。

「次ぎの質問が俺を襲う。」

「ねあ、鼓君。今梢ちゃんの隣にいるのはあなたじゃないのよ」

そう今、山城の隣にいるのは博樹さんだ。

遠くからでも分かるほど目立つ美少女と好青年の組み合わせ。今もさぞ周りの視線を集めてるだろう。

だってあの二人は並んでいるだけでも溜め息が出るくらいお似合

いだ。

「それって、ちょっと嫌じゃない？」

山城の隣にいるのが明日也だったら、嫌どころじゃない。想像しただけで無性に腹立たしくなってきた。

けど、博樹さんは……博樹さんと山城の間には誰も入れないんじゃないかと思う時がある。

昔の事とかそんなもの関係なく、そう思うときがある。

「…えっと、その…あんまり嫌ではありません…けど」

宮下さんは残念そうに、そして見せつけるように大げさに溜め息をついた。

「私は…鼓君はもつと梢ちゃんのこと好きだと思ってた」

そんな裏切られたみたいな顔をしないで下さい。

「…すみません」

「本当に”友達”なのね」

「はい」

「まあいいわ。どうせ時間の問題だし」

「えっ？」

「梢ちゃんに惚れない男がいる訳ないでしょう」

宮下さんは晴れやかな笑顔で言い切った。

山城に下心のない人だと言われた事は黙っておこう。

その後、宮下さんは山城達が戻ってくるのを敏感に察知し

「私がここに来たこと梢ちゃんには絶対に喋らないでね！」

と俺に口止めしてから逃げるように去って行った。

さっきまで宮下さんが座っていた場所に当たり前のように山城が座る。

「鼓、どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

話すはずがない。

宮下さんと何の話をしていたか追求されると思つて話すはずがない。

もつすぐ試合が始まる。

40話 鼓秀平の迎撃（後書き）

うわぁ、まだ試合はじまってなかった。

多分、試合の描写無しで終わる可能性高い…。

41話 宮下翔子の進撃(前書き)

宮下さん突き進みます。いけいけ

41話 宮下翔子の進撃

鼓君と別れた後、そのまま3人の様子を遠くから見守っていたけど特になにもなく

そのまま1時間過ごしてから私は家に帰り、いつも通り仕事をこなし、いつも通り帰ってきた梢ちゃんを出迎えた。

「今日の試合はどうだったの？」

「凄かったですよ。なんとというかボールへの執念と言いますか…とにかく皆さん凄い気迫でした」

梢ちゃん効果絶大。

そりゃあ、こんな美少女が応援に来てくれたらテンションだって上がるし、

かっこいい所見て欲しいって思う。

絶対思う。

「じゃあ勝ったんだ」

「はい、負け続きと聞いていたんですが。そんな風にはとても見えませんでした」

嬉々として試合の様子を梢ちゃんは話してくれた。

梢ちゃんは私が尾行してた事に全く気がついてないみたい。私の腕もたいしたモノね。

「楽しかった？」

「はい、とても」

無邪気に笑う梢ちゃん、その姿をここ最近よく見る。

その変化に気づいてるのは私だけ？

「それは、鼓君が一緒だったから」

梢ちゃんの目がまん丸くなる。急にどうしたの?????そんな顔をしてる。

そうね、梢ちゃんにとっては急かもね。

「紅茶でも飲みながらゆっくり話そうか、梢ちゃん
そう言って私は微笑みながらキッチンに向かった。

「…宮下さん？」

梢ちゃんの戸惑いがアリアリと伝わる。

そう私が真剣に梢ちゃんと向き合うのは、きっとあの時以来。
梢ちゃんは私が高んて向き合おうとするのか分からない。
分からないから、私が向き合っただけ。

「紅茶は何かいい？やっぱりアップルティーかしら」

そう聞いても、返事がなかった。

キッチンからリビングを覗くと梢ちゃんがオロオロと歩き回って
いた。

…そんなに動揺しなくても。

「梢ちゃん、取りあえず着替えてきたら？」

「あつ、はい。そうします」

結局、紅茶はアールグレイのアイスティーにした。

夏まつさかりに熱い紅茶を飲む気にはなれない。

ダイニングテーブルにアイスティーをなみなみ注いだグラスを二
つ置く。

そして私と梢ちゃんは向かい合うように座った。

私の顔をまともに見られない梢ちゃんを気の毒に思い、私は早々

に本題を切り出した。

「梢ちゃん」

「はい」

「梢ちゃんは鼓君のことどう思ってるの？」

鼓君と同じ質問を聞いた。

今までと同じような事は聞いてきた。軽くだったり、冗談のようにだったり。

その度に梢ちゃんは「鼓は友達です！」の一点張りだった。

私が真剣に聞いても同じように答えるのかしら。

梢ちゃんと目が合う。真っ直ぐに見る眼差しはいつ見てもキレイだと思う。

「鼓は私にとって、とても大事な人で、大切な友達です」

「…梢ちゃんが鼓君を信頼してるのはよく分かるわ」

「なら、どうしてそんな事聞くんですか？」

梢ちゃんが恋を敬遠してるのは知ってる。ついこの間までは友達だって敬遠してた。

だって、それは…。

「…まだ、怖いのかしら。人を信じるのは？」

「宮下さん、私はもう子供じゃないんです」

孤独の中にいた頃とは当然違う。

「誰だって傷つくのは怖いでしょう」

「鼓は私を傷つけようとした事なんてありません」

「傷つけようとして傷つく事だけじゃないでしょ」

梢ちゃんは押し黙った。何も言えない…そんな感じだ。傷つけようとして傷つく事だけじゃない。

そうやって私たちは傷ついて、傷つけてきた。傷の大小様々、思いつけないような傷もきつと。

「宮下さんはどうして恋にこだわるんですか？」

違う意味で鼓君と同じ事を言う。本意は全く違うとわかるのに。

じゃあ、久しぶりに本音でも伝えてみようかしら。

「それはね、梢ちゃんに恋をして欲しいからよ」

あら、そんな「どうして??」「なんて顔しないで梢ちゃん。

梢ちゃんはまだ知らない。

人が変わるきっかけは人との衝突やトラウマだけではない。

人を好きになる事。恋をする事で人は大きく変わる。

内面、外見を問わず。

私は梢ちゃんが好きな人に”可愛い”と思われたいと考えながら服選びに悩む姿が見たい。

そんな幸せな光景を私は見てみたい。

友達が家に来るからとはりきってケーキを焼いたあの時みたいに誕生日だからといつも以上真剣にクッキーを作った時みたいに。

「私は、梢ちゃんに幸せになってほしいの」

誰かの為に一所懸命になれるって、とても素敵なことだから。

「宮下さん。望んで幸せになれるなら人は苦労しません」

「ふふっ、そうね」

いくら大人になっても、成長しても梢ちゃんは変わらない。

それを微笑ましく思うし、嬉しく思う。

「でも…宮下さんの気持ちはわかりました」

「だからって鼓とは純粹に友達ですからね!!」

今はそついう事にしておきましょうか。

41話 宮下翔子の進撃（後書き）

大好きだ！！宮下さん！！

42話 ああ、やっぱり俺には拒否権が無い

夏休みも三週間が過ぎようとしていた。

日々バイト漬け、バイト以外にしてる事といえば得体の知れないサークル活動でスポーツ観戦をするくらい。

夏休みを謳歌するまでいかないが、そこそこに満足していた。

今更ながら、俺は小さな洋食屋の厨房でバイトしている。

元々は皿洗いだっただが、話してる内に家で少し家事をしてる事がバレ、それから野菜の皮むき中心の料理人見習いみたいな事になる。

働き始めて4ヶ月ちょっと、おかげで野菜の扱いならさまになるようになった。

今日も1日、ニンジンと玉ねぎの皮をむき、その他モロモロの仕事をして平穩に平和に過ぎるはずだった。

しかし、来訪者はいつだって突然やってくる。

それはまだ、朝の8時を過ぎたくらい、店はもちろん開いてない。厨房は昼の仕込みに追われ、俺もせつせとニンジンの皮をむいていた。

来訪者は正面からでなく、裏口からやってきた。

「鼓君！ああつ、知ってたけどやっぱり居るね」
突如、従業員用のドアつまり裏口からミントの香りでもするんじゃないかと思うほど、爽やかな見た目好青年の博樹さんが入ってきた。

俺は素直に驚いた。

博樹さんが俺のバイト先を知ってる事にじゃない。

博樹さんが無遠慮に俺のバイト先にやって来た事に驚いたのだ。

博樹さんは厄介事を運んでくる人だけど、はた迷惑な事はしない人だと思っていた。

今の今まで。

ただ、俺が博樹さんに声をかけるよりも前に博樹さんの名前を呼んだ人がいた。

「博樹君、久しぶりだね」

オーナー兼料理長つまり俺の雇い主の梅木さんが親しげに博樹さんに近付いて行く。

「梅木さん、お元氣そうで。あの、突然で申し訳ないのですが。鼓君を貸してもらえませんか」

「1日中かい？」

「はい」

「うーん、仕込みの半分も終わってないから…」

「10分で白崎（しづま）を来させます」

「ああ、それならいいよ」

あつという間に当人を取り残して、話は勝手に唐突に決まった。

「鼓君、いつてらっしゃい」

にんまりと笑う梅木さんに見送られ、俺は拒否する間もなく、博

樹さんの車に詰め込まれた。

「色々聞きたいだろうけど、今はそんな暇ないから簡潔に言う。以前、俺はあの店で働いていた。今日、鼓君の代わりをしてくれる白崎もそうだ。」

つまり、俺は大学の先輩でもあり、バイト先の先輩でもあるってこと」

だから、梅木さんとも顔見知りで、俺は容易く連れ出された。なんて都合の良すぎる話。

「言っておくけど、鼓君のバイト先に関しては君の方が俺の縁がある所に飛び込んできた形だから」

「実は梅木さんもグルだったってオチじゃないんですか」

「君一人填めるのに店一つ買収するなんて、労力がかかり過ぎてる。合理的じゃない」

誰も填めるとか買収とか思っていないし、そこまで大きな話とは思っていないし。

普通の大学生にそんな事できる訳ないだろう。

ただ俺は、俺がバイトしていると知って梅木さんと知り合いになっただけなのになのに。

前から知り合いとか都合良すぎるだろうって話だろ。

「まー、知らないって知ってるけど。俺、普通の大学生じゃないよ。それに鼓君、心の声うっかり喋ってるよ」

おっと、それはまずい。

「こればかりは偶然だからどうにもならないけど、疑うなら梅木さんに聞いてみなよ」

「わかりました。その話は取りあえず置いておきます。」

博樹さん、俺はどこに連れて行かれるんですか？」

「そういえば、そこに関しては全く説明してなかったね。実は梢ち

やんがテニスの試合に呼ばれたんだよ」

「それっていつもの事じゃないですか」

「いつもだったら前もって博樹さんが予定を組むか。」

「いや、急な依頼でも俺がバイトだと知れば山城も納得して試合観戦に行くだろう。」

博樹さんだつて一緒なんだし。」

「今回は女子テニス部の試合なんだ」

「えっ！」

「しかも、参加する方の助っ人」

「はいっ！？なっ…つまり、山城が試合するんですか」

「そういうこと」

「どうしてそんな事に…」

「部長から熱烈なオファーが今朝来て、俺が渋ってたら本人に直接いつちやっみたいなんだよね」

「それで今、俺がバイト先から拉致られるハメになった訳か。」

「山城はそれを受けたんですね」

「私ができる事で困ってる人を助ける事ができるなら本望です
だつてさ」

「うーん、山城らしい。すっぱりさっぱりしてるな。」

「ん？じゃあなんで俺を連れて行くんですか」

「山城は俺がいなくても試合に行くんだから、俺必要ないじゃん。」

博樹さんは大きな溜め息を吐いた。

「分かってないな、鼓君。野球部のコーチの言葉覚えてない？」

「えっ、あのコーチですか？」

「期待されるという事はとても大事なことなんです。」

「それが自分の大切な人からの期待なら人は大きな力を発揮する
とができるんです」

「コーチが言っていないことまで言っていますよ」
「コーチの心の声を代弁したただだよ」

42話 ああ、やっぱり俺には拒否権が無い(後書き)

1ヶ月ぶりです。放置しっぱなしですみません。

またポチポチと書いていけるようになったので、期待せずにお待ち下さい。

43話 私でお役に立てるのでしたら(前書き)

梢ちゃん視点です。

43話 私でお役に立てるのでしたら

今日は珍しい事が起こる日です。

朝食時にチャイムが鳴ったり、
しかもそれが「梢ちゃん、大学のテニスサークルの部長さんって人が来てるけど」と宮下さんが伝えてくれたり、
木野村の家と間違えたのでしょうか？とモニターを見てみるとそこに映っていたのは女の人だったり。

「お願い、山城さん助けて！」

そうモニター越しに懇願されたり、
珍しい事ばかり起きます。

女の人に懇願されては話を聞かない訳にはいきません。

部長さんをリビングに通そうと思ったのですが、部長さんはよほど焦っていたのか玄関で話し出しました。

「突然でごめんね、あの山城さんって助っ人でしょう。」

今日テニスの試合なんだけど一人ケガしちゃって出られなくなっ
て…。

山城さん代わりに出してもらえない？」

「あの、私テニス経験者ではありませんが…それに授業ぐらいでしかやった事ありませんし…」

「それでもいいの、取りあえずベンチに座るだけでいいから、お願い
い！」

ベンチに居るだけなら…いつものスポーツ観戦と変わりませんよ
ね。

「…わかりました。私でお役に立てるのでしたら」

「本当！ありがとうございます！」

部長さんは部員さんのケガの事を他の部員さんに伝えなくてはいけないからと、会場まで地図と時間を告げて去って行きました。

嵐のような人です。

「梢ちゃん、さっきからケータイが鳴ってるよ」

「えっ」

私のケータイが鳴るなんて、これもまた珍しい事です。

ケータイの表示を見ると木野村からの着信です。

ああ、そうです。先日、着信拒否を解除したんです。

「もしもし」

「あっ、梢ちゃん。もしかしてテニス部の部長から助っ人頼まれたりしてない？」

「つい先ほど、了承した所です」

「えっ、梢ちゃん引き受けたの！」

「目の前で懇願されましたし、それに私ができる事で困ってる人を助ける事ができるなら本望です」

「あゝ、直接行ったんだ。…あの人、俺が渋るの分かってたな」

「そういえば、なんで木野村が知っているんですか」

「これでも部長だからね。一応、俺の所に話がきたんだよ。

断ろうとしたら電話切られて、もしかしたらって思ったら梢ちゃん引き受けてるし」

「なぜ断るんですか。助っ人部の本来の姿ではありませんか」

「そうだけど…そっか梢ちゃんは知らないか」

「木野村、もう出ないといけない時間なので切りますね。私は一人で大丈夫ですから」

「ちよつとこずっ…」

さて、動きやすい服を探さなくては…。

いくら座ってるだけでもその場に合った服装でなくてはいけません。

「宮下さん、テニスに適した服装ってどんな服でしょう？」

「うーん、こんなんじゃないかしら」

宮下さんはどこから取り出したのかピンクのラインの入ったテニスウェアを私の目の前に広げました。

「…なんで、あるんですか」

「知らなかった？ 梢ちゃんのお母さん、学生時代テニス部だったのよ」

あの母が！…初耳です。

「それより急がなきゃいけないんじゃない？」

「はっ！ そうでした」

時間より10分早く、会場に着きました。

早く部長さんに会わなくては、こんなこと初めてなのでどうしたら良いのか全く分かりません。

「山城さん、こっち」

部長さんは水色のテニスウェア姿で私を待っていてくれました。

「急で本当にごめんね。ウェアとかラケットは予備があるから安心して」

「あの、テニスウェアは母のを借りてきました。ラケットは…貸して下さい」

そうです。手ぶらで座っているなんて不自然です。…そこまで考えていませんでした。

「ここが控え室だから荷物置いて」

私は驚きました。

大きな控え室が狭く見えるほどの人が突然の来訪者である私を見つめます。

隠しもしない悪意のある視線で私は穴が開きそうです。女子の集団の中に入る、この久々の感覚。

…高校の時以来です。沢山の敵意を持った女の子に囲まれるのは私は迂闊でした。

私を助っ人に呼ぶくらいなのだから人手が足りないのだと、そう単純に思っていました。

木野村が断ろうとした理由は…こういう事だったんですね。

木野村は女子テニス部がどれほどの規模か知っていた。

助っ人など必要としない程、人で溢れていることを。

「山城さん、話があるの」

部長さんがにこやかに私に声をかけました。

「はい」

荷物を置けと言われましたが、それはできませんでした。

部長さんはその事に触れませんでした。

控え室を出て部長さんは、人の少ない廊下へやって来ました。

「山城さん、今回の試合にはね3連覇がかかっているの」

「なら、私よりもずっと練習していらっしやる部員さんが適切だと思います」

部長さんは廊下に出てから笑うのを止めていました。

朝、モニター越しに懇願した姿も演技だったんだと分かります。

なぜ、私は分からなかったのでしょうか。

ここ数ヶ月…私の周りにこういう人がいなかったからでしょうか。「王者なんて呼ばれるとね。人は怠けるのよ。」

だから山城さんには生け贄スケープゴートになってもらうわ」

私をみなさんの奮起材に仕立てるのですね。
部長さんの思惑は分かりました。

だから、テニス経験者でもない私を試合に出すのですね。

しかし生け贄にするには致命的な欠陥があります。

「私が勝たないと生け贄にはなりません」

勝つてこそ、私のような者に負けた敗北感が奮起材になるのでしよう。

「大丈夫よ。私が必勝法を教えてあげるから」

私はテニスウェアに着替えて、部長さんから借りたラケットを外で振っていました。

木野村には一人で大丈夫だと電話で言いました。
けれど、今はそれを少しだけ後悔しています。

不思議です。

一人で挑まねばならないと思うだけで手足が震え、まともになんて立てないんじゃないかと思えます。

私はこんなにも弱い人間だったのでしょうか。

時間はあっという間に試合が始まる時間になりました。

コートに出るといないと分かってるのに、つい探してしまいまし

た。

私は知っています。

鼓は今日、バイトで忙しいんです。

「山城っ」

なのに、鼓と木野村は私のすぐ後ろの観客席にいました。

「頑張れ！」

驚きと共に不思議と勇気と安心が私の中に広がりました。自然と背筋がスツと伸びます。

ああ、私は一人で挑まなくてもいい。

私には…私を応援してくれる人がいる。

43話 私でお役に立てるのでしたら（後書き）

女子テニス部編はあと1話残っている…年内に書ければなあと思っ
てるけど、

思ってるだけに終わるかもしれない。

44話 それは、博樹さんでしょ。

急いで来たおかげで（または、梅木さんがあっさり俺の拉致を了承したから）俺達は試合開始30分前に試合会場に到着した。

しかし、すでに観覧席には沢山の人でごった返していた。

夏の日差しの下での立ち見はきついなあと思っていると博樹さんがスイスイと人混みをかき分けていった。

まるで目的の場所があるみたいな足取りで。

博樹さんの後についていくと、そこだけぽっかりと二席空いていた。
た。

しかも最前列。

俺は思わず、前に立っている博樹さんに聞いた。

「博樹さん、これは偶然ですか？」

もしかして、誰かが場所取りをしているのかもしれない。…そう考えるのが普通で一般的。

博樹さんはにこやかに笑顔を作って、当たり前のようにその空いている席に座った。

「そうだよ、鼓君。偶然、超ラッキー」

「そんな訳ないでしょ！」

まっすぐここまでやって来たのは誰ですか！

「取りあえず、座りなよ」

話はそれからだと言わんばかりに笑顔を崩さない博樹さん。

俺が博樹さんに逆らえるはずもなく、ここで逆らった所で何がどうなる訳でもなく、俺は大人しく博樹さんの隣に座った。

「テニス部部長のメールに席は用意してあるってあったんだ。まさか最前列だとは思わなかったけど」

博樹さんは苦笑いを浮かべていた。なんで苦笑い？

「さて、鼓君。時間もあるしさつきは手短に済ませたけど、なんで梢ちゃんが助っ人を頼まれたか話しておこうか」

「なんでって、人数合わせじゃないんですか？」

「女子テニス部は50人以上の部員を抱えてる。当然、補欠部員だった潤沢だ」

「はっ？全く話が見えないんですけど。…もしかして山城ってテニス強いんですか？」

「技術的には授業でやった程度だと思うよ。体力面は心配してないけど」

「なんでですか？」

「だって毎日毎日重たい辞書を平然と鞆の中に入れて持ち運んでいたんだ。梢ちゃんは見た目より体力あるよ」

確かに、分厚い辞書を大事そうにでも平然と持ってたな。

「いや、でもなんで山城を試合に出すんですか。意味がわかりません」

「そうだね。普通に考えたらおかしい。

まあ、俺は顔が広いからテニス部の実情を知ってるし、

部長がどうして梢ちゃんを使うか分かるけど

…本当は断って欲しかった」

「博樹さん？」

「梢ちゃんは利用されるんだ。周りは敵だらけの中で生け贄としてよく考えるんだ鼓君。この状況を。

君が部員だったらどう思う。練習しても試合に出られるチャンスは一握り。

なのに、部長の一存で部外からテニス経験者でも無い人間が試合に出る事になったら」

「…腸が煮えくり返りますね」

「しかも、その人が試合に勝ったらどうする」

「……やめるか、今以上に練習するしかないですね」

「部長の狙いはそこ、特に前者が強い。だからこの方法を取ったんだろっね」

「なんでですか？止めさせたいなら方法はいくらだって」

「彼女にはこの方法しか無かったんだと思う。全ては俺の推測に過ぎないけど」

「博樹さんには何が分かってるんですか？」

「…多分ね。どっちかっていうと嘘であって欲しいんだけど。」

今回試合に出られなくなった人は出場メンバーの中で唯一1年生だったんだ。

ケガで試合に出られないって聞いてるけど、そのケガは…本当に事故だろうか？」

「…まさか」

「そう思うと腑に落ちるんだ。」

その人間が誰か分からない中、部長はその人間をどうしても試合には出したくない。

だから外から人を呼んだ。すごくシンプルで最初はその思いだけだったかもしれない。

「…だけど彼女は効果的に利用できることに気がついてしまった」

姑息な手を使った人間を自主的に辞めさせる事と部員のやる気を引き上げる事。

「…後者の為には憎まれる敵が必要になる。」

「…山城は」

「察しがいいから、何の為に呼ばれたかくらい分かっているとと思うよ」

「…どうしてそんな事が出来るんだ。俺には分かりません」

「それは…絶対に手に入りたいモノがあるんだよ。」

「…そのためだったら策を練るし、いくら非道と言われようが手段を」

選ばない」

「博樹さんには分かるんですね。…そうですね」

「どうした？」

「もういいじゃないですか。俺がいなくても山城はどこにでも行きますよ」

山城はよく笑うようになった。

最近は警棒を持ち歩かなくなったらしい。

それは、博樹さんが側にいるから。

和解してから二人の距離は目に見えるほど近くなった。

山城が博樹さんを信頼してるのがよく分かる。博樹さんも、山城を…。

ああ、俺が連れ回される意味なんて…本当にどこにも無い。

「本当にそう思うのか」

「事実を言ってるだけです。もういいじゃないですか、俺は邪魔者なんですから」

「今日はえらく卑屈だな。鼓君は梢ちゃんが好きじゃないのか？」

「それは、博樹さんでしょ」

「はあ？」

「博樹さんは山城のことが好きなんですよ！」

「……………ぷっ」

「なんで笑う…！」

「あー、なるほど。まったく、盲点だったよ。まさかそんな風に見られてるとは思ってたかった。」

鼓君、安心しなさい。俺は梢ちゃんのこと好きじゃないから」

「そんな嘘を」

「確かに、梢ちゃんは大切な人だ。でも俺にとって梢ちゃんは妹み
たいな存在なんだよ。」

大事な人に変わりないけど、それは恋じゃない」

きっぱりと言われた。

”それは恋じゃない”

「ほっとした？」

「いや、違うんです。俺はそうなのじゃ……」

違う、俺は山城の友達でほっとするとか安心するとか違うから！

「あつ、梢ちゃんだ」

いつの間にか試合が始まる時間になっていた。

コートに現れた山城は、少し背筋が丸くなっているような気がし

た。

なんだかその姿が弱く力なく思えた。真っ直ぐな山城らしくない。

「山城っ」

気がついたら、考えるよりも先に声が出ていた。

俺たちを見つけた山城は心底驚いていた。

「頑張れ！」

俺の声に山城は笑った。

背筋はピシッと真っ直ぐ伸び、覚悟の決まった目でコートにむかって行った。

俺の隣りで博樹さんがクスクスと笑っている。

ああ、皮肉に一つでも言ってくれればまだ救われるのに…。

44話 それは、博樹さんでしょ。(後書き)

ちよつと一話に詰め込み過ぎた。

でもキリどころが見つからなくて長くなってしまった。

ああ、鼓をからかうのは楽しい

45話 初、打ち上げ（前書き）

今回は博樹さんの視点です。

45話 初、打ち上げ

女子テニス部の試合は一つの黒星をつけることなく、三連覇を果たした。

絶対王者の貫禄を見せつける部長とは裏腹に部員達は複雑な表情をしていた。

居心地の悪い場所に長居する主義じゃないので、

俺は鼓君に梢ちゃんを回収させ、二人を車で拾って…今ここにいる。

「梢ちゃん、勝利おめでとう！」

三人ジュースで乾杯する。俺たちは今、ファミレスにいる。

せっかくだから梢ちゃんを労う事になり、でも昼間から居酒屋はやってなので結果、ファミレスになった。

打ち上げと言ってもご飯食べるだけだけど。なんせファミレスだし。

「山城って凄いな。テニスやってた訳じゃないんだろ」

「はい、授業でやったくらいで…私もまさか勝てるとは思いませんでした」

試合はテニス部部長の筋書き通りにまるで仕組まれているみたいに進んでいった。

彼女が梢ちゃんの実力をどこまで知っていたか分からない。

見た目より体力がある事。

サーブだけをキレイにライン際に決められる事。(これは天性の才能)

人の行動をよく見ている事。

対戦相手はさぞ驚いただろう。

代わりの選手がテニス経験者で無いことは相手も知っていたみたいだし、その相手がいきなりサーブを決めるなんて考えられない。狙い通り、相手の調子は狂わされっぱなしだ。

何より、梢ちゃんの後ろには鼓君がいた。

そのおかげで、好プレーがあつたのも事実。

だけどこの手は二度と使えない。

だまし討ちだからこそ勝てただけ。

どこまで彼女の想定内部長だったか分からない。でもまあ結果は出したから良いか。

「まさか鼓が来るとは思いませんでした」

「博樹さんに拉致されたから」

「木野村っ！何をしてるんです！！」

「鼓君が居てくれて心強かったですよ。梢ちゃん」

少しは俺に感謝して欲しいくらいなのに。

「…確かに、心強かったです。…でも、また鼓に迷惑をかけてしまいました」

「今日のは不可抗力みたいなもんだから気にするな」

しよげる梢ちゃんに優しい言葉をかける鼓君。

全く今にも梢ちゃんの頭を撫でてしまいそうな雰囲気だ。

これで友達と言い張る二人にも困ったものだ。そのうち宮下さん

の圧力が俺の所までくるんじゃないか？

「それより山城の方が大変だったろ」

「いえ、私より部長さんの方が大変です」

ん？梢ちゃんは自分を利用した相手を心配するのか。

全くどこまでお人好しなんだか。そうやって呆れた自分自身をこの後、俺は恥じた。

「これから針のむしろに座り続けるのは部長さんですから。私なんてたかが一日です。」

部長さんはこれから壊れてしまったテニス部と一人で立ち向かっていくんです。

それを思うと…私は最善を尽くす事しかできませんでした」

梢ちゃん（イシキ）は…。利用された事も全て分かっているながらそんな言葉を言えるようになったのか。

「梢ちゃん。成長したね」

「なんです！私はいつまでも子供ではありません！！」

すぐムキになる所は昔と変わらない。

でも梢ちゃんはしっかりと確実に成長している。

純粹に嬉しかった。

梢ちゃんが、あの弱くて脆くて守ってあげなくては生きていけないかった女の子が…

強く、優しく、美しい、女性へと成長している。

頭ではわかってるつもりだった。

でも実際に目の当たりにすると、ああ本当に嬉しい。

けど、「ごめん」。

この感情を素直に言葉にできるほど俺は純粹でも真っ直ぐでも無くなってしまうた。

困ったように梢ちゃんが目線が下に落ちる。

「そんな風に笑わないで下さい。木野村らしくありません」

俺は一体どんな風に笑ってる？いつも作ってる笑顔と何か違うのか？

その答えを鼓君が教えてくれた。

「博樹さん、すごく嬉しそうですよ」

ああ、言葉にしなくても伝わってしまうものなのか。

ならばいつそ言葉にしてみましたおう。

「だって、すごく嬉しいから。本当に嬉しいんだ」

人前でなかつたら泣いてしまっくらいに。
梢^{きみ}ちゃんの成長が嬉しくてたまらない。

45話 初、打ち上げ（後書き）

はあく、やっと博樹さんの兄心を書けた。

この人はどこまでいっても兄的存在なので、今更ながらどうぞよろしく願います。

三角関係みたいなモノを期待していた方すみません。そんな心がハラハラするモノ書けません（<―>）

基本属性ほのぼのですので、しばらくお付き合い下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4167k/>

恥ずかしいセリフの何が悪い！

2012年1月8日23時54分発行